Fire Emblem

ファイアーエムブレム

紋章の謎 VOL.2

●小説
高屋敷英夫
●イラスト
おち よしひこ

SUPER
QUEST
BUNKO

SUPER QUEST
BUNKO

ファイアーエムブレム

紋章の謎

VOL.2

●小説
高屋敷英夫
●イラスト
おち よしひこ

「どうしてこんなところにいるんだ？　チキは元気か？」
マルスが尋ねると、バヌトゥは首を横に振った。
「ガトーさまが氷竜神殿へ連れて行かれました」
「氷竜神殿？」
「はるか北の果ての氷の大地にある神殿です。しかし、勇者アンリの他に今までだれも訪れた者はない」
「アンリ？　もしかして、そこは勇者アンリの伝説に出てくる神の国なのか？」

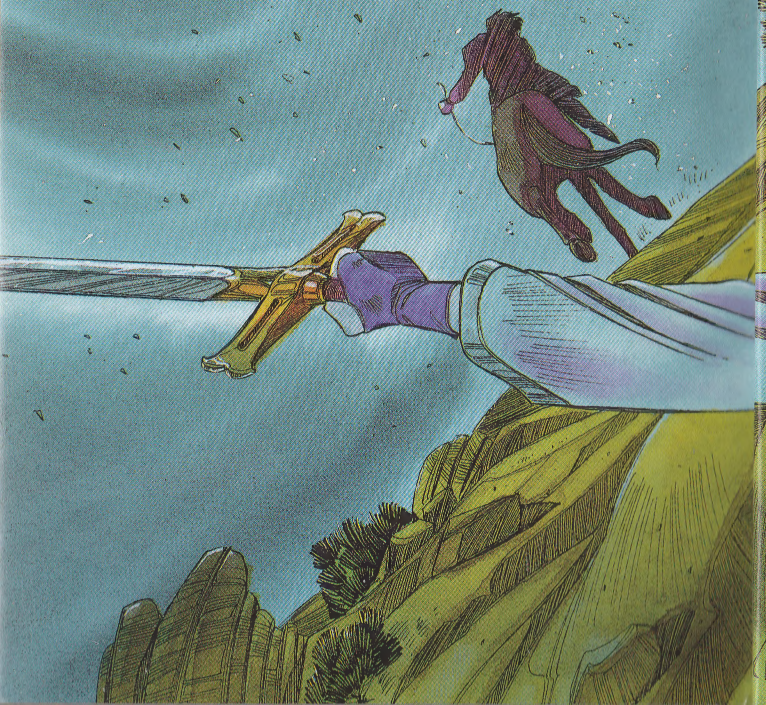
（本文より）

SQ

ファイアーエムブレム
紋章の謎

その長い髪が男の背後の宙に優雅に舞いあがると、月光を浴びた長剣が一閃した。

「ナバール！」



エリスは、マルスたちの無事を祈り、王国の平和を願う。王女として、姉として、内に強い心を秘めて…。

スーパークエスト文庫

SUPER QUEST
BUNKO

ファイアー
エムブレム

紋章の謎 VOL.2

高屋敷英夫

イラスト
おち よしひこ

小学館

ファイアーエムブレム紋章の謎──発場人物紹介──

アリティア王国

暗黒戦争後、人々は平和をとり戻していたが、予期せぬ戦火と企みに、まみれてゆく。

ジェイガン
騎士団の軍師

エリス アリティア王国の王女。マルスの姉。

マルス アリティア王国の王子。この物語の主人公。

ドーガ 傭兵部隊長

ゴードン 弓部隊長

カイン 王国の留守をあずかる。

アラン 騎士団隊長

▶ルーク

▶セシル

▶ライアン

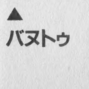
▶ロディ

▲バヌトゥ

▶フィーナ

▶ナバール

▶大賢者ガトー



◀マリーシア

◀リンダ

◀仮面の騎士
シリウス

マケドニア王国

王女を中心として王国再建のただ中にあるが、クーデターが起こっている。

ミシェイル(左)
ミネルバ(右)
マケドニア王国の王子と王女。

パオラ

カチュア

レナ

マチス

タリス王国

ドルーア戦争後、マルスが落ちのびていた辺境の島国。2年間をこの国で過ごした。

▶シーダ
タリス王国の王女。

◀オグマ

グルニア王国

暗黒戦争後、アカネイア帝国の支配下に置かれている。

サムトー

ユミナ　ユベロ
グルニア王国の双子の王子と王女。

カダイン

魔道を学ぶための学院が自治を行う都市国家。

マリク

ヨーデル

ウェンデル

エルレーン

▲ダール

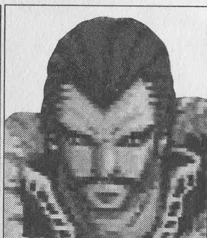
▶レイソル

▶ジュリアン

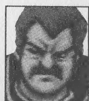
◀リカード

◀カシム

▼ハーディン
アカネイア帝国皇帝。



ラング



トラース

ジョルジュ

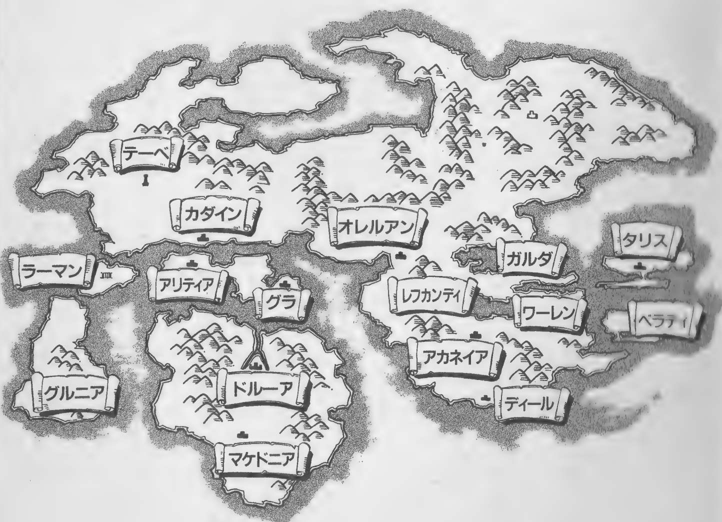
アストリア

ミディア

目次

ファイアーエムブレム　紋章の謎　VOL. 2

アカネイア大陸 全域



テーベ
カダイン
オレルアン
タリス
ガルダ
ラーマン
アリティア
グラ
レフカンディ
ワーレン
ベラティ
アカネイア
グルニア
ドルーア
ディール
マケドニア

前巻のあらすじ

先の暗黒戦争が終わってから二年後の冬――。
二の月の四の日、アリティアの王都は春告祭で賑わっていた。
その夜、早馬によってマルスのもとにハーディンの親書が届けられた。
親書には、『アカネイア帝国の占領下にあるグルニアで、大規模な反乱が起きた。ついては、貴国にグルニア反乱軍討伐の手助けをお願いしたい。ただちに、アリティア軍を率いて出撃し、グルニアの反乱を制圧せよ』――と書かれていた。
先の戦争をマルスとともに戦いぬいたハーディンは、戦後アカネイア王国のニーナ王女と結婚したが、昨年の秋、突如アカネイア神聖帝国を宣言し、自ら皇帝となっている。
マルスは、ただちに遠征隊を組織し、グルニアへ出発した。

グルニアは先の戦争でドルーア帝国に加担して破れたため、戦後アカネイアの支配下におかれたが、ニーナの計らいで、元グルニアの将軍ゲオラ・ロレンスがグルニアの統治と再建にあたった。

ところが、ハーディンがアカネイア帝国の皇帝に即位すると、ロレンスは更迭され、新総司令官としてカナルト・ラング将軍がグルニアへ送りこまれた。

ラングは悪辣な恐怖政治を行い、グルニアの人々は地獄の日々を強いられていた。

このラングに立ち向かったのが、なんとロレンスだった。

遠征隊が到着すると、ロレンスが立て籠もる砦を取り囲んでいたラングは、

「ロレンスの首を撥ね、匿われているグルニアの王子と王女を捕らえられよ」

とマルスに命じ、討伐軍を率いて立ち去った。

先の戦争でともに戦ったロレンスの首を撥ねることなどマルスにできるはずがない。

それを承知の上で、ラングはマルスに無理難題を押しつけたのだ。

翌日、マルスはロレンスに会って反乱の真相を聞くと、ロレンスの口から思いもしない人物の名前が出た。

「ハーディン殿は、グルニアをアカネイアの領土にするために、グルニア王家の血を引く者を抹殺し、グルニア王国の再建の根を絶とうとしているのです。そのために極悪非道なラン

グを差し向けたのです。ラングはグルニア人を徹底的に苦しめることによって、われわれを巧みに挑発し、われわれを反乱軍に仕立てあげた」——というのである。
あのハーディンが——？　マルスには信じられなかった。
「ハーディン殿はすっかり人が変わってしまった。もうあなたの知っているハーディン殿ではない。あなたにひとつだけお願いがある。この砦にグルニア王家の王子と王女が匿われている。どうか、幼いその子たちを助けてほしい……」
その直後、反乱は意外な展開であっけなく結末を迎えた。
なんと、ロレンスが自らの手で命を絶ってしまったのだ。
ラングの司令でマルスが来たということを知って、ロレンスは大きな衝撃を受けたと同時に、ラングの思惑を読みとった。
ラングにすれば、マルスが司令に従えば、それでいい。
もし背いたら、マルスを反逆者に仕立てればいい。
だが、正義感の強いマルスの性格からすれば、結果として司令に背くことになるのは火を見るより明らかだった。
そうなれば、マルスや遠征隊は反逆者としてアカネイア軍の攻撃の目標にされ、戦火はグルニアだけでなくアリティアにも飛ぶ。
そこで、ロレンスは決断した。自らの命を絶つことが、マルスを救う最善の策だと。

取り返しのつかない事態になって、初めてマルスはそのことに気づいた。

〈自分のいたらなさと配慮のなさが将軍を殺してしまった——〉

悲しみと悔恨に、マルスは全身を震わせて嗚咽（おえつ）した。

そこへ、ラングの率いる討伐軍が一気に攻めこんで来て、

「マケドニアでクーデターが起き、王女ミネルバが捕らわれた。ただちにマケドニアへ赴き、反乱を制圧されよ」

ラングは再びマルスに命じ、グルニア王家の王子と王女を連れ去ってしまった。

その巧妙な手口と残忍なやり方にマルスは怒りを覚え、ラングを追おうとしたが、

「落ち着いてください、マルスさま！」

軍師ジェイガンは必死に引き止めた。

「ここでラングと戦えば、われわれも反逆者にされてしまいます！　今のわれわれにはラングと戦うほどの戦力はないのです！　とにかく、今は我慢を！　ロレンス殿の死を無駄にしないためにも！」

マケドニアへ赴いた遠征隊は、リュッケ将軍率いる反乱軍を制圧した。

だが、王女ミネルバは、先の戦争でミネルバに殺害されたと思われていたミネルバの実兄のミシェイル王子によって、何処（いずこ）へともなく連れ去られていた。

そこへ、ラングがアカネイア軍を率いて現れ、マルスに新たな任務を命じた。
「オルベルン城が何者かに襲われ、グルニアの王子と王女が連れ去られた。おそらく、賊はタリス国のオグマ・スビルではないかと思われる」
オグマは先の戦争でマルスとともに最後まで戦ったタリス王国の戦士だが、戦後グルニアの再建を手伝うためにタリス国王からロレンスのもとへ派遣されていた。
「やつらはマケドニアへ逃げこんだらしい。ただちに王子と王女を連れ戻すのだ」
だが、マルスは毅然（きぜん）とした態度で拒否した。
「断る！　あなたの指図は二度と受けない！」
遠征隊の騎士たちも同じ気持ちだった。
ラングの傲慢（ごうまん）で高圧的な言動に、我慢の限界にきていたのだ。
グルニア王家の王子と王女を保護したら、マルスはアカネイア帝国の王都パレスへ行ってハーディンや王妃ニーナと話し合うつもりでいた。

ところが――。
桜が満開のホルム海岸で、グルニアの王子と王女を連れて逃げのびていたオグマとやっと再会したその夜のことだった。
遠征隊が海賊レイソルの館に世話になっていると、アリティアに滞在しているはずのタリ

ス王国の王女シーダが突如やって来て、
「七日前の夜……」
涙を浮かべながら驚くべき事実を告げた。
アリティア城がアカネイアとグラとオレルアンの連合軍の奇襲を受け、アリティアの騎士団は全滅、城はアカネイア軍の手に落ちた――というのだ。
マルスや騎士たちに大きな衝撃が走った。
七日前ということは、遠征隊がホルム海岸へ向けて王都マケドニアを出発したちょうどその日にあたる。
その一〇日前に、マケドニアの反乱を制圧し、ラングの命令を拒否している。
ということは、わずか一〇日の間に、ハーディンがラングの報告を受けてアリティアへ出撃したということになる。
だが、そんなことは時間的にも物理的にも不可能だ。
最初から、用意周到に準備されていたとしか考えられなかった。
このとき初めてマルスたちはグルニア遠征が仕組まれた罠だったことを知らされた。
ハーディンは最初から、マルスたちをアリティアから遠ざけておいて、その留守にアリティアを襲うつもりだったのだ。
だから、ハーディンはラングにマルスを挑発させたのだ。

アリティアを攻撃する口実を作るために、マルスに無理難題を押しつけ、マルスが命令を拒否するのを待っていたのだ。

「アリティアはどんなことをしてでもかならず取り返してみせる!」

怒りに涙を流しながらマルスは固く心に誓った。

雷光と強風に花吹雪(はなふぶき)が激しく舞った。

騎士たちもまた怒りと屈辱に全身を震わせ、涙を流しながらいつまでも花吹雪のなかに立ち尽くしていた。

やがて、風は雨を含んだ。

春の嵐だった——。

第5章　グルニア解放

1

帆は、南風を大きくはらみ、その上空を、数羽の海鳥が舞っていた。

船首飾りの半裸の女神像が、穏やかな陽光を浴びている。

のどかな春の大海原に白い航跡を残しながら、三隻の大型帆船が北へ向かって航海を続けていた。

アリティアの遠征隊を乗せた海賊スペリオ・レイソルの船団である。

アリティア城から逃げてマルスを捜しに来た王女シーダがマルスたちに衝撃の事実を告げた夜、ホルム海岸は激しい春の嵐に見舞われ、突風と横殴りの雨に、満開の桜は一夜にしてすべて散ってしまった。

翌朝、ホルム海岸には抜けるような目映(まばゆ)い青空が広がっていたが、アルツの村の家々の屋

根や通りは濡れてしおれた花びらの絨毯で覆われていた。
衝撃の事実を知らされ、眠れぬまま茫然と夜明けを迎えたアリティアの騎士や兵士たちは、一時ほど仮眠をとると、険しい表情でマルスのもとへ集まって来た。
だれの目にも悲壮な決意がみなぎっていた。
「これからグルニアへ行こうと思う！」
マルスが告げると、だれもが待っていたように力強く頷いた。
「まずラング将軍を破り、アカネイア軍からグルニアを解放する！」
考えていることはだれもが同じだった。
一刻も早くアリティアへ帰り、アリティア城を奪還したい。
だが、その前にあの憎きラングを倒さなければ、気がすまないのだ。
遠征隊は、まずアカネイア軍からグルニアを解放し、そのあとグルニア本島を北上し、アリティアへ向かうことに決めた。
オグマの情報によると、グルニアに駐留しているアカネイア軍の騎馬部隊は弓部隊、傭兵部隊、槍部隊の三部隊を合わせて三五〇騎、歩兵一二〇〇名。
そのうちの一五〇騎と歩兵二〇〇名は現在マケドニアの旧都に駐留している。
その他に、七つある砦にそれぞれ二〇名から三〇名の歩兵が常駐しているという。
また、歩兵の半数ちかくは旧グルニア兵で、報復を恐れて仕方なくアカネイア軍に従って

いる兵が多いはずだ、とオグマは付け加えた。
騎馬や歩兵の数ではかなわないが、敵の戦力をうまく分断すれば、勝機は充分ある。
「それならグルニア本島まで船で送りますよ」
遠征隊の方針を聞いたレイソルがさっそくマルスに申し出た。
レイソルは船団を率いてグルニア本島を西回りでカダインへ行き、さらにはるか西のアカネイアまで行く六カ月の長い航海の旅へ出る準備をしていたところだった。
その間に三〇もの港に寄港し交易するのだという。
だが、出航するまで、準備にまだ一四日ほど必要だった。
そして、九日前の朝、遠征隊を乗せたレイソルの船団はマケドニア白騎士のパオラとカチュアの姉妹に見送られ、葉桜のアルツの村を出港したのだった——。
三隻の大型帆船は、見た目は普通の商船と変わらなかった。
だが、レイソルの説明によると、海賊船を商船に偽装するためにわざとそのように設計してあるのだという。
商船よりも高性能で、左右の舷(げん)には六隻の襲撃用の小型船が設置されている。
またそれぞれ五〇名ちかい乗組員がいるが、いずれも戦い慣れた屈強な男どもだ。
アルツの村を出港してから一〇日目の夜のことだった。
「グルニアですぜーっ！」

帆柱の物見台で監視していた乗組員が大声で叫ぶと、船室で仮眠をとっていたマルスや騎士たちが勢いよく甲板(かんぱん)へ飛び出した。

船首のはるか前方、月明かりに照らし出された水平線に、黒々とした陸地が見えた。

グルニア本島の最南端のキルマ岬だった。

マルスや騎士たちの胸にラングへの新たな怒りがこみあげてきた。

やがて、三隻の船はキルマ岬の東にある波静かな入り江に入った。

その奥に、小さな港と戸数四、五〇ばかりの集落があった。

この港は海賊や盗賊団の略奪品や盗品や闇物資などが取引されるところで、このような港は世界中に六〇ちかくもある、とレイソルが説明した。

大型帆船が入り江に錨(いかり)を下ろすと、さっそく遠征隊は小型船に分乗して上陸した。

そして、レイソルに別れを告げ、夜明けとともに北へ向けて出発した。

六日もすればグルニア本島を貫いているグルニア街道へ出る。

そこから西へ向かえば、ラングの居城があるオルベルンの町まで三日とかからない。

遠征隊のなかには、レイソルの手下として働いていた元タリス国の猟師カシム・ベイロの顔もあった。

四日後の夜――。

遠征隊は山峡のカバル砦に接近していた。

キルマ岬からオルベルンの町へ行くには、キルマ岬とドルーア平野の間に横たわっている険しい山岳地帯を越えなければならない。

そして、この山岳地帯を越えるためには、カバル砦を通らなければならなかった。

月明かりに照らされた砦は、ひっそりと静まりかえっていた。

両側から急峻（きゅうしゅん）な山が狭まったところに砦が築かれていた。

砦は四角い石造りの建物で、南と北に二つの門があり、南から来た通行者は南門を入って中庭にある中央棟で検問を受け、北門から出て行くように設計されている。

南門の上の巡視路には当直の二人の兵が警備に当たっていた。

と、南門から一五〇歩ほど離れた山の急斜面から、

シュルシュルシュル……。

夜の静寂を裂いて、炎の玉が上空へ向かって飛んだ。

炎の玉に気づいた二人の警備兵は一瞬呆気（あっけ）にとられて見ていたが、それが火矢であることがわかると、そのひとりが慌てて笛を銜（くわ）えた。

火矢は大きな放物線を描いて砦の中庭へ消えた。

同時に、砦に緊急を告げる笛の音（ね）が響きわたり、すぐさま二〇名あまりの警備兵が巡視路に飛び出して、山の斜面に向けて弓を構えた。

そのとき、南の街道から蹄音を轟(とどろ)かせて一〇騎あまりの騎馬が砦に向かって来た。
警備兵たちは驚いて騎馬隊へ弓を向けた。
騎馬隊はアリティアの遠征隊だった。
先頭はアリティア国旗を掲げたアランである。
そのあとにマルスやドーガたち騎士が、騎士たちのあとに一〇名の歩兵が続いた。
遠征隊が弓の射程距離に入り、警備兵たちが矢を射ろうとした瞬間だった。
夜の闇をいくつもの鋭い閃光(せんこう)が切り裂き、
「うわっ！」
警備兵たちが次々に悲鳴をあげた。
火矢が放たれた山の急斜面から、矢の嵐が襲ったのだ。
矢を射たのはゴードン、ライアン、カシムの他に歩兵の弓部隊一〇名だった。
裏山から山を越えたゴードンたちが、砦のそばの山の急斜面に接近すると、まず上空に向けて高々と火矢を放った。
火矢は警備兵たちを巡視路におびき出すための囮(おとり)であると同時に、砦の南方の森で待機していた遠征隊への合図でもあった。
遠征隊の作戦はまんまと成功した。
ゴードンたちの放った矢の嵐は的を正確に射ていた。

位の低い警備兵などの兵士は旧グルニア兵である可能性が強いから、わざと命に支障のある急所をはずしたのだ。

戦意を喪失させるだけでよかった。

肩や腕に傷を負った警備兵たちが悲鳴をあげながらのたうちまわっている隙に、南門にたどり着いた遠征隊の歩兵たちが塁壁(るいへき)に縄梯子(なわばしご)をかけて次々に巡視路にのぼり始めると、アリティアの遠征隊だと知って驚愕(きょうがく)したアカネイア軍の隊長は、三騎の騎馬を率いて北門から慌てて逃げ去って行った。

そして、歩兵によって砦の南門が開かれ、騎士たちが中庭に入ったときには、アカネイア軍の隊長たちの蹄音はすでに北の街道に消えていた。

兵士たちが負傷したアカネイア軍の警備兵たちの治療をし、残りの兵士たちが砦の武器蔵や食料蔵から武器や食料を中庭に集めていると、ひとりの兵士が地下牢(ろう)に捕らえられていた二三、四の若い男を連れて来た。

その男がマルスたちを見たとたん、

「あーっ!?」

思わず顔を輝かし、同時に、

「リカード!?　リカードじゃないか!?」

ジュリアンが叫んだ。

「あっ、兄貴!?」
男はジュリアンの弟分に当たる盗賊のリカード・スキルだった。
リカードは、先の戦いで、オレルアン城に忍び込んで捕まっていたところをマルスたちに救出され、その後戦争が終わるまでマルスたちと行動をともにしたが、戦後再び盗賊に戻って各地を転々としていたのだ。
「お久し振りですねえ、兄貴!」
リカードはジュリアンに抱きついた。
「会いたかったですよ!」
「それより、どうしてこんなところに捕まっていたんだよ!?」
「へえ。実はですね、オルベルン城に忍び込もうとしたんですが、見つかってしまいましてねえ。追われてここまでは逃げて来たんですが……」
万事休す——というふうにリカードは首をすくめた。
「なんだ、まだ足を洗っていないのかよ!」
「だって、他になにもできないでしょうが! ガキのころからずっとこれで生きてきたんですからね!」
これ——のところでリカードは人差し指を鉤形（かぎ）に曲げた。
「戦争が終わって、また兄貴としこたま稼げると思ってたら、兄貴はさっさと足を洗ってレ

ナさんについてマケドニアに行っちゃうんだもの。いくらレナさんに惚れたからって、おれを置いて行くことはないでしょうが！」
「ば、ばかっ！」
　とたんにジュリアンは顔を赤らめた。
「ほ、惚れただなんて、な、なんてことを言うんだよ！」
「このこのこのお！」
　リカードはジュリアンの肩を叩いてからかった。
「別に照れることはないでしょうが！　だれだって知ってることなんだから！　そうですよねえ、みなさん！」
　騎士たちに同意を求めると、
「ところで……」
　騎士たちを見回しながら怪訝な顔で尋ねた。
「みなさんこそ、どうしたんです？　お懐かしの面々が勢ぞろいして、なんでこんなところへ来てるんです？」

2

アリティアの遠征隊によってカバル砦が陥落したという報せがアカネイア駐留軍のラング将軍のもとに届いたのは、翌日の夜のことであった。
カバル砦から逃げて来た騎馬によってその報せがアスタ・トラース将軍の指揮下にあるオルベルン近郊のキネラ砦にもたらされ、それを聞いたトラースが血相を変えてラングの居城であるオルベルン城へ赴いたのだ。
報告を受けたラングは、
「ほほお」
鼻先で笑った。
「これはまた予期せぬところへ現れたものだな」
「いかがいたしましょう⁉」
ラングとは逆にトラースは動揺していた。
このような形でアリティアの遠征隊がグルニア本島に現れるとは、ラングもトラースも想像していなかった。
それに、今日の昼、ラングとトラースはこのオルベルン城の宮殿のこの部屋で、マケドニ

ア対策と遠征隊対策をともに練ったばかりだった。
　そして、マケドニアをアカネイア軍の支配下において遠征隊を孤立させ、そのあとアカネイアとマケドニアの連合軍を派遣して遠征隊を壊滅し、グルニア王家の遺児を奪い取るという作戦を決めた。
　それから何時も経たないうちに、カバル砦が遠征隊によって落ちたという報せがトラースのもとに入ってきたのだ。
　遠征隊が順調に進めば、早ければ明日、遅くても明後日には、トラースの隊が駐留しているキネラ砦の目の前まで接近して来るはずである。
「なにをうろたえておるのだ、おまえともあろう者が」
「しかし、将軍……！」
「やつらは四〇名あまり。わがアカネイア駐留軍に比べればものの数ではない」
「が、彼らは単なる戦士たちではありません！」
　先の戦争でトラースはハーディンの配下の騎士として戦い、戦後ハーディンがアカネイアの王女ニーナと結婚すると、ハーディンの側近のひとりとしてアカネイアへ赴いた。
　それだけにアリティアの騎士たちの人並み外れた戦闘能力をよく知っていた。
　トラースはキネラ砦を本拠に槍部隊、弓部隊、傭兵部隊をそれぞれ五〇騎、計一五〇騎と三〇〇名の歩兵を持っているが、それでも心もとないのだ。

それに、ただちに戦闘態勢に入るよう砦の部隊に命じて来たが、部隊の兵士たちも予期せぬ突然の報せにうろたえ、動揺していた。
「飛んで火に入る……とはこのことよ。かえって手間が省けたというものだ」
「は……」
トラースの浮かない顔を見てとってラングは言った。
「のお、トラースよ。もし、手持ちの戦力だけでは不安だというのなら、わしの名で至急ジョルジュを呼んでも構わぬぞ」
「ジョルジュ殿を⁉」
トラースは思わず顔を輝かせた。
ジョルジュ・ライオは、先の戦争でアカネイアの騎士としてドルーア軍と果敢に戦ったが、王都パレスの戦いでドルーア軍に破れて捕まると、自力でアカネイア城を脱出し、マルスたちと合流した。
その後、マルスたちと行動をともにし、最後まで戦いぬいたアカネイアの英雄だ。
そのジョルジュが今、アカネイア軍の一個中隊を率い、カシミアの近郊のトルタ砦にアカネイア駐留軍の援軍として出向いていた。
ジョルジュの隊は騎馬数一〇〇、歩兵三〇〇名で構成されている。
ジョルジュが来るとなればトラースも心強い。

「それにな、トラース……」
もっと近くに寄れ――とラングは指で合図をした。
トラースがラングのそばに寄ると、ラングは囁（ささや）くように言った。
「いずれわがアカネイア軍はマケドニアを支配下に置く。もしおまえが遠征隊を壊滅し、グルニア王家の遺児たちを奪い返したら、そのときは、総司令官としてマケドニアをおまえに任せるようハーディン皇帝に進言してもよい」
「将軍……！」
トラースは熱い眼差（まなざ）しでラングを見た。
ラングはにやりと笑って大きく頷くと、
「とにかく、今は遠征隊を壊滅することが先決。よいな」
「はっ！」
トラースが慌ただしく帰って行くと、
「だれかおらぬかっ！」
ラングは隣室に向かって叫んだ。
隣室で控えていた親衛隊の隊長が現れると、
「例の客人を呼べ！」
と命じた。

「それから、マケドニアへ遠征している軍を呼び戻すのだ！」
ラングは念のために万全の態勢を敷いておこうと考えたのだ。
マケドニアを制圧するのはそれからでも遅くはない、と。
半時後――。
隊長が背中に長剣を携えた背の高い二五、六歳の男を連れて現れた。
首のうしろで紐でひとつに束ねた男の茶色の長い髪は背中まで伸びてい、目は氷のように冷たかった。
孤高の剣士として名高いナバール・ジョルダだった。
先の戦争で、ナバールは悪魔の山の盗賊団の用心棒として雇われていたが、マルスたちと出会うと盗賊団をやめ、戦争が終わるまでマルスたちと行動をともにした。
一匹狼のナバールには、どこのだれが世の中を治めようが、どう世の中が変わろうが、関係がなかった。
マルスたちと行動をともにしたのは、オグマがいたからだった。
剣術の腕を磨くこと以外に興味がないナバールは、今まで数えきれないほどの剣士と対戦し、すべて勝利をおさめたが、唯一引き分けたのがオグマだった。
戦後、ナバールはさすらいの旅を続けていたが、二〇日ほど前にラング直属の刺客として雇われた。

ラングは凄腕の剣士がいるという噂を聞いてわざわざナバールに会いに行ったが、ナバールがいつの日かオグマと決着をつけたがっているのを知って思わずほくそ笑み、高額の報酬で雇うことにしたのだ。

「なんの用だ？」

挨拶もせずナバールはラングに尋ねた。

抑揚のない、低い抑えた声だ。

雇われているとはいえ、ナバールには媚びる態度は微塵もない。

それどころか、横柄でさえある。

「おまえさんが腕を振るうときがきた」

「雑魚なら殺らねえぜ」

ナバールは黙ってラングを見つめた。

「アリティアの遠征隊がすぐそばまで来ている」

「それがどうした？」

「そのなかにオグマがいる」

「なに？」

とたんにナバールの目が光った。

「オグマを殺ったら報奨金はたんまり弾むぞ」

「よかろう」
ナバールはラングの目の前に手を差し出した。
「なんだ？」
「前金だ」
と、横で聞いていた隊長が、
「貴様、将軍に対して態度が大きいぞ！」
「まあよい」
ラングはにやりと笑って隊長をなだめた。
「好きにさせるがいい」
「しかし、将軍！」
そのとき、一際鋭い閃光が宙を切り裂いた。
背中の長剣の柄を握りしめてナバールが身構えている。
柄と鞘の間に青々とした両刃が見える。
ラングも隊長も、一瞬なにが起きたか判断できなかった。
だが、カチャリ……。
ナバールが剣を鞘に納めると、隊長の腰に携えていた剣が、
ガチャ……。

革帯ごと音を立てて床に落ちた。
「おれはおれの流儀でやると最初に言ったはずだ」
ナバールは氷のような冷たい目で隊長に言った。
目にも留まらぬ速さで、ナバールが隊長の腰に巻いている剣の革帯を切ったのだ。
とたんに隊長の顔が青ざめた。
「うっ！」

3

ジョルジュ隊が駐留しているトルタ砦は、ソウルフル・ブリッジと呼ばれるカシミア大橋の北東に位置する峠(とうげ)にあった。
この砦から徒歩で半時ほど東に峠を下れば港町トルタがある。
海が近いために、風向きによっては潮の香りがし、天候のよい日は海鳥が上空を舞うこともあったが、オルベルン城からの早馬が着いた夜、トルタ砦は小雨に煙っていた。
『アリティアの遠征隊がカバル砦を落としてオルベルンへ向かっている。ただちに全軍を率いてキネラ砦に集結せよ』――という早馬によってもたらされたラングの命令は副隊長によって隊長のジョルジュに伝えられた。

「ラングか……」

小雨の降る窓の外を見てジョルジュは溜め息をついた。

アカネイアとグラとオレルアンの帝国連合軍がアリティア城を襲撃した翌日、ジョルジュは軍を率いてアカネイア城を発ち、二五日前にこの砦に着いた。

以来、オルベルン城からの命令がくるのをずっと待っていた。

だが、この遠征はジョルジュにとって気の進まないものだった。

傲慢無礼なラングは、ジョルジュにとって最も嫌いな人物のひとりで、その下で働くことが嫌でたまらなかった。

先の戦争で王妃ニーナに忠誠を誓って最後まで戦いぬいたジョルジュは、戦後その功績が認められて騎士団の弓部隊長に出世したが、昨年の秋ハーディンが皇帝に即位すると、一騎士に格下げされ、ニーナと直接会うことができなくなっていた。

そして、ハーディンが皇帝に即位してから、ジョルジュはハーディンの政策に対して疑問を抱くようになっていた。

最初に疑問を抱いたのは人事異動だった。

アカネイアの再建のために尽くしてきた者はすべて要職を解かれ、先の戦争でアカネイアを裏切った者たちが次々に復職したからだ。

ラングもそのなかのひとりだった。

次に疑問を抱いたのは、ハーディンのアリティア対策だった。
なぜアカネイアとグラとオレルアンの帝国連合軍がアリティア城を襲撃したのかジョルジュには納得がいかなかった。
「ジョルジュさま」
副隊長はジョルジュに答えを促した。
「早馬の使いの者は？」
「今、別室で休んでおりますが」
「牢へ閉じ込めろ」
「えっ⁉」
「ただし、丁重に扱うのだ」
副隊長は意味を測りかねた。
「どういうことですか、それは⁉」
「早馬がこの砦に着かなかったことにするのだ」
「隊長！」
副隊長の顔が青ざめた。
「ラング将軍の命令に背くつもりなのですか⁉」
「いや、そうは言っていない。早馬がこの砦に着かなかったのだ」

「し、しかし……！」
「気にするな。ラングの命令など放っておけ」
「もしそのことが将軍にばれたらどうなさるつもりですか!?」
「そのときはわたしが責任をとる。おまえたちには迷惑はかけない」
副隊長はそれ以上口答えできず、
「わかりました……」
大きく肩で溜め息をついた。

4

カダインの小さな宿場町を起点としているグルニア街道は、グルニア本島を南北に貫いているが、南部のグルニア平野のほぼ中央にあるチルキという宿場町を過ぎると、街道は大きく西へ向きを変える。
街道を西へ進むと、やがて北側に山麓（さんろく）が迫ってくる。
この山麓に人口六〇〇〇人の旧王都である美しいサドリアの町がある。
グルニア王国を建国したオードウィンが山の中腹に華麗な白亜のサドリア城を築城して以来、サドリアの町は王都として発展し、豊かな文化を育んできたが、暗黒戦争時のドルーア

軍の配下に置かれてからは、サドリア城は廃城となり、町からはかつての活気が消えた。

このサドリアの街門を出て西へ向かうと、すぐ両側に山が迫ってくる。その山間がキネラ峠である。

峠は東のグルニア平野と西のオルベルン湾を隔ててい、峠の上にトラース将軍が指揮する三層建てのキネラ砦があった。

砦は旧王都サドリアを外敵から守る要塞としてサドリア城とともに築かれたもので、砦の上の巡視路に立つと、東には広々としたグルニア平野とサドリアの美しい町並みを、西には青々としたオルベルン湾の懐に抱かれた港町オルベルンの美しい町並みと、山の中腹にそそり立っている荘厳なオルベルン城を見渡すことができる。

オルベルンはもともと小さな漁村にすぎなかったが、オードウィン王がグルニア王国を建国すると、王都の外港として急速に栄え、今ではグルニアの交易の中心地として、人口一万八〇〇〇を擁するグルニア最大の都市となっている。

発展が目ざましいこの都市を外敵から守るために、サドリア城の出城として五〇年ほど前に建てられたのが、ラングが今居城としているオルベルン城である。

砦からこのオルベルンまで、徒歩で半時ほどの距離だが、東のグルニア平野側からオルベルンへ行くにはどうしてもこの砦を通らなければならなかった。

この砦から南西に徒歩で二時ばかり行った山麓にアリティアの遠征隊が野営していた。

山峡のカバル砦を破った遠征隊は、険しい山岳地帯を北上してグルニア平野に出ると、グルニア街道へは向かわず、山麓に沿った小さな街道を西へ向かった。
この街道は、旧王都サドリアを通らずにカバル地方からキネラ砦へ行くことができる近道だが、街道筋には民家はほとんどなかった。
進行方向へ向かって右側は山地だから、敵から攻撃される心配もない。
遠征隊は、昼の間は人目のつかない森のなかで仮眠し、夜になるのを待って進み、やっと今日の明け方、野営しているこの森へ着いたのだ。
そして、夜になるのを待って、アカネイア軍の情報を得るために、六人の騎士が二人一組の三班に分かれ、偵察のため近在の村へ散って行った。
オグマは女性騎士のセシルを連れ、戸数七〇あまりのゴロワという村へ行った。
この夜、グルニア平野は季節はずれの濃霧に覆われていた。
その帰路のこと、オグマとセシルがあと半時で遠征隊が野営している森へ着くというところまで来ると、前方の霧のなかで、二五、六歳の男が待ち構えていた。
男は背が高く、髪の毛は肩まで伸びている。
「何者だ!?」
だが、男はオグマの問いには答えず、
「今宵（こよい）の必殺剣はよく切れる」

剣を抜いて身構えた。
その構えを見てオグマが驚いた。
「ナバールか……!?」
「捜したぞ、オグマ・スビル」
「貴様、どうしても、やるというのか!?」
ナバールは氷のような冷たい目で頷いた。
「仕様がない野郎だ！」
オグマは舌打ちをし、
「おまえとは戦いたくはないが！」
剣の柄に手をかけたときだった。
「あっ、ウソッ！」
ナバールが叫んだ。
今までの声から想像できないような軽い、高い声だった。
「ウソですよ、ウソ！」
慌てて手でオグマを制し、ナバールは剣を鞘に仕舞った。
「おれですよ、おれ！　サムトーですよ！」
「サムトー!?」

「はい！」

サムトーと名乗った男はオグマの前に飛んで来ると、

「ノルダにいたサムトーです！」

「あのサムトーか!?」

「はい！　サムトー・リンですよ！」

オグマはサムトーの嬉しそうな笑顔をじっと見た。

名乗られてみると、少年の頃の人なつっこい面影がどことなく残っている。

細面に切れ長の目、高く通った鼻筋、薄い唇は、一見ナバールと双子ではないかと思うほど似ているが、よく見るとナバールの方がはるかに端正で涼しげな顔をしている。

それに、サムトーは笑うと歯並びの悪い隙間だらけの歯が剝き出しになるが、ナバールのそれは歯並びのいい白い歯をしていた。

また、浅黒いサムトーに比べてナバールは白磁のような美しい肌をしていて、男をどきっとさせるような妖しげで艶やかな、ふしぎな色気を全身から漂わせていた。

アカネイアの王都パレスにアカネイア大陸で一番賑やかだといわれているノルダという繁華街があり、通りや路地には市場や様々な店がびっしりと軒を並べているが、その一角に見せ物と賭博を目的とした剣闘場がある。

一〇年ほど前、オグマはそこで奴隷剣闘士として強制的に働かされていた。

剣闘場ではオグマの他に二〇名ほどの奴隷剣闘士がいたが、そのなかに奴隷商人に売られてきたばかりの見習いも数人いた。

サムトーもその見習いのひとりで、当時まだ一三、四歳の少年だった。

「しかし、ナバールの真似なんかしてどういうつもりだ？」

「いや、他意はないんですよ。ちょっと驚かせてやろうと思いましてね。ノルダを逃げ出したあと、旅芸人の一座に拾われましてね、しばらく役者をやっていたことがあるんですよ。ねえ、そっくりだったでしょ？」

「冗談にもほどがある」

「まああまあ。そんなに怒らなくてもいいじゃないですか。こうやってせっかく一〇年振りに再会できたんですから。なんでもですねえ、ナバールって有名な剣士によく似ているらしくて、よく間違えられるんですよ、おれ。あるところで、ナバールという剣士がオグマさんの宿命の好敵手だと聞かされましてね、急にオグマさんを思い出して会いたくなったんですよ。オグマさんがグルニアに来てるって聞いたもんですから、グルニアに来てナバールと名乗っていれば、きっと会えると思ったんですよ。そうしたら、二〇日ほど前でしたかね、ラング将軍がおれにというか、ナバールに会いたいと言って、おれが用心棒をしていた田舎町の安酒場へ直々(じきじき)に見えましてね」

「なに、ラングが!?」

「はい。まあ、言い訳するのも面倒臭いんで、[illegible]ぜひ雇いたいと言われましてね、条件があんまりよかったんで、その場でふたつ返事で雇われることにしたんですよ。ま、オグマさんにはかないませんけど、これでも剣にはかなり自信がありますからね。そしたら、四日前に宮殿のラングの部屋に呼ばれ、『アリティアの遠征隊が近くまで来ている。オグマさんを殺ったらたんまり報奨金を弾む』って言われましてね。ほーらっ、見てくださいよ」

懐から一万ゴールドの金貨を三枚出して見せた。贅沢をしなければ、一、二年はのんびりと遊んで暮らせるだけの価値がある。

「前金でもらったんですよ。そして、とんずら――ってわけですよ。ラングの野郎、騙されたことにまだ気づかないでいますからね。ざまあみろってんだ。はっはは」

得意げに笑ってサムトーは金貨を懐に仕舞った。

「ま、そんなわけですから、おれ、オグマさんについて行ってもいいですよね!?　恩返しをしたいんですよ!　昔、よくあなたに助けてもらいましたから!」

「アリティアの遠征隊と一緒にラングと戦うというのだな!?」

「もちろんですとも!」

5

オグマとセシルがサムトーを連れて野営へ帰ると、すでにアラン・ロディ組とドーガ・ルーク組が帰っていた。
先の戦いでナバールと一緒に戦った騎士たちは、ナバールに瓜(うり)二つのサムトーを見、一瞬あ然としていたが、オグマがサムトーがナバールの贋物(にせもの)としてラングに雇われてラングからまんまと大金をせしめた話をすると、騎士たちは腹を抱えて笑った。
サムトーの紹介が終わると、オグマはマルスたちをサムトーに紹介し始めた。
マルスに次いでシーダを紹介すると、
「へえ、あなたがシーダさまでございますか!?」
サムトーは驚いていたが、すぐさま馴(な)れ馴れしい態度で、
「いやあ、さすが噂(うわさ)通りの美しい方でいらっしゃる! ねえ、オグマさん!」
サムトーがオグマに話しかけようとしたときだった。
いきなりオグマがサムトーの胸ぐらを摑(つか)んだ。
背筋がぞっと凍るような恐ろしい目に睨(にら)みつけられ、思わずサムトーの身が竦(すく)んだ。
〈それ以上喋ったらただじゃすまない……!〉

オグマの目がそう言っている。
サムトーがこんな恐ろしいオグマの目を見るのは初めてだった。
これ以上迂闊に無駄口を叩くと、鉄の塊のような拳が飛んでくるどころか、一閃のもとに命をとられかねない。
脅えの色がサムトーの目に宿るのを見てとると、オグマはサムトーから手を離し、
「マルスさまのご婚約者であられる」
何事もなかったように、普通の口調でサムトーに告げた。
「は、ははは」
サムトーは頭を掻いてシーダにへつらい、
「それはどうも」
と言ったきり黙ってしまった。
このときの二人の無言のやりとりは、王女シーダに対するサムトーの馴れ馴れしい態度をオグマがきつく咎めたようにしか見えなかった。
だが、軍師ジェイガンだけは、人には言えないなにか複雑な事情があることを二人の無言のやりとりから見てとっていた。
騎士や仲間たちの紹介が終わると、さっそく焚き火を囲んで作戦会議が開かれた。
「われわれは、ここから北東に徒歩で一時ほどあるツメルの町へ行って来ましたが」

まずアランがグルニア地図の一点を指しながら報告した。
「町の人の話によると、ここ数日、アカネイア軍は特に目立った動きをしていないということです。おそらく敵はキネラ砦に集結しているのではないかと思われますが、それ以上の詳しい情報は残念ながら……」
アランは首を横に振った。
ドーガとルークの報告も内容は同じようなものだった。
オグマとセシルが行ったゴロワの村は、偵察に行った三箇所のなかでキネラ砦に最も近いところに位置するが、やはり同じようなものだった。
「砦を指揮しておるのはトラース将軍と言ったな」
黙って報告を聞いていたジェイガンがオグマに確かめた。
「はい。ご存じかとは思いますが、トラースという男は元々オレルアン王国の騎士団の騎士で、ハーディンの配下で働いていたのですが、先の戦争でオレルアン国がマケドニア軍に制圧されると、真っ先にマケドニアの配下として、戦争が終わるまでわれわれと行動をともにしました。ハーディンがニーナさまと結婚すると、ハーディンについてアカネイアへ行き、ハーディンに取り入って出世しました。とにかく、やたら調子のいい男で、アカネイアではハーディンの腰巾着（こしぎんちゃく）と陰口を叩かれていたと聞きました。そして、グルニアへ来たら、今度はラ

ングにべったりです。ただ、小賢しくて小心者ですが、一応将軍にまで出世したくらいのやつですから、機を見る目には……」
「それだけに、目立った動きがないということは……」
ジェイガンがマルスを見て溜め息をついた。
かえって不気味だ――と言いたいのだ。
「おい、サムトー」
オグマが末席にいたサムトーに命じた。
「おまえはラングに雇われて敵側にいたんだから、やつらのことは知っているだろ？　なんでもいいから教えてくれ」
「刺客として雇われただけですから、知っているといっても限度がありますが」
サムトーが答えた。
「たしか、アリティアの遠征隊がカバル砦を破ったという報せが、オレルアン城のラングのもとに入ったのは、七日前の夜のことでしたよ。ただちにトラースは援軍を求めるために、トルタの砦に早馬を出したんだそうです。なんでも、その砦にはアカネイア軍でも優秀なジョルジュとかいう騎士が兵を率いて駐留しているとか」
「ジョルジュが!?」
マルスとリンダが驚いて顔を見合わせると、

「ジョルジュ殿がグルニアへ来ているのですか⁉」
すぐさまリンダがサムトーに聞き返した。
「ええ。たしかジョルジュとか言ってましたよ」
「トルタ砦というのはここにあります」
オグマがグルニア地図にあるカシミア地方の東の一点を指差した。
「ジョルジュが敵の援軍ですか……」
ジェイガンは溜め息をついた。
「今日か明日には、援軍はキネラ砦へ着くのではないですか」
サムトーが言うと、
「敵はわれわれの現在地を知っておるのか？」
ジェイガンが尋ねた。
「正確にはどうかわかりませんが、大体の位置は知っていると思いますよ。昨日の夜、こっちへ向かう前にキネラ砦の様子を見に砦に寄ったら、二日か三日後にはアリティアの遠征隊が砦に接近するのではないかと兵士たちが話していましたから」
「砦の戦力は⁉」
マルスが尋ねると、
「トラースは槍部隊、弓部隊、傭兵部隊をそれぞれ五〇騎、計一五〇騎と三〇〇名の歩兵を

持っているそうですが、そのほとんどが砦で戦闘に備えていましたが」

「ということは、敵は砦での攻防戦を考えているということか……」

「それなら、ジョルジュが来ないうちに砦へ接近しましょう」

ジェイガンがマルスに提案した。

「この霧なら敵に悟られることもないでしょうから」

一時に及ぶ作戦会議が終わると、アランは歩兵部隊に出発の準備をするよう命じた。

サムトーが兵士たちが慌ただしく動き回るのを見ていると、背後からぽんとサムトーの肩を叩く者があった。ジェイガンだった。

ジェイガンは一〇〇歩ほど離れた森のなかを流れている小川へサムトーを誘った。

岸辺の岩に腰を下ろすと、ジェイガンが尋ねた。

「オグマになにを言おうとしたのだ、あのとき？」

「えっ？」

「シーダさまを紹介されたときだ」

不意をつかれてサムトーはジェイガンを見ていたが、

「そ、それはちょっと……」

「ノルダにいたときのことだな？」

「でも、言ったらオグマさんが……」

サムトーはオグマに睨みつけられたときの恐ろしい目を思い出しながら答えた。
「だが、あのとき、おまえさんは言おうとしたではないか」
「そりゃそうですけどね。でも、あのときは、マルスさまとシーダさまがご婚約をなさっているなんて知らなかったもんですからついおれ……」
「正式のご結婚は、このような状況では無理だ。が、お二人はご婚約していることにかわりはない。この隊のなかでそのことを知らぬ者はない」
「でも、オグマさんの気持ちを考えると、おれ言えないですよ」
「決して他言はせぬ」
「しかし……」
「わしひとりの胸に仕舞っておく」
「まいったなあ……」
ジェイガンのしつこさに根負けしてサムトーが溜め息をつくと、
「ほんとうにだれにも言わないでくださいよね」
哀願するように念を押して、
「実は……オグマさんはシーダさまを愛しているのですよ」
「シーダさまを？」
「はい。かれこれ一〇年近くなりますかね。当時、オグマさんは奴隷剣闘士として、おれが

その見習いとして、ノルダの闘技場で奴隷としてただ働きさせられていたのですが、経営者がひどいやつでしてね、試合のないときは狭く汚いブタ小屋みたいな部屋に鎖で繋がれて、食べ物もろくに食わせてもらえなかったんですよ。そこで、オグマさんが中心になって、経営者に待遇の改善を申し込んだのですが、奴隷がなにを言ってるんだ——ってなもんですよ。話を聞くどころか、生意気だと言って逆にお仕置きされましてね。ま、そんなことが何度かあって、結局我慢できなくなって、ある夜みんなで逃亡を企てたのですよ。そのとき、オグマさんがおれたちの身代わりになってくれたお陰で、なんとか逃げ出すことができたんですが、そのためにオグマさんはノルダの市場の広場で、見せしめのために鞭打ちの刑を受けたのだそうです。仲間から聞いたんですが、仲間が姿を変えて広場へ行き、隠れながらその光景を見たのだそうですが、そりゃあひどいものだったそうですよ。オグマさんが気を失うと水を浴びせ、気がつくとまた鞭を打ち、夜昼なく、なんと五日間も続いたんだそうです。ところが、オグマさんが息絶えようとしたときに、たまたまアカネイアに来ていたタリス国の騎士団の一行が広場を通りかかったのだそうです。そのなかに、幼い美少女がいて——」

「その方がシーダさまだというのだな」

「はい。シーダさまは泣きながら必死にオグマさんをかばったのだそうです。そして、騎士に命じ、莫大な金額を経営者に払って、オグマさんを引き取ったのだそうですよ。ま、そんなわけで、オグマさんはタリス国のために、いやシーダさまのために、剣を捧げる決意をし

たのだそうですよ」

「そうか。そんな経緯があったとは知らなかった……。オグマが奴隷剣闘士だったという話は聞いていたが……」

先の戦争で、アリティア軍がグラ国の思わぬ裏切りに遭い、マルスの父・コーネリアス国王が討ち死にしたあと、ジェイガンはまだ一四歳だったマルスを連れてタリス国へと落ち延びたが、そのときマルスとシーダは初めて出会った。

その後、マルスとシーダは互いに二人の愛を育んできたのをジェイガンは温かい目で見てきたが、サムトーに言われて、ジェイガンはシーダのそばにオグマがいつもひっそりと影のように付き添っていたことを思い返していた。

たしかに、言われてみると、シーダを見るオグマの目には、護衛するために王女のそばにいる忠臣のそれとは別の色が宿っていたような気がする。

「ま、なんだかんだ言っても、所詮は男と女のことですから、オグマさんがシーダさまに心を引かれたのは当然といえば当然のことで、おれも男ですからよくその気持ちはわかりますよ。でも、いくらシーダさまに思いを寄せても、身分があまりにも違いすぎますからねえ。どうなるものでもないでしょうが、マルスさまとシーダさまのことを見ると、オグマさんも内心かなり辛かったのではないでしょうかねえ。いずれ、シーダさまが年頃になれば、このようなときがくると知ってはいたんでしょうが……」

ジェイガンにはオグマの辛い気持ちが痛いほどわかった。

サムトーの言葉に頷きながらジェイガンは、密かに思いを寄せていたモロドフ伯の実妹のメルーダがコーネリアス国王と結婚すると、一生独身でいることでメルーダへの愛を貫き通そうとした若き日の自分の姿に、オグマの姿を重ねた。

同時に、マルスの姉の王女エリスに恋人がいるにもかかわらず、密かにエリスを慕い続けているカインの顔を思い出した。

そして、遠いアリティアに思いを寄せながらジェイガンは深い溜め息をついた。

〈エリスさまは今どこで、どうしておられるのだろうか。そして、カインは……〉

アカネイアとグラとオレルアンの連合軍の強襲を受けてアリティアの騎士団が全滅し、アリティア城が連合軍の手に落ちてから、もうすぐ二箇月になろうとしていた。

6

霧のなかに、蹄の音と甲冑の接触する音だけが響いた。

夜半過ぎに野営地を出発した遠征隊の一行は、さらに濃さを増した霧のなかを、山麓に沿って黙々と西へ移動していた。

うっとうしい雨季のように、不快な湿った冷気が体に張りついている。

気温もこの季節にしては低いが、半時ほど進んだだけで、重い鎧兜に身を包んだ騎士や兵士たちの全身が汗でいっぱいになり、額や腕から流れた汗が、顎や指先から水滴となって滴り落ちた。

明け方前、遠征隊はキネラ砦のあるキネラの丘の近くまで進軍すると、ちょっとした小高い丘の上に森を見つけ、そこで野営することに決めた。

霧が晴れると、森を出た小高い丘の上からグルニア平野が一望できそうな場所で、仮に敵が攻撃しても、一目でその動きを見てとることができる。

また、森の奥には清水が流れていい、その奥の岩場から湧き水が出ていた。

野営するには、最適の地形だといっていい。

警備兵を残して、騎士たちは仮眠をとるために横になった。

明け方から半時ばかりたったときだった。

気温の上昇にしたがって乳白色の霧がどんどん消えてゆき、やがてグルニア平野が穏やかな朝の明るい陽光に包まれると、小高い丘の上から西の方向に、新緑に包まれたキネラの丘に三層建ての砦が姿を現した。

距離にして、わずか六、七〇〇歩しかない。

砦の中央塔の屋上に掲げられたアカネイア国旗と、砦の上の巡視路に弓を持った八〇人あまりの敵兵の姿を、はっきりと見ることができる。

さらにその左手に、旧王都のサドリアの美しい町並みを遠くに望むことができた。
だが、警備兵たちが砦と旧王都を見たあと、平野に目を移して愕然とした。
そのなかのひとりが慌てて笛を口に銜え、けたたましい緊急の笛の音が森のなかのさわやかな朝の空気を切り裂いた。
「なにごとだっ!?」
突然の笛の音にまどろみを破られたマルスや騎士たちが、驚いて武器を手に森から丘の上に飛び出し、顔色を変えた警備兵たちが指差す方向の光景を見て、
「あっ!?」
一瞬、だれもが自分の目を疑った。
北の方角の、四、五〇〇歩離れた丘の上に、アカネイア軍が対峙していた。
騎馬隊およそ五〇騎。歩兵数はおよそ一〇〇名。
さらに、北東の、五、六〇〇歩離れた丘の上に同じ数の別の軍団がいた。
遠征隊のいる森の背後は、深くて険しい山地が連なっている。
砦を入れると、三方から完全に包囲されていることになる。
驚きはたちまち緊張感に変わった。
アランの号令に、遠征隊は慌ただしく戦闘態勢に入り、敵の攻撃に備えた。
「しかし、いつの間にやつらが……!?」

さすがのジェイガンも動揺を隠せないでいた。
遠征隊は濃霧を利用して砦に接近して来たが、アカネイア軍もまた濃霧を利用し、身を隠しながら遠征隊が来るのを待っていたのだ。
「われわれの位置や動きを彼らが正確に把握していたんだ」
マルスが悔しそうに唇を噛むと、
「サムトー！」
オグマは恐ろしい形相で呼びつけ、
「どういうことなんだこれは!?」
太い腕でサムトーの胸ぐらを乱暴に掴んだ。
「おまえの話と全然違うじゃないか！　アカネイア軍が砦に結集して戦闘に備えていたと言ったからここまで接近したんだぞ！」
「で、でもですねえ、嘘じゃないんですから！」
サムトーも思わぬ展開に困惑し、うろたえている。
「おれが行ったときは、たしかにそうだったんですから！」
とにかく、こちら側から動きようがなかった。
まともに攻撃を仕掛けたら、玉砕するだけだ。
相手の出方を見るしかなかった。

戦いの主導権は完全にアカネイア軍に握られていた。
だが、太陽が真上にあがっても、アカネイア軍は動こうとしなかった。
じっと丘の上の遠征隊に対峙している。
遠征隊の騎士や兵士たちの極度の緊張が苛立ちに変わった。
やがて、キネラ砦の背後に夕日が落ち、夜になった。
だが、アカネイア軍は攻撃してこなかった。

今朝方から降り始めた雨は、昼になってさらに勢いを増し、容赦なく甲冑を叩き、目を開けているのさえやっとだ。
滝のような凄まじい雨足だった。
遠征隊がアカネイア軍の攻撃に備えてから、すでに一昼夜が経過していた。
一睡もしていないため、騎士や兵士たちの体力は消耗している。
その上、この雨で、びしょ濡れの体は完全に冷えきっている。
極度の緊張の持続で、気力もすでに限界に達しようとしていた。
だが、依然として、アカネイア軍は攻撃する気配をみせなかった。
「敵は長期戦でわれわれが消耗しきるのを待っておるようですが……」
森の木の下で雨宿りをしながらジェイガンが疲れ切った顔でマルスに言った。

ジェイガンの顔色が極端に悪く、目のまわりが窪(くぼ)み、黒ずんでいる。
「いかがいたしましょう」
じっとジェイガンはマルスを見つめた。
「食料はあと三日分しか残っておりませぬが……」
ジェイガンが攻撃の決断を迫っているのがマルスにわかった。
だが、マルスはすでに朝のうちに腹を決めていた。
ただ、雨が降り始めたので、機を見ていたのだ。
そのことをジェイガンに言おうとしたときだった。
人の気配を感じてマルスが振り向くと、いつの間にか騎士たちがそばまで来ていて、なにごとかを訴えるような険しい顔で、激しい雨のなかに立っていた。
いずれも疲れ切っていたが、目は生気に満ちていた。
その表情を見て、騎士たちもまたマルスと同じことを考えているのだということをマルスはすぐさま理解した。
「マルスさま」
隊長のアランが代表して言った。
「このままではもはや時間の問題かと思われます」
「わかっている!」

マルスは力強い口調でアランの言葉を遮ると、
「体力がこれ以上消耗しないうちに砦に攻め込もうと思う！」
とたんに騎士たちの顔がぱっと輝いた。
すると、騎士たちの一番後ろについて来ていたサムトーが、
「お願いがあります！」
とマルスの前にしゃしゃり出た。
「おれの情報のためにこんなことになって申し訳なく思っています！　ですから、一度だけでいいですから、おれに名誉回復の機会を与えてくれませんか⁉」
「サムトー！」
オグマが咎めるように睨みつけたが、
「お願いです！」
サムトーはオグマを無視してマルスに両手を合わせると、
「おれ、これで通ってますから！」
斜に身構え、無表情な顔を作ると、とたんにナバールの顔に変貌した。
「この顔なら自由に砦に出入りできる」
声色までナバールを真似た。抑揚のない低い抑えた声だ。
「ただし、若い者を二、三人借りたい」

すっかりナバールになりきっている。

「トラースやアカネイア軍に顔を知られていないやつをな」

その頃、オルベルン城の宮殿にあるラングの部屋では、

「ずいぶんと暇なことよのお」

玉座についているラングは報告に訪れたトラースを一瞥して皮肉った。

「わざわざ経過を知らせに足を運ぶとはな」

穏やかな口調とは裏腹に、ラングは激しく貧乏揺すりをしている。

優柔不断なトラースの行動に苛立っているのだ。

「いつになったら朗報が聞けるのだ？」

「ご心配はございませぬ。やつらはすでに肉体的にも精神的にも疲れ切っております。決着がつくのはもはや時間の問題——」

得意げに作戦を告げるトラースの鈍感さに、

「なあ、トラースよ」

ラングはあきれ返って、嘲笑した。

怒鳴り散らしたいところだが、ぐっと我慢している。

「武将なる者、慎重になるのもいいが、ときには大胆になることも必要」

「いや、ごもっとも。おっしゃる通りでございます」

「わしなら、やつらが包囲されておることに気づいて動揺したとき、その隙をついて一気に潰しにかかったがな」

ラングは暗にトラースの作戦の拙さと、将としての度量のなさを指摘したが、

「あと三日お待ちください」

トラースは自信たっぷりに答え、

「三日!?」

とんたにラングの鋭い目が睨みつけた。

「あっ、い、いや、あ、あと二日で」

慌ててトラースが訂正すると、

「二日!?」

ラングの目がさらに鋭さを増し、トラースの額にどっと脂汗が浮いた。

「あ、明日までお待ちください。必ずや明日までには」

ラングは睨みつけたまま、

〈この小心者めが――!〉

煮えくり返る腹のなかで吐き捨てた。

トラースは額の脂汗を拭うと、

「そ、それより将軍……」
ラングの耳に近づいて囁くように言った。
「わたしがやつらを壊滅し、グルニア王家の遺児らを奪い返したら、マケドニアの総司令官のことを、間違いなくハーディン皇帝に……」
「ばかものっ！」
たまらずラングが怒鳴りつけた。
「つまらぬ心配をするより、一刻も早くやつらを片づけぬかっ！」

7

夜になって小降りになった雨は、夜半過ぎには完全にあがった。
雨あがりの澄み切った上空に美しい満月が出ていた。
キネラ砦の西側に、砦と旧王都を結んでいる街道がある。
月明かりに照らされたこの街道を、砦へ向かってやって来る四つの人影があった。
ナバールになりきったサムトーとルーク、ロディ、ライアンの若き騎士たちだ。
アリティア騎士団の甲冑を脱ぎ捨てた騎士たちは、薄汚れた粗末な衣服をまとい、旅の流れ者を装っている。

グルニア平野に夜の帳が下りると、四人は南面陣の野営の背後にある森へ向かった

そして、キネラ砦の南側に連なっている山を横断し、街道へ出たのだ。

砦は出撃に備え、緊張していた。

ラングに促されて明け方の襲撃の決意をしたトラースが、遠征隊を包囲している他の二部隊にその旨を伝える使いを送った直後だった。

西門に近づく四つの人影を見つけると、門の上の巡視路の狭間（はざま）で待機していた兵士たちがすぐさま弓を構え、人影が射程距離に入るのを待った。

四人は射程距離の手前で立ち止まると、

「門を開けろ！　ナバール・ジョルダだ！」

サムトーが敵兵に向かって大声で叫んだ。

だが、なかなか門は開かなかった。

「くそっ、なにをもたもたしてやがるんだ……」

待ちきれなくなったサムトーが再び叫ぼうとしたとき、やっと門が開いた。

キネラ砦はカバル砦より規模がはるかに大きくて比較にはならないが、同じような四角い石造りの建物をしていて、東と西に二つの門があり、旧王都のサドリア方面からやって来た通行者は東門を入って中庭にある中央塔で検問を受け、西門から出てオルベルン方面へ向かうように設計されている。

四人が西門を潜って中央塔の前の中庭へ行くと、一〇人余りの兵士を従えたトラースが直々に出迎えた。
砦の上の巡視路では六〇人ばかりの弓部隊の兵士が警備にあたっている。
中央塔と北棟の間の中庭は馬場になっていて、五〇頭ちかい馬が繋がれていた。
「雇ってくれ、おれの知り合いだ。腕ならおれが保証する」
トラースは三人の騎士をじっと見ていたが、サムトーに視線を移すとにやりと不敵な笑いを浮かべた。
「その必要はない」
「なぜだ？　凄腕の兵をあれほど欲しがっていたのに」
「おまえがナバール・ジョルダ殿だったら話は別だがな」
「どういう意味だ、それは!?」
「とっくにおまえの正体はばれておる」
「なに!?」
「もう芝居はやめたらどうだ、サムトー・リン」
「うっ！」
サムトーの顔がさっと変わった。
と、その言葉を待っていたかのように、トラースの背後に控えていた一〇人余りの兵士た

たがすばやく弓に矢をつがえ、四人に標的を合わせた。

思わぬ展開に若き騎士たちもうろたえた。

「おまえがナバール殿ではないことはラング将軍も知っておられる」

「なにを証拠にそのような戯言(たわごと)を!?」

「先の戦争でわしはナバール殿を知っておるからだ。たしかに、おまえはナバール殿に瓜二つ。だが、ラング将軍の刺客として雇われ、オルベルン城でわしと最初に会ったとき、おまえはわしを見てもなんの反応も示さなかった」

「貴様の腐った顔など見たくもないからな」

「それに、その剣……」

トラースはサムトーの背中の長剣を見た。

「本物のナバール殿なら、柄に赤い宝石を施した剣を持っておるはずだ」

「なるほど」

もはや誤魔化(ごまか)しようがなかった。

「だったら、なぜ今までそのことを隠していたのだ!?」

ナバールの声色をやめ、サムトーは地声で尋ねた。

「騙されたとわかったとき、おまえを始末してもよかったのだが、将軍は逆におまえを利用してやろうとお考えになったのだ。だから、そのときがくるまで好きなように泳がせておい

たのだ。だが、アリティアの遠征隊が接近したので、おまえを放した。オグマを殺れと命じてな。案の定、おまえはこの砦に現れて砦の戦力を調べると、やつらを捜して、やつらのところへ向かった。それで充分だったのだ」
「そうだったのか！　遠征隊を包囲するために、おれに偽の情報を与え、遠征隊が砦に接近するのを待っていたのだな！」
「そういうことだ」
「くそっ！」
「そうとも知らずおめおめと砦に戻ってくるとはな」
殺れ――トラースは兵士たちに命じた。
兵士たちはさらに狙いを定め、きりりと矢を引いた。
だが、兵士たちが一斉に矢を射ろうとしたとき、突然砦の北棟から、
「火事だ！　武器蔵が火事だーっ！」
と叫ぶ騒々しい声があがり、慌ただしく武器蔵へ駆けつけて行く騎馬隊士や兵士たちの無数の靴音が石畳に響き渡った。
「な、なに!?」
トラースや兵士たちが奥の騒ぎに気をとられたときだった。
頭上から黒い影が月明かりを遮って中庭の石畳の上に落ちてきた。

その直後、凄まじい閃光が宙を切り裂いた。
たちまち弓を構えていた兵士たちから悲鳴があがった。
中央塔の二階の通路に潜んでいた男が、剣をかざして宙に跳び、中庭に落下しながら、二人の兵士の弓を持つ手を切り、着地するや返す剣でもう二人の腕を切ったのだ。
予期せぬ闖入者にトラースや兵士たちがひるんだ。
その隙に、サムトーや若い騎士たちが剣をかざして兵士たちに突進していた。
続けざまに兵士たちの悲鳴が夜空に轟き、一〇人余りの兵士たちが傷を負った手を庇いながら石畳の上に倒れた。
「出会え！　出会えーっ！」
トラースが後ずさりしながら悲鳴にも似た声で騎馬隊士や兵士たちが大挙して駆けつけている北棟へ叫んだが、消火に手間取って右往左往している騎馬隊士や兵士たちの喧騒のなかに、その声はむなしく消えた。
その直後、馬場に繋がれていた五〇頭の馬が突然いななきをあげながら暴れ出し、砦のなかはさらに騒然となった。
すでに黒煙が中庭まできている。
「出会えーっ！」
なおも叫びながらトラースが北棟へ向かって逃げ出したとき、サムトーや若き騎士たちは

助けに入った男の顔を初めて見た。
二六、七歳の、金刺繍（ししゅう）の縁取りのある白い仮面をした騎士だった。
「あなたは!?」
思わずルークがロディと顔を見合わせた。
二箇月前、ホルム海岸でアカネイア軍の追跡隊に襲われたオグマとグルニア王家の二人の遺児が、シリウスと名乗る仮面の騎士に助けられたという話をオグマから聞かされていたが、そのことを若い騎士たちは白い仮面を見て咄嗟（とっさ）に思い出したのだ。
「あんたか、火を放ったのは!?」
だが、サムトーの問いには答えずに、
「それより門を早く！」
すかさずシリウスは東門へ突進し、騎士たちもそのあとに続いた。
〈考えることはだれも同じか――〉
苦笑しながら、サムトーはシリウスたちのあとを追った。
サムトーたちもまた、砦へ入ったら、隙をみて砦のどこかに火を放ち、その騒ぎの最中に東門を開ける作戦を立てていたのだ。
火事騒ぎで東門の警備は手薄になっていた。
剣をかざして猛然と突進して来たシリウスや若き騎士たちの姿を見た五人の警備兵が、そ

の姿に恐れをなして逃げ去ると、シリウスたちは門扉（もんぴ）の鍵を解き、巨大な観音（かんのん）開きの鉄扉を押し開いた。

同時に、ライアンが合図の火矢を高々と上空に放った。

そこへ三十数名の騎馬隊士たちが剣や槍をかざして駆けつけ、門を背にしたシリウスや騎士たちと激しい切り合いになった。

シリウスの剣が鋭い閃光を発し、サムトーの剣が唸（うな）りをあげて切っ先を血に染めた。

実戦を重ねてきたルークやロディの若き騎士も一層腕をあげていた。

たちまち、一〇名余りの敵兵が傷を負って石畳に崩れ落ちた。

と、東の空に怒濤（どとう）のような蹄音が轟き、敵兵たちは思わず顔を強張（こわば）らせた。

夜になって野営地からさらに砦に近い林に接近し、林のなかで合図の火矢が上がるのを待っていた遠征隊の騎馬部隊が、月明かりのなかを砦へ向かい、雄叫（おたけ）びをあげながら疾走して来たのだ。

先頭の馬上にはマルスが乗っている。

半馬身遅れて、アリティア国旗を掲げたアランがいる。

そのあとに、オグマ、ドーガ、ゴードン、セシルたち騎士が続く。

さらに、ウォレン、カシム、ジュリアン、リカード、シーダらが続いた。

トラースが二〇名の騎馬隊士を引き連れて東門へ駆けつけたときには、すでに遠征隊の精

鋭部隊は砦の目の前まで接近していた。
遠征隊は蹄音を轟かせて一気に砦に雪崩込んだ。
すばやく馬上から飛び降りたドーガやゴードンらがシリウスらに加勢し、剣や槍をかざして猛然と敵兵に切りかかった。
マルスとアランとオグマの三人は一瞬、迅速な動きと剣捌きの正確さで一撃のもとに敵兵を切り倒すシリウスの姿に目を奪われたが、数人の騎兵隊士を連れて慌てて中央塔へ逃げ込んで行くトラースの姿に気づくと、すかさずそのあとを追った。
遠征隊の剣や槍が縦横無尽に宙を切り裂き、そのたびに血飛沫が石畳に飛び散る。
敵の騎馬隊士たちが悲鳴をあげながら次々に傷を負って倒れると、旧グルニア兵士だった槍や弓部隊の兵士たちから見る見るうちに戦意が喪失していった。
血生臭さとともに、中庭にはまだきな臭い黒煙が漂い、武器蔵は燻っていたが、鎮火するのは時間の問題だった。
そして、中央塔の屋上の巡視路では、マルスとアランとオグマがトラースを塀際まで追い詰めていた。
オグマに鋭い剣先を喉元に突きつけられ、
「い、命だけは、た、助けてくれ！」
トラースは震えながら哀願した。

「ふっ！　この期(ご)に及んで命乞(ご)いとはな！」
オグマは剣の柄を握り直した。
「ま、待ってくれっ！」
「ハーディンやラングの命令とはいえ、貴様らのために、多くのグルニア人が命を落としたんだ！　貴様と同じような恐怖に脅(おび)えながらな！」
限りない憎しみにオグマの目は油のようにぎらついている。
オグマは一歩後退して高々と剣をかざした。
「あわわわっ！」
とたんにトラースの下半身が濡れ、生温かい液体が巡視路の床に流れた。
死の恐怖からトラースは思わず小水を漏らしてしまったのだ。
「死ねいっ！」
渾身(こんしん)の力で真一文字に振り下ろした剣が閃光を発して宙を切った。
同時に、凄まじい鮮血が闇に飛び、
「うわわわーっ！」
断末魔(だんまつま)の悲鳴が夜空に響き渡った。
トラースの体がゆっくりと塀から仰向けに落ち、中庭の石畳にまっ逆様に落下した。
やがて、鈍い衝撃音が砦内に響き渡ると、石畳を覆ったおびただしい血の海に、トラース

のなきがらが横たわっていた。
トラースのなきがらが無様に石畳に叩きつけられ、反動で一度大きく跳ねあがったが、二度目に石畳に落下したとき、トラースの懐から飛び出した透明な青い美しい宝石が月明かりを浴びながら宙に舞い、ドーガの足元に転がった。
「こ、これは!?」
ドーガが拾いあげると、
「あれっ!?」
サムトーがすっ頓狂な声をあげた。
トラースが持っていた宝石は鶏卵の半分ほどの大きさで、宝石には研磨したあとや細工したあとが見られなかった。
マケドニアでリュッケ将軍が持っていた宝石と同種のものだ。
かざして見ると、そのなかに一一個の白く輝く光が点在している。
それらの光は、初夏の上空に見ることができる双子座の形をしていた。
「おれも同じようなものを持っているんですよ!」
サムトーが懐から同種の青い美しい宝石を取り出した。
やはり鶏卵の半分ほどの大きさで、研磨したあとや細工したあとがない。
そのなかには、七個の白い光が点在している。

それらの光は冬の南の空に見ることができる水瓶(みずがめ)座の形をしていた。
「旅の途中で盗賊から奪い取ったんですがね！」
サムトーがドーガたちに説明しようとしたとき、遠征隊の精鋭部隊のあとを追って来た歩兵部隊と輸送部隊が慌ただしく東門に雪崩込み、
「敵だーっ！　門を閉めろーっ！」
最後尾にいたジェイガンが叫んだ。そして、
「弓部隊と槍部隊は直ちに配置について迎撃しろっ！」
中央塔の巡視路にいたアランの声が中庭に響き渡った。
一〇〇騎のアカネイア軍の騎馬隊が蹄音を轟かせ、砦へ向かって疾走して来る。
そのあとに槍や弓を持った約二〇〇名の歩兵部隊が続いている。
アリティアの遠征隊を包囲しながら暁の襲撃に備えていたアカネイアの二つの軍団が、遠征隊の突然の動きに驚き、慌てて追跡して来たのだ。
騎馬隊のだれもが、砦との間で遠征隊を挟み撃ちにできると信じて疑わなかったが、遠征隊がなんなく砦のなかに消え、東門が閉じられるのを見て、初めて砦で異変が起きていることに気づいた。
そのとき、すでに騎馬隊は砦まで徒歩であと一五〇歩の位置まで接近していた。
この騎馬隊に、巡視路の狭間についたアリティアの弓部隊が一斉に矢の嵐を放って威嚇(いかく)す

ると、騎馬隊は慌てて弓の射程距離外に退却した。
予期せぬ展開に、騎馬隊もあとを追って来た歩兵部隊もあ然としていたが、やがて砦の中央塔に掲げられていたアカネイア国旗が遠征隊によって無残に引き下ろされると、騎馬隊の戦士や兵士たちは騒然となった。
砦の中央塔の屋上から戦況を見ていたマルスたちに、アカネイア軍の動揺が手にとるようにわかった。
だが、アカネイア軍は砦から徒歩で二〇〇歩ほど離れた弓の射程距離外のところで態勢を整え、砦の遠征隊と対峙した。
オルベルン城と連絡をとり、ラングの命令が下るのを、待つつもりなのだ。
アランが、負傷した敵兵を牢に入れ、砦の食料蔵に貯蔵してある食料と武器蔵の武器類を点検するように若い騎士たちに命じると、
「さて、いかがいたしましょう？」
ジェイガンはマルスに尋ね、心配そうに西方のオルベルンの町の向こうの山の中腹に聳えているラングの居城を見た。
キネラ砦を奪ったことでひとまず遠征隊は窮地を脱した。
だが、キネラ砦が落ちたという報せがオルベルン城に届くのは時間の問題だ。
ラングがアカネイアの大軍を率いてオルベルン城から出撃して来たら、砦は東西から挟み

撃ちにされ包囲されることになる。
　そのとき、マルスの背後から声がした。
「ご心配はありませぬ、マルスさま」
　見ると、いつの間にかシリウスが来ていた。
「シリウス殿……」
　マルスはシリウスを見つめて礼を述べた。
「あなたのことはマケドニアのホルム海岸でここにいるオグマから聞いていました。あなたの力添えでなんとか危機を切りぬけることができた」
「いえ、感謝するのはわたしの方です」
　シリウスもじっとマルスを見つめている。
　仮面の奥のその碧(みどり)の双眸(そうぼう)には、マルスに対する懐かしさと、なんとも言えぬ深い悲しみが同居していた。
　その双眸を見て、マルスもまた懐しさを覚え胸が締めつけられる思いがした。
　このシリウスが旧グルニア黒騎士団を率いていた名将グサイユ・カミュであることを、マルスは確信したからだ。
　先の戦争で、カミュの率いる黒騎士団は、ドルーア帝国へ進攻するために旧グルニア国へ進軍して来たマルスたちの連合軍との激しい戦いの末に壊滅し、カミュは戦死したと噂され

ていたが、立場は違っていても、マルスはひとりの人間として、また騎士として、敵将として、カミュを尊敬していた。

また、カミュはアカネイア王国の王女であったニーナと互いに愛しあっていた。敵対する国同士の、騎士団の名将と王女の許されぬ恋だったが、二人の気持ちは深いところで強く繋がっていた。

だが、カミュの戦死の噂に悲しみの日々を送っていたニーナが、アカネイア王国再興のためにやむなくオレルアン王弟のハーディン・ルイ・オレルアンと結婚した。

祖国滅亡の失意――。

添い遂げられなかったニーナとの悲恋――。

ニーナの夫であるハーディンによって祖国が占領下に置かれた屈辱――。

そして、アカネイア軍の旧グルニア国民に対する残忍な行為への憤怒（ふんぬ）――。

白い仮面の裏に隠されたカミュの心情を思うと、計り知れないものがあった。

だが、その仮面をすることで、カミュは下手な同情や慰めを固く拒否している。

先の戦争でカミュをよく知っているジェイガンやアラン、ドーガ、ゴードンら歴戦の戦士たちもまた、マルス同様、シリウスがカミュであることを確信し、その仮面の裏に隠されたカミュの心情を察していた。

ホルム海岸でシリウスに助けられたオグマも、同じ思いでシリウスを見ていた。

この仮面の騎士と初めて会ったとき、オグマはどこかで会ったことがあるような気がしたが、どうしてもそのときは思い出せなかった。
カミュが戦死したという噂をオグマは信じていたので、シリウスの容貌が咄嗟にカミュのそれと結びつかなかったが、シリウスと別れて四分の一時ほど進んだところで、突然シリウスとカミュの顔が二重写しになって、思わず「あっ！」と声をあげたのだった。
「この砦が落ちたという報せがラングのもとに届いても……」
シリウスがマルスに告げた。
「おそらくラングは何の手も打てないでしょう」
「どういう意味です、それは？」
マルスの代わりにジェイガンが尋ねた。
「旧王都サドリアとオルベルンの多くの市民たちが、アリティアの遠征隊がアカネイア軍と戦うためにこの砦に接近したという情報を聞き、勇気づけられて立ちあがったのです」
「市民が⁉」
マルスたちは思わず顔を輝かせた。
「そして、遠征隊と共同戦線を張るためにグルニア解放軍を組織したのです。おそらくラングがこの砦に向けて出陣しようとしても、オルベルンの解放軍に阻まれて一歩たりとも城から出ることができないでしょう。砦へ来るには、オルベルンの街門を通らなければなりませ

んから。それに……」

確信に満ちた顔でシリウスは月明かりに照らされた旧王都サドリアの町並みを見た。

シリウスの言葉に嘘はなかった。

四分の一時ほどしたときだった。

突然、旧王都サドリアの方角から起こった雄叫びが夜空に響き渡った。

砦と対峙していたアカネイア軍は、一瞬何が起きたのか理解できなかったが、雄叫びがさらに接近し、月明かりを浴びた草原に人々の群れが現れると、愕然となった。

屋根裏や床下に隠しておいた古びて錆びついた槍や剣、粗末な農機具や固い樫の木の棒をかざし、一〇〇〇名ちかい人々が、凄まじい形相で怒濤のようにアカネイア軍へ向かって押しかけて来る。

旧王都サドリアの解放軍だった。

解放軍は成人した男性ばかりではなかった。

なかには年端もいかない少年もいる。女性の姿もあった。

砦付近に接近して状況を探っていた旧王都の解放軍の偵察員が、遠征隊によって砦が陥落したのを確認すると、後方に待機していた別の偵察員に合図を送り、その合図が旧王都までのいくつかの地点に潜んでいた偵察員から偵察員へと伝わって旧王都へ届くと、出撃に備えていた一〇〇〇名の解放軍が街門を飛び出し、砦へ直行して来たのだ。

積もり積もった屈辱、怨念、憤怒を一気に爆発させたグルニア人の圧倒的なエネルギーと迫力の前に、アカネイア軍は完全に気圧されていた。

解放軍が一〇〇歩ほど手前まで来ると、真っ先に恐れをなして東南の森の方向へ逃げ出したのがアカネイア軍の騎馬隊だった。

歩兵部隊がそのあとを慌てて追って逃げ、やがてアカネイア軍は広大なグルニア平野の夜の闇のなかに雲散霧消した。

シリウスの話によると、旧王都サドリアの解放軍はおよそ二〇〇〇名で、残りの一〇〇〇名はアカネイア軍から旧王都を守るために警備に当たっているという。

また、オルベルンの町の解放軍は五〇〇〇名にも及ぶという。

東門が開き、遠征隊の拍手に迎えられて一〇〇〇名の旧王都サドリアの解放軍が歓喜の叫びをあげながら砦に入って中庭を埋めると、

「遠征隊のみなさんは全員疲れているでしょうから、砦は解放軍に任せてゆっくり休んでください。わたしはオルベルンへ行って街の様子を見て来ますから」

シリウスはマルスにそう告げて、馬で西門を飛び出して行った。

その後ろ姿を見送っていたジュリアンが、

「あの人、間違いなく絶対カミュさんですよね」

隣にいたオグマに言った。

「しかし、なんでカミュさんが仮面なんかして……？」
「つまらぬ詮索(せんさく)はやめるんだな」
オグマは鋭い目で睨みつけた。
「シリウス殿に対して失礼だ」
「で、でも……」
「人にはな、他人に知られたくないことだってあるんだよ。一生それを自分の胸の奥底に隠して、生きていかねばならぬことがな」

8

キネラ砦陥落とトラースの死の報せが、直属の密偵によって、ラングのもとに伝えられたのは、砦の中央塔に掲げられていたアカネイア国旗がアリティアの遠征隊の手によって引き下ろされてから、四分の一時後のことだった。
「あの愚か者めがっ！」
予期せぬ急転に逆上したラングは、力任せに椅子の足を蹴(け)って、
「あれほど早く始末しろと命じたのにっ！」
体力の消耗を待つ長期作戦をとった優柔不断な今は亡きトラースを、親衛隊の前であらん

限りの言葉で罵倒し、ただちに出撃するよう親衛隊に命じた。
だが、出撃の準備が整った直後だった。
出撃を告げる鐘の音がオルベルン城の夜空に響き渡り、門兵たちが城門とオルベルンの街を隔てている掘割の跳ね橋を下ろそうとしたとき、まるでその出撃の合図を待っていたかのように、通りや路地から武器を手にした大勢のオルベルン市民が飛び出し、雄叫びをあげながら城門前の広場に集結してきた。
驚いた門兵たちが、矢を放って威嚇すると、先頭にいた市民たちは慌てて弓の射程距離外に退いたが、他の市民たちがぞくぞくと詰めかけ、あっという間に五〇〇〇人余りが城門前の広場から町の中心にある大聖堂までのメインストリートを埋め尽くした。
オルベルン市民で構成された解放軍だった。
旧王都の解放軍と同様、武器を手にしているのは成人した男性ばかりではなかった。
老人もいれば、少年もいる。女性もいた。
キネラ砦が落ちると、砦近くに潜んで状況を見守っていた解放軍の偵察員が、一目散にオルベルンへ駆けて戻ってその報を告げ、酒場や倉庫に潜んで待機していた解放軍が屋根裏や床下に隠しておいた武器を手に広場へ押しかけたのだ。
この突然の解放軍の蜂起に、アカネイア軍は出端をくじかれ、出撃の機を失った。
城門の巡視路に駆けつけたラングは、広場を埋めた解放軍の人波を目の当たりにし、

「このうじ虫らめがっ！」

怒りで全身を震わせながら吐き捨てた。

民族としての誇りや名誉を失い、貧窮と屈従の生活を虐げられても抵抗することすらできなかったグルニア人を、「人間の姿をしたうじ虫」と形容し、侮蔑していたラングには、グルニア人の蜂起は想像だにしない、信じられない出来事だったのだ。

さらに追い討ちをかけるように、別の密偵によって、占拠された砦と対峙していたアカネイア軍の軍団が、旧王都サドリアの解放軍の襲撃を受けて遁走したという報せが伝えられると、ラングは思わず顔を強張らせて絶句し、足早に自室へ戻った。

やがて、城門前の広場に、解放軍の歓声と拍手に迎えられて、馬に跨ったひとりの騎士が現れた。

仮面の騎士シリウスだった。

旧王都サドリアとオルベルンの有力者や司祭らにアリティアの遠征隊の情報を提供し、短期間のうちに水面下で解放軍を組織させたのは、このシリウスだったのだ。

解放軍から、「打倒ラング」「グルニア奪還」のシュプレヒコールが沸き起こり、夜明け間近の空にこだました。

「いかがいたしましょう⁉」

宮殿の自室に戻ったラングに親衛隊長が尋ねると、

「ジョルジュの部隊はどうしたっ⁉」
苛立ちながら逆にラングが問い正した。
「なにゆえにやつは来ぬ⁉」
「それが皆目(かいもく)……」
見当がつかない――と、隊長は首を横に振った。
「ええいっ、消え失(う)せいっ！」
怒鳴りつけて親衛隊を自室から追い出すと、ラングは気を落ち着けるために、高価な飾り棚にある最高級の葡萄(ぶどう)酒をグラスに注ぎ、一気にそれを飲み干した。
そして、虚(うつ)ろな目で宙を見つめ、溜め息をついた。
残忍で傲慢なラングの顔が、不安に脅(おび)え、青ざめている。
グルニアに赴いてからラングが初めて見せる表情だった。
五四年の人生のなかで、これほど激しく動揺したことはかつてなかった。
ラングは部屋のなかを行ったり来たりしながら、策をめぐらした。
アリティアの遠征隊がオルベルンの街に入るのは時間の問題だ。
だが、今日か明日にはマケドニアに遠征している部隊がオルベルン港に帰港する。
当然、市民たちは騒然となる。それを機に、騎馬部隊を出撃させ、街を火の海にする。
街を焼き払えさえすれば、市民は郊外へ逃げ、市民とアリティアの遠征隊を切り離すこと

ができる——。

ラングはぶつぶつ独りごちながら何度も反芻すると、グラスに葡萄酒を注ぎ、口に運んだが、絶え間ない解放軍のシュプレヒコールに苛立って、

「くそっ！」

力任せにグラスを壁に投げつけ、グラスは音を立てて粉々に砕け散った。

東の空が明るくなっても、城門前から解放軍の数は減らなかった。

アカネイア軍の騎馬部隊も歩兵部隊も一様に動揺していた。

とりわけ歩兵部隊の雑兵たちの動揺が大きかった。

雑兵はおよそ一〇〇名。そのほとんどが旧グルニア兵である。

そして、状況が一変した今、彼らはグルニア人としての重大な決意を迫られていた。

その日の午後——。

キネラ砦で休養をとったアリティアの遠征隊は、街道を西へ向かった。

そして、オルベルン川に架かる石橋を渡り、街門から大聖堂までの通りをびっしりと埋めた熱狂的な市民の歓声と拍手に迎えられて、オルベルンの街へ入った。

さっそく、マルスや遠征隊の主な騎士たちと解放軍の指導者やシリウスたちとの作戦会議が大聖堂の一室で開かれ、一時半にも及ぶ長い会議の結果、マケドニアに赴いている騎馬部

隊一五〇騎と歩兵部隊二〇〇名のアカネイア軍の駐留部隊がオルベルン港へ帰って来るであろうことを考慮し、その前にオルベルン城を攻撃することに決めた。

城には一五〇騎の騎馬部隊と三〇〇名の歩兵部隊がいる。食料も充分ある。戦いは長期化する可能性があったが、解放軍はアカネイア軍が動揺している今、人海戦術で強引に城門を突破しようと主張して譲らなかった。

人海戦術をとれば、解放軍に多数の犠牲者が出るのは目に見えている。

マルスは市民である解放軍を戦闘に巻き込むことは避けたかった。

だが、五〇〇〇名の市民を組織したことで強気になっている解放軍の強硬な意見に、結局マルスが折れた。

「われわれはラングが総司令官としてこのグルニアに赴いて来たときから、アカネイア軍に虐げられ、蔑(さげす)まれてきましたが、あなた方遠征隊に勇気づけられて、祖国奪還のため、民族の誇りを取り戻すため、やっと立ち上がったのです。わずか九箇月の短い間に、われわれグルニア人は、ラングによってグルニア海峡を真っ赤に染めるほどの血を流し、天空にまで積み重なるほどの幾万もの命を奪われましたが、それに比べれば五〇〇〇人の命がなんだというのでしょう。祖国グルニア奪還のため、グルニア民族解放のため、今われわれは喜んで聖なる血にまみれようとしているのです」

そう言われ、マルスは黙って頷くしかなかった。

用意周到な突破作戦が練られ、出撃の時間が決まったときだった。
解放軍の兵士が血相を変えて飛び込んで来て告げた。
「アカネイア軍の軍船が来ました！」
会議に出席していた者たちは慌てて席を立ち、港へ向かった。
大きな夕日がオルベルン湾の水平線に沈もうとしている。
その夕日を背に、一隻の軍船が港へ向かって航行して来た。
マルスたちが港へ駆けつけたときには、港を警備していた五〇〇〇名の解放軍はすでにアカネイア軍の上陸を阻止するために攻撃態勢を敷いていた。
マケドニアに駐留している三五〇名のアカネイア軍を運ぶためには最低でも三隻の軍船が必要だと思われていたが、やって来たのは一隻である。
軍船が速度を落としながらさらにオルベルン港に接近すると、解放軍の兵士たちは一様に怪訝（けげん）な顔になり、やがてそれは大きなどよめきに変わった。
軍船は見覚えのあるアカネイア軍のものだが、軍船の帆柱の先端で風になびいていた軍旗は、アカネイア軍の太陽と光をあしらった朱色の絵柄のそれではなく、竜の像の意匠（いしょう）が染めぬかれたものだったからだ。
竜の像の意匠はマケドニア王家の紋章で、建国以来その紋章がそのままマケドニア国旗や軍旗として使われていた。

マルスとジェイガンは思わず顔を見合わせた。

栈橋（さんばし）からは逆光のため、軍船の兵士たちの顔を判別することができなかったが、船首に立っていた三人が、目敏（めざと）くアリティアの騎士たちを見つけ、大きく両手を振った。

マケドニアの反乱を鎮圧したあとマケドニアの地で騎士団と軍の再組織に奔走しているはずのマチスと、ホルム海岸で別れた白騎士のパオラとカチュアの美人姉妹だった。

やがて、軍船は栈橋に横づけになり、解放軍の拍手に迎えられて一〇〇名余りのマケドニア兵士が下船すると、マチスとパオラとカチュアの三人が嬉々（きき）として遠征隊の騎士たちの前に飛んで来、

「ご安心ください！」

マチスがマルスに報告した。

「マケドニアに駐留していたアカネイア軍は永遠にこのオルベルンへは現れません！　やつらはわがマケドニア軍の手によって壊滅しました！」

とたんに遠征隊の騎士や解放軍から歓声が起こった。

マケドニアの反乱を鎮圧したあと、王女ミネルバの忠臣であった竜騎士団のアギル・バルセオと歩兵部隊長のマチスは、さっそく軍の再組織に着手し、国中から志願兵を急募した。

そして一箇月後には、三二〇名だった兵士は一〇〇〇名にまで膨（ふく）らんだ。

アカネイアの駐留軍はこの増兵政策を警戒し、兵を減らすよう何度も強く命じたが、駐留軍からマケドニアを守るためには駐留軍と互角の戦力を持つことが必要だと考えていたアギルとマチスは、この命令を頑（がん）として拒否した。

このため、マケドニアの旧王都は一触即発の緊張した状況が続いていた。

ところが、一〇日前の夜、駐留軍が突如旧王都から撤退し、オルベルンへ向かうために、東海岸の港町ギルバへと急行した。

駐留軍が急遽（きゅうきょ）オルベルンへ帰るということは、アリティアの遠征隊が作戦通りにオルベルンへ接近し、グルニアは緊急事態にあるということを意味している。

アギルとマチスはただちに全軍を率いて駐留軍のあとを追った。

二人は、駐留軍が援軍としてオルベルンへ向かうのを、なんとしても阻止しなければならないと考えていた。

それが、反乱を鎮圧してくれた遠征隊に対するせめてもの恩返しになるからだ。

港町ギルバは突然の駐留軍の出現に騒然となった。

蹄音を轟かせてギルバのメインストリートを駆けぬけた駐留軍が港に着き、三隊に分かれて桟橋に停泊していた三隻のアカネイア軍の軍船に乗船し、出航の銅鑼（どら）の音が慌ただしく港に鳴り響いた。

その直後だった。駐留軍を追って来た約一〇〇〇名のマケドニア軍が、怒濤のように桟橋

に押しかけ、二隻の軍船に火矢の嵐を放ったのだ。
不意をつかれた駐留軍は、驚きうろたえるだけだった。
勢いよく燃えあがった帆は甲板に落ち、軍船はたちまち火の海と化した。
逃げ場を失ったアカネイア軍の兵士たちは次々に海に飛び込んだが、マケドニア軍の別部隊が容赦なくその兵士たちに矢の嵐を浴びせた。
残りの一隻の軍船では、甲板に雪崩込んだマチス率いる三〇〇名の部隊が、アカネイア軍と激しい戦いを繰り広げていた。
半時後、港の上空を真っ赤に染めて炎上した二隻の軍船が無残に焼け落ち、血に染まった海には、矢の嵐を浴びた二〇〇ちかいアカネイア軍の死体が浮かんでいた。
そして、一時半後、竜の像の意匠のマケドニア軍旗を掲げた軍船が、アリティアの遠征隊の援軍として、オルベルンへ向けギルバの港を出港した。
三日前の夜のことだった——。

オルベルン城のアカネイア軍は、帰港した軍船にマケドニア軍旗が翻(ひるがえ)っていたことに、強い衝撃を受けていた。
さらに半時後、港に潜んでいた密偵によって、オレルアンへ出港しようとしたアカネイアの駐留軍がマケドニア軍の強襲を受けて壊滅したという情報がオルベルン城にもたらされる

と、城内は騒然となり、兵士たちの顔からみるみるうちに生気が失せていった。
「ええいっ、しっかりせぬかっ！」
兵士たちの覇気のなさがラングを苛立たせた。
ラングは城を回りながら檄を飛ばし、鼓舞した。
「マケドニア軍が来たといっても、たかが一〇〇名の雑魚に過ぎぬ！　アリティアの遠征隊と合わせても、わが軍の半数にも満たぬ！　それに、グルニアの解放軍などになにができるというのだっ！　あのうじ虫どもらに！」
だが、宮殿の自室に戻ってひとりになると、ラングは力なく玉座に巨体を沈めた。
緊張と疲労から顔は土色に変色し、虚ろな目は宙を彷徨っている。
「こんなばかな……」
ラングは独りごちた。
この日、ラングがこの言葉を吐いたのはこれで五度目だった。
キネラ砦が陥落してからまだ一日が経っていないが、そのわずかの間に状況は一変し、アカネイア軍は今や完全に孤立している。
ラングにとっては、耐えられないほど長い、苦渋と屈辱に満ちた時間だった。
こうなった以上、あとはオルベルン城の攻防戦のみだ。
だが、城を死守し、長期戦に持ちこんだとしても、その後の展望が見出せなかった。

ラングはいいようのない虚脱感にとらわれ、玉座から立ちあがれないでいた。
そして、一刻後、戦いは思いもしないところから火蓋(ひぶた)を切った。

9

オルベルン城の掘割の水面に映った大きな月がきらめきながら揺れている。
この掘割を挟んで、両陣営は緊迫した空気に包まれていた。
城門や城壁の巡視路の狭間では、二〇〇名余りのアカネイア軍の弓部隊が解放軍の攻撃に備えて弓を構え、広場を埋めた解放軍は、弓の射程距離外の位置で、掘割に沿ってアカネイア軍と対峙していた。
城門前の最前線には、馬に乗ったマルスとシリウスとオグマがいる。
その背後にアリティアの騎士たちが顔を揃(そろ)え、さらに後方にマチスが率いるマケドニアの援軍が控えていた。
オルベルン城と街を隔てているこの掘割は、城が築かれたとき、東から流れてきているオルベルン川から水を引いて建設されたもので、流れはそのまま街の西側にあるオルベルン港へと注いでいる。
掘割の幅は、大人の歩幅で三〇歩ほど、深さは満潮時で大人の背丈の一・五倍ほどあるが、

干潮時には腰のあたりまで水位が下がる。
解放軍は水位が下がる干潮時を待って一斉攻撃を仕かけることになっていた。
攻撃の合図は大聖堂の鐘楼の鐘の音だ。
ところが、干潮まであと四分の一時というとき、解放軍もアカネイア軍も全く予期しなかったことが起こった。
突然、城門の東西から上空に火矢が二本放たれたのだ。
夜空を切り裂いたこの二本の火矢は、ともに放物線を描きながら上空で交差した。
「こ、これは!?」
真っ先に驚きの声をあげたのはシリウスだった。
それは、旧グルニア軍が戦闘を開始するときの合図だったからだ。
と、同時に、掘割に跳ね橋が下り、城門の厚くて巨大な鉄扉が開いた。
「突撃ーっ！」
すかさずシリウスが剣をかざして跳ね橋に突進し、そのあとに遠征隊が続いた。
さらにマケドニア軍と解放軍が雄叫びをあげて怒濤のように続く。
アカネイア軍はなにが起きたのか咄嗟に理解できなかった。
だが、二本の火矢を放ったのは旧グルニア兵の雑兵だった。
さらに、城門の内側にいた一〇〇名ちかい雑兵がすばやく跳ね橋を下ろし、鉄扉を開ける

のを見て、アカネイア軍は旧グルニア兵が反旗を翻したことにやっと気づいた。
市民が蜂起して城門前の広場を埋めたとき、旧グルニア兵は同胞につくべきか侵略軍に従うべきかの、重大な決意を迫られたのだが、オルベルン港に帰港したマケドニア軍旗の軍船を見たとき、腹を決めたのだ。
その中心になったのは、数名の兵にすぎなかったが、目を合わせてほんの短い言葉を交わしただけで、雑兵から雑兵へと伝わり、一〇〇名がすぐさま結束した。
グルニア人なのに同胞を裏切り、アカネイア軍の手先として働かなければならなかった彼らの苦悩には想像以上のものがあったが、彼らは彼らにしかわからない共同の罪の意識で強く繋がれていたのだ。
シリウスに続いてアリティアの遠征隊が蹄音を轟かせて城内に突入すると、虚をつかれたアカネイア軍の槍部隊と傭兵部隊が慌てて攻撃に転じた。
だが、シリウスの剣が闇を切り裂き、マルスの秘剣レイピアが鋭い閃光を発すると、悲鳴とともに勢いよく鮮血が宙に飛び、数名の兵士が地面に倒れていた。
それだけで、敵の部隊はひるみ、思わず数歩後退した。
そして、遠征隊の背後からマケドニア軍と解放軍が押し寄せると、戦意を喪失した部隊は一斉に飛散し、そのあとを勢いづいた解放軍が追った。
城門を抜ける解放軍の怒濤のような人波はいつまでも途切れることがなく、たちまちのう

ちに、城内は突入した解放軍でびっしり埋まった。
シリウスに導かれて中門を抜けた遠征隊が、馬を下りて宮殿に乱入すると、ラングの居室の前で、一〇名のラングの親衛隊が立ちはだかった。だが、
「おれとサムトーに任してください！」
言うが早いか、オグマとサムトーが剣をかざして敢然と親衛隊に立ち向かい、数呼吸もしないうちに、半数の隊員が深手を負って倒れ、驚きおののいた残りの隊員は慌てて宮殿の奥へ逃げ去って行った。
オグマが鋭い目でラングの部屋を睨みつけると、力任せに足で扉を蹴り開けて部屋へ飛びこみ、そのあとにマルスやオグマたちが続いた。
ラングは玉座についたままたじろぎもせず闖入者たちの顔をひとりひとり確かめるように見ていたが、やがてふっと笑みを漏らした。
それは、顔が引きつったようにも見えたし、精一杯の強がりにも見えた。
「ラング！　覚悟！」
オグマは剣の柄を握り直し、上段に身構えた。
マルスやシリウスや遠征隊の騎士たちは黙って見守っていた。
と、おもむろにラングが玉座から立ちあがった。
だが、抵抗する素振りは微塵もない。

両手を下ろし、オグマをじっと睨みつけている。
その目には、死への迷いも、恐怖もなかった。
それだけにかえって不気味だった。
この日の夕方、ラングはいいようのない虚脱感にとらわれ、玉座に座り込んだまましばらく立ちあがれないでいた。
虚脱感はやがて敗北感に変わった。
ラングはいろいろ策を巡らしてみたが、城の攻防戦がどのように展開しても、最終的には「敗北」という二文字に行き着く。
敗北はおのれの死を意味する。
五四年の長い人生のなかで、ラングはこのとき初めて自分の死を意識した。
ラングの全身は汗でびっしょり濡れていた。
遅かれ早かれ、いずれアリティアの遠征隊かグルニア人によって命を絶たれるときが必ずやってくる。それは三〇日先かもしれない。一〇日先かもしれない。五日先かもしれない。
いや、ことと場合によっては——そう思うと、震えがとまらなかった。
だが、どんな状況であれ、自分の命を相手に委ねることだけはしたくなかった。
たとえそうなったとしても、無様な死に方だけはしたくなかった。
自分には自分にふさわしい死に方がある。死に方を選ぶのは自分なのだ——ラングは震え

ながら何度も自分にそう言い聞かせたのだった。

「耳から切り落とそうか！　それとも指からかっ！」

オグマは冷酷な目でラングを睨み返すと、

「いかようにも。お主の望むがまま……！」

ラングが答えた。

「グルニア人の恨み、思い知るがいいっ！」

オグマが鋭く踏み込み、剣を振り下ろした。

閃光が宙を切り、血飛沫が散った。

ラングの右頬がざっくりと割れ、おびただしい血が流れている。

だが、激痛に顔を歪めながらも、ラングはオグマを睨み返した。

オグマの目は相変わらず冷酷だった。

なぶり殺してもオグマの怒りは消えそうになかった。

今度は左頬に剣先が触れ、再び血飛沫が散った。

だが、血まみれのラングはそれでもなおオグマを睨みつけた。

決してオグマから視線をそらそうとしなかった。

オグマの剣先が三度、四度と宙を切る。

ラングの右腕が、そして左腕がざっくりと口を開け、大量の血が床に滴り落ちる。

剣先が鋭く弧を描くたびに、ラングは無様に膝を床について倒れそうになるが、必死に立ちあがってオグマを睨み返す。
五度目、ラングの胸を縦横無尽に切り裂くと、ラングの懐から透明な青い美しい宝石が飛び出して宙に舞い、やがてマルスの足元へ転がり落ちた。
鶏卵の半分ほどの大きさで、トラースが持っていた宝石と同種のものだ。
なかに、四個の白く輝く光が点在している。
それらの光は春の空の真上に見ることができる蟹座の形をしていた。
血に染まった床に伏したラングは、全身を激しく痙攣させている。
だが、ラングは最後の死力を振りしぼって四つん這いになると、ふらつきながらやっと立ちあがって、カッと大きく目を見開いた。
すでに目は虚ろで、焦点が定まっていなかった。立っているのさえやっとだ。
ラングの意識はほとんどなかったが、それでも凄まじい形相で睨みつけている。
さあもっと切れ――ラングの顔はそう言っている。
オグマの冷酷な目に初めて動揺の色が浮かんだ。その動揺が、苛立ちに変わった。
何度切られても立ちあがって相手と対峙することにより、ラングは相手に自分の命を委ねることを拒否しているのだ。
ラングをここまでさせているのは、グルニアに君臨した総司令官としての誇り以外の何物

でもなかった。
その誇りを守るために、ラングは自分の死を演じていた。
残忍なやり方で幾万ものグルニア人の命を奪ったその張本人にふさわしい死に方をラングは演じていた。
これが、ラングが最後に選択した自分の死に方だった。
「たーっ！」
オグマは高々とラングの頭上に跳ぶと、
「ロレンス将軍の仇ーっ！」
渾身の力をこめて剣を振り下ろした。
ザックン——首の骨を絶つ鈍い音が響いた。
やがて、血まみれのラングの首が無残に床へ転がり落ちると、
「なんというやつだ……」
忌ま忌ましそうにオグマは足元のラングの首を見下ろしながら吐き捨てた。
ラングの首はカッと大きく目を見開いたままオグマを見あげていた。
アカネイア軍旗に代わってグルニア軍旗が天守楼の尖塔に掲げられると、城内を埋めていた解放軍から一斉に歓声と拍手が起こった。

城内に雪崩込んだ解放軍に追い詰められたアカネイア軍は、抵抗することをやめ、すでに地下牢に送られていた。

その地下牢に、カダインの大司祭であるゴオリィ・ウェンデルが捕らわれていた。

マチスがウェンデルを抱えるようにして遠征隊のところへ連れて来ると、

「ウェンデル大司祭、よくぞご無事で！」

マルスはウェンデルの手を固く握りしめ、再会と無事を喜んだ。

昨年の暮れ、ウェンデルは故郷であるマケドニアのホルム海岸にあるパセロの村からの帰り、ウチタという村でアカネイア軍に捕らえられ、このオルベルン城へ連行されて、地下牢にずっと閉じ込められていたのだ。

今年六五歳になるウェンデルは、五箇月間の獄中生活で運動不足から足腰が極端に弱っていたが、そのわりには血色もよく元気だった。

マルスがハーディンの要請によってグルニアへ遠征して来たこと、ロレンス将軍の自害、マケドニアの反乱、マケドニアとオレルアンとグラの連合軍によるアリティア城襲撃のことなどを説明すると、ウェンデルは驚き、何度も溜め息をつきながら沈痛な面持ちで聞いていたが、

「グルニア王家の二人の遺児は無事保護しております。今シーダやジェイガンたちと大聖堂で待機していますが、もうじき城へやって来るでしょう」

と告げると、ウェンデルはやっと笑顔を見せた。

「実は、わたしは大賢者ガトーさまに与えられた大事な使命を果たすために、マリクとエルレーンの若い二人にカダインを任せて、旅を続けておりました」

「大賢者ガトーさまの使命⁉」

思わずマルスが聞き返した。

ガトーはかつて聖都カダインに君臨した伝説の大賢者で、アカネイア大陸の宗教に携わる者たちの精神的支柱として、今でも宗教界に絶大な影響力を持っている。

ガトーにはリンダの祖父であるミロア大司祭とガーネフ大司祭の二人の高弟がいたが、先の戦争で、ミロアは暗黒竜王メディウスと手を組んだガーネフによって殺された。

このミロアの弟子のひとりがウェンデルだ。

「一二の星座が描かれた星のオーブという聖玉があったのをご存じですね」

ウェンデルの言葉にマルスは頷いた。

先の戦争で、大賢者ガトーはマルスたちにも大きな影響を与えた。

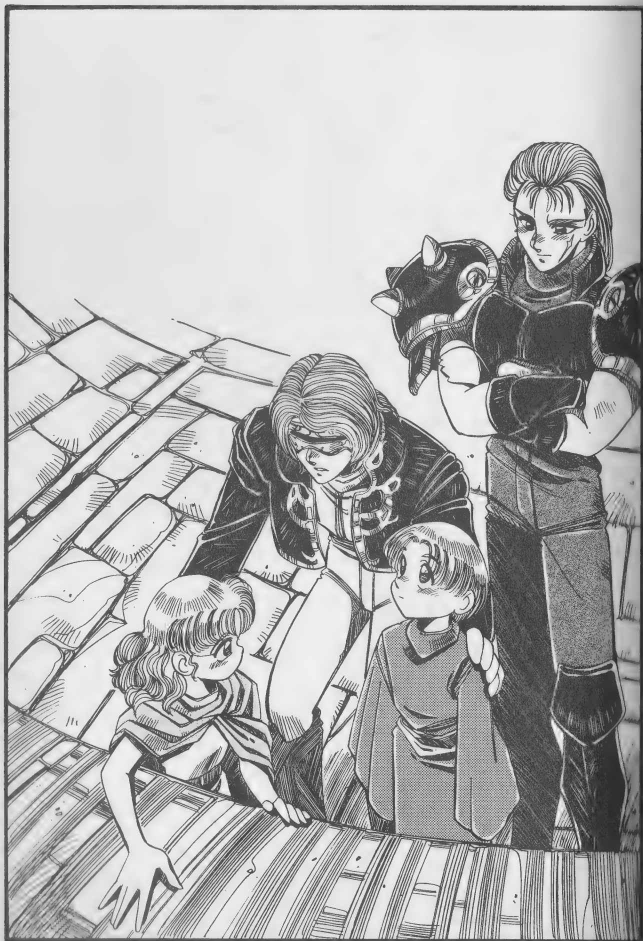
マルスの軍が失われた神剣ファルシオンを求めて聖都カダインへ行き、ガーネフ配下の魔道士の軍団と戦ったあとのことだった。

マルスたちは突然神々しい光に包まれると、その光のなかから落ち着き払った威厳のある声が響き渡った。

〈ガーネフを倒したければ、まず星のオーブと光のオーブを探すがいい〉
伝説の大賢者ガトーだった。ガトーは魔術でマルスに話しかけた。
〈そして、わたしのところへ来るがいい。さすれば、ガーネフの恐るべき暗黒魔法「マフー」を打ち破ることができる魔道書を授けよう〉
その言葉に従い、ラーマン神殿を訪れたマルスたちは、ガーネフの魔術に操られていた神竜族の王女チキを救出し、星のオーブと光のオーブを手に入れた。
そして、約束通りガトーから魔道書「スターライト・エクスプロージョン」を与えられ、その魔術の力でガーネフの暗黒魔法を打ち破ることができた。
「ご存じのように、ガトーさまは先の戦争でガーネフの暗黒魔法マフーを破るために、星のオーブからスターライトという魔法を作られました。しかし、そのときの衝撃で、オーブは一二個のかけらに分かれ、何処へか飛び散ってしまったというのです。ガトーさまは、この世界は不思議な力を秘めた五つの聖なる宝玉によって守られてい、もしそのなかのひとつでも失われると世界は破滅すると言われました」
五つの聖なる宝玉とは、星と、光と、闇と、大地と、命のオーブのことをいう。
「そして、星のオーブが砕け散ってしまった今、世界は滅びつつあると言われたのです。だから、なんとしても、星のかけらを一二個集め、星のオーブを再生せねばならぬと。わたしは旅をしながら、やっとそのなかのひとつを手に入れましたが……」

ウェンデルは懐から青い透明な美しい宝石を取り出し、それを見たマルスや騎士たちは思わず顔を見合わせた。
マルスたちが今までに手にした四個の宝石と同種のものだった。
「これは星のリブラというものです」
ウェンデルは宝石を透かして見ながら説明した。
「このなかに五個の白く輝く光が点在していますが、これらは夏、南の空に見ることができる天秤座(てんびん)の形をしています」
「それなら、わたしたちも持っています！」
マルスが四個の星のかけらを差し出すと、
「おおっ！」
ウェンデルは思わず顔を輝かせ、ひとつひとつを確認しながら嬉々として説明した。
マケドニアでリュッケが持っていた星のかけらは星のタウルス。キネラ砦でトラースが持っていた星のかけらは星のジェミニ。サムトーが持っていた星のかけらは星のアクエリア。そして、ラングが持っていた星のかけらは星のキャンサーだった。
「グルニア！　グルニア！　グルニア！」
広場や通りを埋めた解放軍や市民は拳(こぶし)をあげて国名を絶叫していた。

やがてその叫びがグルニア国歌に替わった。
人々はそれぞれの感慨を胸に、声の限りに合唱し、歌声は夜空にこだました。
この光景を城門の巡視路から見つめている四つの人影があった。
オグマとシリウスと、グルニア王家の遺児ユベロとユミナである。
幼い二人は、感動に胸を震わせ、興奮した面持ちで見ている。
「いずれお二人がこのグルニア国を治めるときがくるでしょう」
ユベロとユミナにシリウスが諭すように言った。
「でも今夜のことは決してお忘れにならないでください。グルニアの人々のあの嬉しそうな喜びに満ちた笑顔を、しっかりと瞳の奥に焼きつけてください」
シリウスの言葉に、ユベロとユミナは大きく頷いた。
この夜、オルベルンの街は夜が明けるまで祖国奪還の喜びに沸いた——。



第6章　遥かなる祖国

1

ラーマン山地の麓(ふもと)は鮮やかな緑に覆われていた。
やわらかな陽光とその陰影が生い繁った青葉の色合いをさらに美しく際立たせる。
同じ緑色なのによくもこんなに様々な色があるものだと感心するほど色が豊富だ。
アリティアの遠征隊は、この緑豊かな風景に目を奪われながら、麓の小さな街道を北東へ向かって行軍していた。
鳥のさえずりが聞こえ、さわやかな初夏の風が渡ってくる。
暦はすでに五の月から六の月へ替わっていた。
ラング将軍との戦いで大勝利をした翌日、解放軍の指導者や仮面の騎士シリウスらによって祖国再建案が発表され、オルベルンの街は希望と活気に満ちていた。

アリティアの遠征隊は、出発の準備が整うまで二〇日ほど解放軍の本部となったオルベルン城に滞在し、長旅と戦いの疲れを癒(いや)した。

そして、七日前、遠征隊は街門を埋めた大勢の市民に見送られてオルベルンを出発し、祖国アリティアへ向けてグルニア街道を北上した。

解放軍の援軍として戦ったマケドニア軍は旧アカネイア軍の軍船ですでにマケドニアへ帰国していたが、残った隊長のマチスと白騎士のパオラとカチュアの姉妹が、遠征隊に同行していた。

また、グルニア王家の王子ユベロと王女ユミナの二人も遠征隊に同行した。

グルニアの祖国再建のめどがつくまで、ウェンデル大司祭が責任を持って二人の遺児を預かるということで解放軍と合意したからだ。

「ラング将軍の死」「アカネイア派遣軍壊滅」の報せは、すでにグルニア全土に知れわたっていて、遠征隊は行く先々の街道筋の町や村で人々の大歓迎を受けた。

だが、グルニア北部のカシミア地方にはまだアカネイア軍の一部が駐留している。

祖国アリティアへ帰国するためには、まずこの敵を破らなければならなかった。

街道筋の人々の情報によると、北部の町や村には緊迫した空気が漂っているという。

キネラ砦の戦いで旧王都サドリアの解放軍の襲撃を受けて霧散したアカネイア軍の残党が北部へ逃げ、カシミア地方に駐留しているアカネイア軍に合流したという噂(うわさ)もまことしやか

に流れていた。

やがて遠征隊はグルニア中部へ入ると、グルニア街道を西へ外れ、この山麓の名もない小さな街道をラーマン神殿がある北西へと向かったのだった。

アカネイア軍の目から逃れるためでもあったが、ラーマン神殿へ行けば星のかけらに関するものがなにかあるのではないかと考え、ついでに立ち寄ることにしたからだ。

そのあと、ラーマンの黒い森を通ってカシミアへ接近するつもりだった。

ラーマン山地の北の山麓からカシミア地方まで続いている広大な森林地帯をグルニア北部の人々は通称ラーマンの黒い森と呼んでいたが、アカネイア軍に気づかれずにカシミアへ接近するには恰好の森だった。

オルベルンを出発してから九日目の夕方近く、遠征隊は古い石畳の旧道に出た。

グルニア街道の宿場町セイロとラーマン神殿を東西に結ぶ旧ラーマン街道である。

ここから西へ馬を疾走させると一時ほどでラーマン神殿へ着ける。

マルスは旧道から少しはずれた小川のそばの平坦地に野営することに決めると、ラーマン神殿へ向かう部隊を組織した。

そして、半時後、野営地に遠征隊を残し、部隊を率いて出発した。

部隊はマチスとウェンデル大司祭の他に、ドーガ、ゴードン、オグマ、サムトー、若き騎士のロディ、ルークの計八名だった。

「ラーマン神殿の主護神はナーガですが、ナーガの神話をご存じですか？」

旧道を半時ほど馬を走らせ、森の脇の小川で馬を休ませていたとき、ウェンデルがマルスに尋ねた。

「いいえ。守護神ナーガの名前は聞いたことがありますが……」

マルスが首を横に振ると、

「今から一〇〇〇年以上も前のことですが……」

ウェンデルはおもむろにナーガの神話を話し始めた。

「まだこのアカネイア大陸に王国はなく、人々は小さな村々に分かれて暮らしていたといいます。そのころ、世界には恐ろしい魔物が棲(す)んでいて、たびたび人間を襲ってきたのだそうです。そして、ある日、幾万もの魔物が大挙して押し寄せ、人間を絶滅寸前まで殺しつくしたといいます。そこで、わずかに生き残った人々が、神に助けを求めると、神は人々の願いを聞き入れて、天界から巨大な戦士をこの地上につかわされたのです。その戦士は右手に光り輝く剣を、左手に五つの宝玉を埋め込んだ楯(たて)を持っていたといわれています。そして、激しい戦いの末、魔物どもを絶滅させ、天界へ去って行ったと……。『その者、神の化身なり。我等(われら)が守護神なり……』ラーマン教典の一節にも記されておりますが、それがラーマン神殿に祀(まつ)ってある主護神ナーガなのです」

西の空は紅色に染まっていたが、森にはすでに闇が迫っている。

ウェンデルの説明が終わり、出発しようとしたときだった。

突如、森の奥から凄まじい羽音を立てて無数の大鳥が飛び立ち、怒濤のような蹄音が森のなかに轟いた。

二〇ばかりの騎馬で、盗賊ダールの一味だった。

グルニア北部でも他の国々と同様、盗賊や山賊が跋扈していて、ラーマン山麓を中心に悪事を働いているこのダールの一味は、グルニア北部では有名な盗賊団だったが、マルスたちはそのことを知るはずもなかった。

盗賊団は一気に部隊に突進し、激しい戦いになった。

賊のやり方は、命を奪い、なんでもいいから根こそぎ剝ぎ取ることである。

部隊には馬、剣や槍や弓の武器類、鎧兜の防具、所持金、宝飾品、食料がある。

相手の武力を考慮しなければ、襲うには最高の獲物であった。

略奪したあと、必要なものは自分たちのものにし、それ以外のものは道具屋や闇商人に売って金に換えるつもりなのである。

だが、一味は襲った相手がオルベルン方向から逃亡して来たアカネイア軍の残党だと勘違いしていたようだ。

部隊がすばやく応戦し、反撃しようとして馬に飛び乗ったときには、すでに四名の盗賊が深手を負って落馬していた。

「アリティアの遠征隊と知ってのことかっ!?」

ドーガが叫ぶと、盗賊たちは驚いて思わず攻撃の手をとめたが、

「ええいっ！　なにをうろたえておる！」

口から顎、頬まで黒髭を生やした大男がすかさず一喝した。

オグマやドーガに劣らぬこの巨漢が首領のダールだった。

「構わぬ！　やれーっ！」

ダールの声に、再び激しい戦いが始まった。

だが、いくら凶暴な盗賊たちでも、歴戦の戦士たちが相手では勝負にならなかった。

マルスの秘剣レイピアが、ドーガの鋼の槍が、オグマの鋼の剣が、サムトーの剣が、的確に敵の腕や足を捕らえ、悲鳴とともにおびただしい鮮血が宙に飛んだ。

ほんの数呼吸の間に、無傷の盗賊はダールの他にたったの五名になっていた。

「うぬぬぬっ！」

予想外の戦況にさすがのダールも愕然として叫んだ。

「引けーっ！」

盗賊たちが慌てて逃げ、すかさず部隊が追った。

曲がりくねった林の道を抜けて荒涼とした大地に出たときには、背後から部隊の攻撃を受けた盗賊たちは深手を負って落馬し、残ったのはダールひとりだった。

ダールと部隊の差は二〇馬身ほどある。
と、必死に逃げるダールの前方に二つの人影が現れた。
背中に長剣を携えた二五、六歳の背の高い男と二一、二歳の美しい旅の女だ。
二人は東の空に出たばかりの月明かりを頼りに北の方角から歩いて来たのだ。
猛然と接近して来る先頭の人馬を見て、二人は立ち止まった。
だが、ダールは速度を落とさず二人を目がけて馬を疾走させた。
男の氷のように冷たい目がきらりと光った。
ダールの馬が数馬身手前まで迫ると、
「キャーッ！」
女が恐怖に顔を覆って悲鳴をあげたが、同時に男は女を横に突き飛ばしていた。
そして、ダールの馬を左にかわしながら、月を背に高々と宙に跳んでいた。
男は腰まで伸びた長い髪を首のうしろのところで紐でひとつに束ねている。
その長い髪が男の背後の宙に優雅に舞いあがると、月光を浴びた男の長剣が一閃し、
「うわあっ！」
ダールの悲鳴が大地に響いた。
慌てて馬を止めながら、マルスたちは男の見事な剣技に目を見張った。
男の剣はダールの左肩から左背中を一直線に切り裂き、ダールの腰に巻かれていた革袋を

も真っ二つに切り裂いていた。

その革袋からいくつもの宝石や宝飾品が勢いよく飛び散って月光を浴びてきらきら輝きながら宙に舞い、馬上にうずくまった血まみれのダールを乗せた馬が蹄音を残して北の方角へ駆け去ったそのあとに、音を立てて散乱した。

「ナバール!?」

男を見てマルスとオグマが同時に叫んだ。

女を助け起こした男はおもむろに部隊を振り向いた。

白磁（はくじ）のような美しい肌と、涼しげな整った顔立ちをしている。

だが、目は氷のように冷たい。

男はマルスとオグマの顔を確認すると、懐かしそうにふっと笑みを浮かべた。

笑うと、男でさえどきっとするような妖（あや）しさと艶（つや）やかさがある。

男の長剣の柄（つか）には赤い美しい宝石が施されていた。

孤高の剣士として名高いナバール・ジョルダだった。

ナバールはマルスに目礼すると、

「しばらくだな、オグマ・スビル」

冷たい視線でオグマを見、長剣の柄を握り直した。

「おまえを捜して旅をしていた」

戦士たちは緊張した。だが、
「悪いが今おまえと決着をつける気はない」
ひと呼吸置いてオグマが答えた。
「マルスさまとともにアリティアを奪還し、ハーディン皇帝と戦わねばならぬからな」
ナバールは真意を確かめるようにオグマを睨(にら)みつけていたが、
「よかろう。楽しみはそのときまでとっておこう。だが、おれはおまえから離れぬ。今日からおまえと一緒に行動をともにする。そのときが来るまでな」
「構わぬ。願ってもないことだ」
二人は睨み合ったまま、互いにふっと笑みを浮かべた。
「アリティアのマルス王子とその部下の者たちだ」
背中の鞘(さや)に長剣を納めながらナバールが隣の美しい女に説明すると、
「アリティアの……!?」
脅(おび)えていた女の顔に初めて笑顔が浮かんだ。
ナバールは女をマルスたちに紹介しようとしたが、まだ名前もなにも聞いていなかったことに気づき、
「名は……」
と、尋ねると、女はマルスに向かって、

「フィーナ・セダカといいます」
明るい通る声でにっこりと微笑んだ。
「フィーナと呼んでください」
目鼻立ちのはっきりした美しい顔が、微笑むと一層魅惑的になる。
「わたしは港町ワーレンの出身で、旅芸人の踊り子をしています」
踊り子と言われてマルスや部隊の戦士たちは妙に納得した。
魅惑的な笑顔は舞台で培(つちか)っているうちに、自然と身についたものなのだ。
身振りや表情が派手で、男心をどきっとさせるほど艶(あで)やかだが、よく芸人にみられるような媚(こび)を売るようなところは微塵(みじん)もない。その仕種(しぐさ)にはなんのけれんもなかった。
ワーレンはアカネイア帝国の南西部にある人口一万二〇〇〇の港町で、昔からその地方の政治、経済、文化の中心地として栄えてきたところだ。
アカネイア王国が建国される前から交易の中継基地として賑(にぎ)わってきた港町だけに、自由の気風が強く、六〇〇年ほど前のアカネイア王国建国の際、アリティアやオレルアン、グラ、グルニア、マケドニアなどの地方が相次いで王国に併合されていったなかで、他よりも経済的に豊かだったこのワーレンだけが最後まで抵抗した。
結果的にはワーレンはアカネイア王国に併合されたが、その交換条件としてワーレンは王国から独立した自治体として認められ、傭兵(ようへい)部隊を組織することを許された。

以来、町は王国のなかの自治都市として、有力者の合議制によって運営されてきた。

そんな歴史的背景からか、帝国や中央の権力への反発心が根強く残っていて、市民は今でも自らをアカネイア人と呼ばず、ワーレン人と名乗っていた。

だが、先の戦いでマルスたちの連合軍がワーレンへ赴いたとき、ワーレンの傭兵部隊が連合軍と手を組み、「祖国アカネイア」のためにドルーア軍と戦ったのだった。

市民たちはみな連合軍に親切で好意的だった。

このワーレンの町の出身ということで、戦士たちは余計フィーナに親しみを覚えた。

「実は、三日前のこと」

フィーナは言葉を続けた。

「一緒に旅をしていた一座とはぐれてしまったんです」

そして、昨日の夕暮れ、森のなかでダールとは別の盗賊団に襲われた。

そこを助けてくれたのが通りがかったナバールだった。

「わたしたち旅芸人は、色んな国の町や村を旅しながら芸をし、その土地の人々を楽しませて、一日の労働の疲れを癒してやるのが喜びなのですが、世の中が物騒になったせいかどこの国の町や村へ行っても、なかなか人が集まってくれなくて、商売になりません。それにグルニアへ来てからは、アカネイア軍のいい噂を聞かなかったものですから、同じ国の人間としてあまりいい気持ちはしませんでした。そんなこともあって、世の中がもう少し平和にな

るまで故郷のワーレンへ帰っていようかなと思っていたのです。その矢先でした、一座とははぐれてしまったのは。わたしのいた一座はもともと一匹狼の芸人の集まりですから、わたしがいなくても心配はいりません。ですから、途中まででも結構ですから、みなさんとご一緒させてください」

戦士たちは魅惑的なフィーナに好感を覚えていたので異存はなかった。

マルスが快く了解すると、

「嬉しい！」

フィーナは小躍りしながら全身で喜びを表した。

と、それまで鋭い視線で自分と瓜二つのサムトーを睨みつけていたナバールがサムトーに接近し、サムトーは焦った。サムトーもナバールの視線に気づき、気まずい思いをしながらずっと視線をそらしていたのだが、

「貴様か。おれの名を勝手に語っているやつは」

「あっ、いやっ、お、おれはただそのっ！」

転がるように馬から飛び下りて言い訳をしようとしたとき、ナバールの長剣が再び月光を浴びて一閃し、

「うっ！」

サムトーは一瞬なにが起きたのか判断できずに立ち竦んだ。だが、

「ナバール・ジョルダはこの世にひとりしかいない」
抑揚のない声でナバールが背中の鞘に長剣を納めたあとだった。
サムトーはナバールと同じように腰まで伸びた長い髪を首のうしろのところで紐でひとつに束ねているが、その紐のほんの少し上の部分が少しの乱れもなくスパッと切れ、馬の尻尾のような長い髪が、ばさっと音を立ててサムトーの足元に落ちた。
〈おれなんか足元にも及ばねえ……〉
軽い眩暈を覚えながらサムトーは肩で大きく息を吐いた。額に冷や汗が浮かんでいた。
改めてナバールの剣技の凄さに度胆を抜かれたのだ。
そのあと、騎士たちは手分けして散乱している宝石や宝飾品を拾い集めた。
それらはすべて盗品と思われたが、なかに透明な青い美しい宝石が混じっていた。
宝石は鶏卵の半分ほどの大きさで、そのなかに一五個の白く輝く光が点在している。
騎士が持って来た宝石を見て、
「おおっ、これは！」
ウェンデルは思わず顔を輝かせた。
一五個の白く輝く光は、夏の南西の空に見ることができる蠍座の形をしていた。
一二の星のかけらのひとつ、星のスコーピオだった。

石段をのぼって正面玄関からラーマン神殿に入ったマルスたちは、松明の明かりに照らし出された荒れ果てたホールを見て一瞬言葉を失った。

神殿は盗賊やならず者たちによって見る影もなく無残に破壊されていた。

先の戦いでマルスたちがラーマン神殿を訪れたときには、神殿は盗賊の巣窟と化していたが、それでも古代遺跡としての面影を強く残していた。

巨大なドーム型の天井に描かれた美しい壮大な絵。

その天井を支えている何本もの大きな石柱に施された見事な彫刻。

ホールをぐるりと取り巻いた壮観な壁画や彫刻。

それらは、ナーガの神話を具象化したものだという。

何百年も放置されていたとはいえ、その神聖さは損なわれていなかった。

だが、今それらはどこを探してもなかった。

絵や壁画は乱暴に掻き消され、彫刻は形もないほどに粉々に砕かれ、それらの残骸が足場もないほど床に散乱している。

奥の神殿の惨状も目を覆うばかりだった。

巨大で華麗だった祭壇も、その前にあった玉座も、跡形もなくなっていた。

もちろん、星のかけらに関する情報はなにもなかった。

2

月もなく、カシミア海峡は夜の闇にすっぽりと覆われていた。
この海峡を古ぼけた一隻の小舟が櫓(ろ)の音を軋(きし)ませながらカシミア島へ接近していた。
櫓を漕(こ)いでいるのは巨漢の漁師である。
そして、三人の男が粗末な茣蓙(ござ)を上から被り、舟底に身を屈(かが)めていた。
二人の男は見るからに旅の流れ者といった出(い)で立ちであるが、腰に携えた剣は、流れ者のそれに似つかわしくない立派なものだった。
船頭は漁師に変装したドーガであった。
流れ者に扮(ふん)しているのはマルスとアランである。
行く手には黒々としたカシミア島が横たわっていた。
最初マルスたちはアカネイア軍の情報を探るために流れ者に変装してカシミア大橋を渡ってカシミアの町へ行こうとしたが、ナバールの話によると、「ラング将軍の死」と「アカネイア派遣軍壊滅」の噂がカシミア地方にもたらされてから、カシミア島に駐留しているアカネイア軍の検問が厳しさを増したというので、小舟でカシミア島へ渡ることにしたのだ。
ラーマン山地を源流とするラーマン川が、広大なラーマンの黒い森を縫うように流れ、や

がてカシミア海峡に注ぐが、その河口に戸数二〇あまりの小さな漁村がある。
この日の夕方、マルスたちは馬を飛ばしてこの漁村まで来て、すでに寿命がきているこの小舟を漁師から買い取り、同行した若き騎士のロディに馬の番を任せ、夜になるのを待って海峡へ漕ぎ出したのだ。
遠征隊はこの漁村から徒歩で一時ほど南下したラーマンの黒い森で野営している。
また、マルスたちの他にも、二班の偵察隊が近隣の町や村へ散っていた。
マルスたちがラーマン神殿を訪れてから四日後の夜のことであった。
小舟を漕ぎ出してから四分の一時後、カシミア大橋や街門がある東側とは反対側の島の西南の岩場に小舟を着けると、島と町全体をぐるりと取り囲んでいる高い街壁を越えてカシミアの町へ潜入した。
カシミア島は上空から見ると東西に長い楕円形の地形をしていて、島の北西部に華麗な旧王城が、島のほぼ中央に荘厳（そうごん）な大聖堂がある。
この大聖堂前の広場を中心に通りが八方に伸びていて、大聖堂と街門を結ぶ東西の通りが町の中心街であった。
通りには道具屋、食料品店、宝飾品店、雑貨屋、小間物（こまもの）屋、反物（たんもの）屋などの様々な店が軒を並べているが、ほとんどが日暮れとともに店を閉めていた。
だが、この日はこの季節にしては珍しく一日中蒸し暑かったためか、夜風に涼を求める町

の人たちが通りにたむろしていた。
町の人に尋ねると、町に居酒屋が五、六軒あるという。
マルスたちは町で一番繁盛しているという宿屋の一階にある大きな居酒屋に入ったが、店内は閑散としていて客は数人しかいなかった。
情報を集めるといっても、最初からあれこれ尋ねるとかえって怪しまれるから、店の者か客に声をかけられるまで、黙って客たちの他愛のない世間話に聞き耳を立て、そのうちに声をかけてきたら、二言三言会話を交わし、信用ができそうな相手だと判断したら、相手の反応を見ながら少しずつ聞き出すのが今までの手だった。
だが、彼らはマルスたちが入って行ったとき胡散臭(うさんくさ)そうに一瞥(いちべつ)しただけで情報にもなりそうもない世間話に夢中になっていたし、店の者もまったく無愛想で声をかけてきそうもなかったので、注文した地酒にほんの少し口をつけただけで席を立った。もっとも、アランだけはしっかりと最後の一滴まで飲み干していたのだったが。
居酒屋を出たマルスたちは次に町にひとつだけあるという闘技場へ入った。
闘技場では、武装した奴隷剣闘士が真剣や槍で闘う試合と奴隷拳闘士が素手で闘う試合が一晩に何試合も組まれていて、客はどちらが勝つかを賭(か)け札を買って賭ける。
ときには剣闘士と猛獣を闘わせたり、猛獣同士を闘わせたりするという。
この夜、二〇〇人ほど入れる客席には三、四〇人の客しかいなかったが、客たちは賭け札

を握りしめ、鉄柵（てっさく）に囲まれた円形のリングで行われている奴隷拳闘士の闘いに熱い声援を送っていた。

巨漢の白人と黒人の闘いだったが、ともに鍛えぬかれた逞（たくま）しい筋骨をしていた。

激しい殴り合いの応酬は巨漢が優位だったが、黒人が巨漢の拳をかわして高々と宙に跳び、巨漢の顔面に強烈な蹴りを一発入れると形勢が一転した。

巨漢は無様（ぶざま）な恰好（かっこう）でリングの端まで吹っ飛ぶと、すかさず黒人が倒れた巨漢を組み押さえて顔面に何発もの肘（ひじ）撃ちを食わせ、さらに飛びあがって何度も膝（ひざ）で顔面を攻撃した。

そのたびに鮮血が宙に飛び、やがて血まみれの巨漢の目から見る見るうちに生気が消えていくと、客たちから歓声と溜（た）め息が漏れた。

その直後だった。突然賭け札売り場から男の悲鳴があがり、

「強盗だーっ！」

という叫び声が場内に響き渡った。

係員が賭け札売り場から席をはずした一瞬の隙（すき）に、覆面をした二人組の強盗が押し入って、売り上げの一部を入れた布袋を奪って外へ逃げたのだ。

賭け札売り場の近くにいたマルスたちが慌てて強盗を追い、そのあとに闘技場の用心棒たちが続いた。

二人組の強盗がいくつかの路地を駆けぬけて必死に逃げたが、アリティア騎士団一の駿（しゅん）

足を誇るアランがその距離をどんどん縮めた。

アランの手には途中路地で拾った両手を左右に伸ばした長さの棒が握られていた。

七、八歩ほどの距離まで追いつくと、アランはすかさず布袋を持っている強盗の足を目がけて棒を投げ、棒は強盗の足に絡まって、強盗は悲鳴をあげながら無様に転倒した。

驚いて相棒が立ち止まったときには、アランはすでに剣を抜いて布袋を持っている強盗を見下ろしてい、マルスとドーガが駆けつけていた。

「金さえ返したら見逃してやるっ！」

だが、アランの言葉に強盗は反射的に布袋を持って逃げ出そうした。

その瞬間、アランの剣が鋭く宙を切り裂き、

「うわっ！」

強盗は悲鳴をあげて思わず立ち竦(すく)んだ。

その拍子に布袋を手放し、硬貨の詰まった布袋は金属音を立てながら石畳に落ちた。

威嚇(いかく)のつもりだったが、勢い余って剣先が男の懐(ふところ)の部分をも切り裂いてい、その懐から鶏卵の半分ほどの大きさの透明な青い美しい宝石が転がり落ち、マルスたちは思わずその宝石に目を奪われた。

その隙に、強盗は恐怖に震えながら相棒とともに一目散に逃げ去った。

宝石を拾ってみると、なかに九個の白く輝く光が点在していた。

それらの光は、夏の西の空に見ることができる獅子座の形をしていた。
一二の星のかけらのひとつ、星のレオだった。
そこへ、闘技場の用心棒たちが息を切らしながら駆けつけて来た。

用心棒に案内され、闘技場に隣接した賭博場の二階の一室へ行くと、三五、六歳の目鼻立ちのはっきりした美貌の女性がマルスたちを出迎えた。
この女性が闘技場と賭博場の経営者だったが、この手の職業の経営者らしからぬ清楚な身なりをしていた。化粧もほんのちょっとしているだけだった。
だが、見た目と違って、さすがに商売人らしく如才なかった。
これだけの闘技場と賭博場を切り回すには、かなりの度量としたたかさを兼ね備えていなければ勤まらないのだ。
経営者はマライヤ・ガイと名乗ると、丁重に売上金を奪い返してくれた礼を述べ、最高級の葡萄酒をグラスに注いで三人に勧めた。
「ところで……」
マライヤはワインに少し口をつけるとマルスを見つめた。
「なにをしにカシミアの町へ見えられたのですか？」
「おれたちは旅の者だ。この町を通りがかっただけなのさ」

ドーガがマルスの代わりに答えた。
だが、マライヤはドーガを無視してマルスを見つめたまま言った。
「いくら旅人に姿を変えても、生まれや育ちは隠せませんよ」
長年の客商売で培われてきたマライヤの眼力(がんりき)に内心驚きながらも、マルスたちは、なにを言っているのだ?――といった顔できょとんとしてマライヤを見ている。
「おれたち流れ者は隠すような生まれや育ちなんか持ってねえよ」
ドーガはひょうきんにとぼけてみせた。
相手の正体がわからないかぎり自分たちの身分を明かさないつもりだった。だが、
「もしかしたら、アカネイア軍の情報が知りたいのではないかと思いましてね」
マライヤがずばりと言い当て、マルスたちは内心どきりとした。そのとき、ほんの一瞬だがマルスたちの目が鋭く光ったのをマライヤは見逃さなかった。
「アカネイア軍?　おれたちがそんなこと知ってどうするんだい?　あんたなにか勘違いしてないかい?」
ドーガがわざとおどけてみせたが、
「この土地の者でアカネイア軍をよく思っている者はおりませんよ」
マライヤはやさしく微笑(ほほえ)んだ。
「ご安心ください。マルスさま」

いきなり名前を言われ、さすがのマルスたちも動揺を隠せなかった。

マルスがうろたえながら慌ててとりつくろおうとすると、

「さあ、もう一杯どうぞ」

すかさずマライヤがマルスに葡萄酒を勧めた。絶妙のタイミングだった。

マライヤの鳶(とび)色の目には親しみがこめられていた。

それを見てとったマルスは素直にマライヤの言うことを認めると、

「先の戦争でマルスさまの率いる連合軍とドルーア帝国軍に加担したグルニア黒騎士団がカシミア大橋とこの町で激しい戦いを繰り広げましたよね。そのとき、あなたのご活躍をこの目でしっかりと見たのですよ。あのときの勇ましくて凛々(りり)しいあなたのお顔がなぜか瞼(まぶた)に焼きついていましてね。ですから、さっきこの部屋へ入って来られたとき、正直言って驚きました。まさかとは思ったのですが、はっきりと確認してからでないと、迂闊(うかつ)なことが言えませんから、ちょっと鎌(かま)をかけて探りを入れてみたのです」

マライヤはそう言って非礼を詫(わ)び、アカネイア軍の情報を提供してくれた。

このカシミア大橋とカシミアの町には、一〇〇騎の騎馬と二〇〇名の傭兵(ようへい)からなる一軍団が、カシミア海峡の対岸の北東にあるトルタ砦(とりで)にも同じように一〇〇騎の騎馬と二〇〇名の傭兵からなるジョルジュの軍団が駐留しているという。

軍団の構成を初めて知ったが、ここまでは今まで得ていた情報と同じだった。

マルスたちはカシミア大橋で大橋とカシミアの町に駐留している軍団を突破し、そのまま一気に国境へ向かって北上する作戦を考えていた。

展開によっては、カシミア大橋を突破したところでジョルジュの軍団が立ちふさがる可能性があったが、できることならジョルジュの軍団とは戦いたくなかった。

だが、驚いたことに、これ以外にもアカネイア軍が駐留しているというのである。ラーマン川の河口の近くにあるディナの砦には、一〇〇騎の騎馬と二〇〇名の傭兵からなる一軍団が二〇日ほど前から、さらにグルニア街道の東にあるハザンの砦にも一〇日ほど前から一〇〇騎の騎馬と二〇〇名の傭兵からなる軍団が駐留しているという。

この二つの砦はカシミア大橋の南側にあるソルコの村を挟んで東西に位置してい、ソルコの村からともに徒歩で半時ほどの至近距離にある。

そして、ハザンの砦の軍団を率いているのがアストリア・ハイゼンだという。

アストリアはアカネイア軍生えぬきの傭兵で、先の戦争でグラ王国のメニディ砦を守っていたジオル将軍の援軍としてアカネイアから派遣されていたが、マルスと行動をともにしていた恋人でアカネイア騎士団のミディア・バルボと再会すると、マルスたちの連合軍側につき、マルスとともに最後まで戦いぬいた戦士だ。

「それに……」

マライヤはさらに衝撃的なことをマルスに告げた。

「アカネイアの皇帝が二〇〇〇名の大軍を率いてカシミアへ向かっているそうです」
「ハーディンが⁉」
「はい。ときどきお忍びで賭博場に遊びに来るアカネイア軍の幹部から聞いたのですが、明後日の昼前には国境を越えるとか」
　国境とカシミア海峡とは目と鼻の先の距離だ。徒歩で一時半とかからない。
　想像だにしなかった最悪の状況にマルスたちは愕然としていた。
　明後日には国境を越えるということは、カシミアと王都パレスの距離を考えれば、ハーディンは四〇日ほど前に王都パレスを出発したことになる。
　四〇日ほど前ということは、グルニア本島に上陸したアリティアの遠征隊が山峡のカバル砦でアカネイア軍を破ったころである。
「ラング将軍の死」と「アカネイア派遣軍壊滅」の報せが、オルベルンから急行した密偵によってハーディンのもとにもたらされたのは、おそらくハーディンがグラに入国したあたりではないかと思われるが、それとは関係なくハーディンが二〇〇〇名の大軍を率いてグルニアへ遠征して来たということは、ハーディンがラングをどれだけ信用していたかはわからないが、ラングがアリティアの遠征隊を壊滅すればそれでよし、もし失敗したなら自らの手で壊滅させようと、二段構えの作戦に出ていたことを意味する。
　この二〇〇〇の大軍が蹄の音も慌ただしく軍靴を響かせながら、アリティアの遠征隊がカ

シミア大橋を突破して北上しようとしていた道を逆に南下し、明後日の昼前には国境を越えようとしている。

そして、明後日の昼過ぎには、現在カシミア地方に駐留している一二〇〇名のアカネイア軍にその二〇〇〇名の大軍が合流するのだ。

カシミアから王都アリティアまでの行程は徒歩でわずか一五日である。

だが、ハーディンの大軍の南下によって、アリティア遠征隊の思惑はもろくも崩れ、祖国アリティアへの道を完全に封じられてしまったのだ。

半時後、賭博場の裏口を出たマルスたちが暗い気持ちで路地を抜けようとしたとき、

「マルスさま……」

突然、暗闇から声をかけられた。

声をかけた男は黒い魔道士(まどうし)の衣服をまとった小柄な老人だった。

「賭博場へ入って行くのを偶然見かけましたので、出て来るのをお待ちしておりました」

頬がそげ落ち、眼窩(がんか)の奥が異様に鋭いその顔を見て、マルスたちは驚いた。

ナーガ族の王の娘であるチキの守り役のメオラ・バヌトゥだった。

先の戦争で、マルスたちは暗黒竜王メディウスの呪術(じゅじゅつ)に操られていたチキをラーマン神殿で助け出したが、そのとき力になってくれたのがこのバヌトゥだった。

「どうしてこんなところにいるんだ？　チキは元気か？」

マルスが尋ねると、バヌトゥは首を横に振った。
「ガトーさまが氷竜神殿へ連れて行かれました」
「氷竜神殿？」
「はるか北の果ての氷の大地にある神殿です。しかし、勇者アンリの他に今までだれも訪れた者はない」
「アンリ？　もしかして、そこは勇者アンリの伝説に出てくる神の国なのか？」
「わしにはそれ以上なにも言えませぬ。知りたければガトーさまにお聞きくだされ。それよりも大事な話が……」
バヌトゥはマルスに耳打ちをし、
「なにカインが!?」
マルスが思わず大きな声で聞き返した。
「カインがカシミアの近くにいるというのか!?」
「しっ……」
バヌトゥは辺りに気を配りながら頷いた。

3

　その夜、遅く――。
　ラーマンの黒い森に野営していた遠征隊は重苦しい空気に包まれていた。
　マルスたちの他に二組の偵察隊が近隣の町や村に行ったが、その偵察隊の情報を聞いたあと、マルスがハーディンの率いる二〇〇〇名の大軍が明後日の午後にはカシミアへ到着すると告げると、集まっていた歴戦の戦士たちは一様に驚き、絶句した。
　しばらくの間、だれもが口を利けないでいた。
　森の奥から野鳥の不気味な鳴き声が聞こえてくる。
　生温かい湿った風が吹きぬけて行った。
「しかし……」
　やっとジェイガンが重い口を開いた。
「もしハーディンのことを知らずに、最初の作戦通りにカシミア大橋を突破して北上していたら、大変なことになるところだった……。そうすれば、南下して来たハーディンの大軍とまともにぶつかる。さらに三つの砦に駐留しているジョルジュやアストリアなどの軍団が背後から追跡して来る。そうなったら……」

ジェイガンはそのときの惨状を想像して溜め息をついた。すると、
「こうなったら、マルスさま……」
オグマが一歩進み出て提案した。
「オルベルンへ使いを出し、解放軍の援軍を仰ぎましょう」
「いや、それはできぬ」
マルスの横にいたジェイガンが即座に反対を唱えた。
「そんなことをしたら、グルニアは再び戦火にまみれる。これ以上グルニアの人々を戦いに巻きこむことはしたくない。それに、こう言っては失礼だが、解放軍と言っても、所詮(しょせん)は市民の集合体。軍隊とは本質的に違う。ひとりひとりがそれぞれの仕事や家庭を持って生活しておる。なかには老人もおれば女性もおる。年端もいかぬ子供もおる。その上、武器も甲冑(かっちゅう)などの防具類も満足にない」
「たしかにその通りかもしれません。しかし、オルベルンとサドリアだけでも解放軍は七〇〇〇名。その三分の一、いや五分の一でも援軍として来てくれたら、この地方のグルニア人に与える影響は計り知れないものがあります。解放軍に触発され、この地方の人々が立ちあがってくれれば――」
「しかし、ハーディンの目的はグルニアよりもまずわれわれを抹殺することだ」
「では、われわれだけでハーディンと戦うとおっしゃるのですか？　勝算はあるのです

か?」

「そ、それは……」

ジェイガンは口を濁した。

「敵は三二〇〇。われわれはわずか五〇。このカシミアでわれわれが破れるようなことがあれば、アカネイア軍は一気に南部へ雪崩込み、それこそグルニアは再び戦火にまみれるのですよ! そうなったら結果は同じではないのですか!」

オグマの言葉に数人の戦士が頷いた。

「とにかく、このグルニアからなんとか脱出すれば、あのハーディンのことだ、グルニアのことはあとに回してでも、かならずやわれわれのあとを追って来る。われわれの当面の目標は、まず祖国アリティアの奪還。そのことをハーディンはよく知っているはずだ。だからこそ、それを阻止するために、われわれを抹殺しようと考えておるのだ」

「しかし、どのようにしてグルニアから脱出するのです!?」

知らず知らずのうちにオグマの声が大きくなっている。

「アリティアへの道は完全に塞がれているのですよ!」

「わかっておる!」

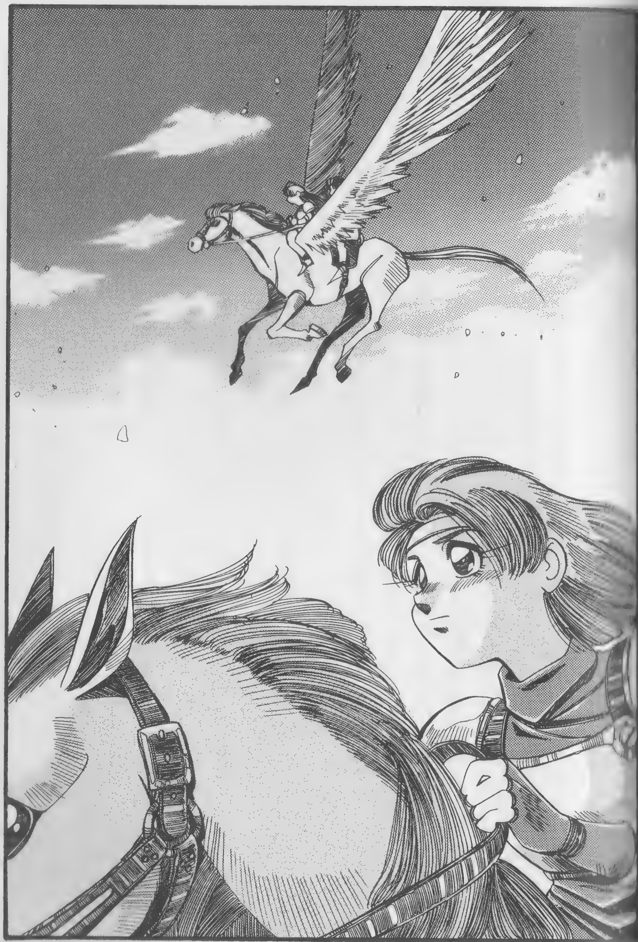
苛立って思わずジェイガンが怒鳴った。

「ならば!」

オグマはジェイガンの目の前に進み出て哀願するように促した。
「ならば、解放軍に援軍を依頼したほうが！」
「マルスさま！」
返答に窮したジェイガンがマルスに答えを求めた。
ジェイガンの目は、マルスに一任すると言っている。たとえ自分の考えに賛同を得られなくてもマルスの考えに従う——と。
「たしかにジェイガンが言う通りだ」
戦士たちを見回しながらマルスが答えた。
「グルニアが再び戦火にまみれるのはなんとしても避けなければならない。ハーディンの遠征の狙いもジェイガンが言う通りだと思う。だが、わたしはオグマの意見に賛成だ。われわれがこのカシミアから一歩も動けない以上、このカシミアで戦うしかない。グルニアが再び戦火にまみれるのを防ぐためにも、アカネイア軍の進攻をこのカシミアでなんとしても阻止しなければならない。そのためには、ひとりでも多くの仲間が欲しい」
「わかりました」
ジェイガンが素直に頷き、マルスは言葉を続けた。
「ただ、だからといって、なんでもいいからとにかく援軍を——というのでは、解放軍だって援軍を編成するのに困るはずだ。まずわれわれの戦いの方針なり作戦なりがはっきりしな

けれぱ」
そのとき、警備兵が西の空を指差して二頭のペガサスの飛来を告げた。
森の上空を二頭の白いペガサスが優雅に翼を広げながら野営地へ向かって来た。
パオラのペガサスにはカイン、カチュアのペガサスにはバヌトゥが同乗していた。
バヌトゥと再会したマルスたちはバヌトゥを連れて遠征隊の野営地へ帰って来たが、そのあとバヌトゥに案内されてパオラとカチュアの姉妹がディナの砦の近くの洞窟に潜んでいるカインを迎えに行ったのだ。
バヌトゥの話によると、流浪の旅を続けていたバヌトゥが、アカネイア軍に追跡されていたカインと再会したのは、王都アリティアのはるか南東にあるアリティア半島のカペという小さな漁村だったという。
そのとき、カインは瀕死の重傷を負っていて、漁師の家に匿われていた。
アリティア城がアカネイア軍の襲撃を受けて陥落してから一三日目のことだった。
だが、アカネイア軍の追跡隊が村のすぐ近くまで来ていたので、バヌトゥはカインを小舟に乗せ、アリティアとドルーア本島との間に横たわるドルーア海へ漕ぎ出した。
沖合いに出たところで、二人はカペの村を見て愕然となった。
夜空を真っ赤に焦がして燃えていたからだ。
カインを匿ったことを知った追跡隊が腹いせに村を焼き払ったのだ。

その後、小舟は春の嵐に襲われて数日間漂流したが、流れついた島が海賊や盗賊団の略奪品や盗品や闇物資が取引されるところだった。
だが、幸運なことに、バヌトゥの旧知の海賊団が寄港していた。
この島で、二人は五〇日ほどのんびりと過ごした。
そして、カインの傷が回復すると、紹介された別の海賊船でグルニア本島の西北端のトラムという村へ渡り、アリティア遠征隊の情報を得るために、カシミア海峡の海岸線に沿って東へ向かった。
ところが、ラーマン川の河口の近くまで来ると、ディナの砦にアカネイア軍が駐留していて、そのなかにアリティア半島までカインを追って来た追跡隊も合流していた。
そこで二人は砦の西にある森のなかの洞窟に身を潜めていたのだが、食料が底をついたのでバヌトゥがカシミアの町へ買いだしに来たのだ。
そして、偶然マルスたちの姿を見かけたのだ——。
二頭のペガサスが兵士たちを分けるように着地すると、
「カイン！」
マルスや戦士たちが口々にカインの名を叫びながら駆け寄った。
そのなかにシーダの姿があるのをカインはすばやく見てとった。
シーダがアリティアから逃げてマケドニアのホルム海岸へ駆けつけたことをカインは野営



地へ来る途中にパオラから聞かされていたが、元気なシーダの顔を見てカインはいくらか救われたような気持ちになった。だが、

「カイン！　よかった！　よくぞ無事で！」

マルスに固く手を握りしめられると、

「マルスさま……！」

とたんに熱い涙が溢れ、

「申し訳ありませぬ！」

いきなりマルスの足元に土下座した。

「申し訳ありませぬ……！」

全身を震わせながらカインは激しく嗚咽した。

アリティア城が落城したあの夜――。

緊急を告げる笛の音で飛び起きたカインは、雨に煙る東の海上に三隻の軍船を確認すると、ただちに東側の城壁を固めるように騎士団や歩兵部隊に指示した。

だが、東の城壁に警備が集中した隙に、西の海上に現れた一〇隻あまりの軍船が城の西側に接岸し、軍船から飛び出した五五〇名の敵兵が次々に城内へ突入して来た。

敵兵の数はアリティア軍の五倍もあった。

その一個師団が宮殿を死守しようとする騎士団の壁を突破して宮殿へ雪崩込み、王女エリスとシーダを護衛していたカインと激しい戦いになった。

だが、カインがいくら切り倒しても、敵兵は減るどころか増える一方だった。

気がつくと、そばにいたはずのエリスとシーダの姿が消えていた。

敵兵を倒しながらエリスとシーダの姿を捜したが、二人の姿はどこにもなかった。

宮殿の外へ出ると、騎士団や歩兵部隊の無残な死体が転がっていて、城内のあちこちから敵兵の勇ましい勝鬨が聞こえてきた。

数え切れないほどの敵兵を倒したが、カインもまた全身に無数の傷を受けていて、剣を握るのさえやっとだった。

傷口から流れる自分の血と敵兵の返り血を浴びて全身が真っ赤だった。

カインは血まみれの体を引き摺りながら城壁の外へ出て、中海へ飛びこんだ。

半時後、やっと対岸に泳ぎ着いたときには、雨に煙る天守塔の尖塔からアリティア国旗が下ろされ、代わって太陽と光をあしらったアカネイア国旗が翻っていた。

そのあと、アカネイア軍の追跡隊に追われ、アカネイア半島へと逃れて行った――。

「命に代えても……城と国を守らねばならぬのに……！　エリスさまをお守りしなければならぬのに……！　あれほど……固くマルスさまに命ぜられたのに……！」

嗚咽しながらカインは何度も地面に額をすりつけた。
「生きて……マルスさまに顔を合わせられる……立場ではないのですが……！　せ、せめて……せめて一度だけでも……マルスさまにお会いしてから……！　そう思いながら……恥を忍んで……必死に逃れてきました……！　マルスさまの信頼に応えることができなかったこの身を……お、お許しください……！　どうか……お許しを……！」
カインは激しく自分を責めると、すばやく剣を抜き、
「あっ！」
居合わせた者たちが思わず叫んだ。
カインが自分の喉元を目がけて剣先を突いたのだ。
だが、剣先がカインの喉元に突き刺さるよりほんの一瞬早くアランの軍靴が剣を持つカインの右手を蹴りあげていた。
剣先がわずかにカインの喉元を外れると、
「自害してどうなる！」
すかさずドーガが剣を持つカインの右手を押さえ、
「は、離してくれっ！」
「それで死んだ他の騎士や兵士たちが喜ぶとでも思うのか！」
暴れようとするカインをさらにゴードンが押さえつけた。

「頼む！　騎士の情けだ！　死なせてくれっ！　命に代えても済むものではないが、死んでお詫びをせねば、おれの気が済まぬ！」

と、バシッ——いきなりカインの頬にアランの強烈な平手打ちが飛んだ。

「見損なったぜ、カイン……！」

アランはカインを見下ろして言った。

「今死んでどうする！　祖国アリティアを奪還し、ハーディンを倒さなければ、死んだ仲間たちだって浮かばれないのだぞ！　それが生き残ったおまえの使命だろうが！」

「し、しかし！」

「おれはな、カイン……」

そう言って、アランは一瞬言い淀んだ。だが、

「命を粗末にするやつなんて大嫌いだぜ。与えられた命を、精一杯生きるのが、人間というものだろうが……」

低いがはっきりとした声で言った。

と、マルスがカインの前にしゃがみこんで、

「カイン……。みんなの言う通りだ。おまえだけでも生き残ってくれたことがぼくには嬉しい。だれもおまえを責めてなんかいない。おまえがいたらなかったからではない。すべてはハーディンが悪いのだ。だから、自分をそんなに責めないでくれ」

そう言いながらカインの手からやさしく剣を取りあげた。
「マ、マルスさま……！」
涙で汚れた顔でカインはマルスを見つめると、
「お、おれは……！　おれは……！」
うなだれて激しく号泣した。
思いっきり泣くがいい。泣いて、泣いて、泣き疲れるまで泣くがいい——戦士たちはそう思いながら黙ってカインを見守っていた。すると、
「うっ……！」
アランが両手で口を押さえた。
その顔が異様なほど青ざめていた。と、
「うっうっうっ……！」
咳き込みながらアランは逃げるように奥へ走り去った。
アランを追ったマルスが、野営地から七、八〇歩ほど離れた小川のそばで激しく咳き込んでいるアランの後ろ姿を見て、大きな衝撃を受けた。
一年ほど前から、アランはときどき苦しそうに咳き込んでマルスたちを心配させることがあったが、咳が収まると何事もなかったように平然としていた。
だが、今日は違った。アランは吐血していた。

口を押さえた指の間から何度も鮮血がほとばしった。

「大丈夫か、アラン⁉　しっかりしろ！」

慌ててマルスが布を差し出し、必死にアランの背中をさすった。

いつの間にか戦士たちも来ていて、心配そうに見ていた。

やがてアランの咳が収まり、吐血が止まると、

「いつからだ……？」

マルスがアランに聞いた。

「なに、気にするほどではございません……」

「いつからだ⁉」

「ですから……」

「アラン！」

マルスが思わずアランの肩を掴(つか)むと、

「うっ！」

アランはまた咳き込んだ。

そして、咳き込みながら野営地へ戻って行った。

「労咳(ろうがい)か……」

アランを見送りながらジェイガンが沈痛な面持(おもも)ちで呟(つぶや)いた。

労咳とは現代でいう肺結核のことだが、このころのアカネイア大陸では、不治の伝染病として人々から恐れられていた。

酒の席でアランはいつも黙々と度の強い地酒を飲む。

その酒量は人並み外れていたが、どんなに飲んでも一度も乱れたことはなかった。

こんなもの、好きで飲んでいるのではない——あるとき、アランは自嘲しながら戦士たちにそう言ったことがある。また、酒を飲んで酔えるやつは幸せだ——とも言ったが、アランの吐血を見て、ジェイガンや戦士たちはやっとそのことの意味に気づいたのだった。

不治の病に侵されたアランはやがて訪れる死の恐怖と必死に闘っていたのだ。

その苦しさから逃れるために酒を飲んでいたのだ。

酒が病に一番悪いと知りながら、飲まずにはいられなかったのだ。

そして、命を粗末にするやつなんて大嫌いだ。与えられた命を精一杯生きるのが人間というものだ——と言って、さっきいみじくもアランがカインを責めたが、それは自分自身へ向けた言葉でもあったのだということも——。

一時後、遠征隊の作戦の概要が決定した。

最終的に戦士たちは戦いの場にこのラーマンの黒い森を選んだ。

三二〇〇名の大軍とまともに戦えば勝ち目はないが、相手の戦力を分散させ、奇襲戦に持

ちこめば勝算が出てくると踏んだのだ。

そのためにはこの広大な森林地帯は恰好の地だった。

ハーディンが大軍を率いて進攻して来ても、複雑で迷路のようなこの黒い森では、行動も作戦も制約され、戦力を分散せざるを得なくなるからだ。

さっそくパオラが援軍要請のためにオルベルンへ向けて愛馬で飛び立った――。

4

翌日、騎士たちは兵士たちが暗い虚ろな目をしているのに気づいた。

ハーディンが率いる二〇〇〇名の大軍がグルニア街道を南下し、祖国アリティアへの道が完全に封じられたことが、一夜明けても兵士たちに大きな影を落としていたのだ。

解放軍の援軍が来るといっても、到着するのは早くても一三、四日後だ。

それも、どれだけの数が来るのか皆目見当もつかない。

しかも、ハーディンの大軍が刻一刻とカシミアへ迫っている。

兵士たちは不安と焦りから寝つかれぬまま翌日を迎えたが、その不安と焦りが昼になって諦めにも似たいいようのない虚脱感に変わっていた。

騎士たちは明るく振る舞って兵士たちを励ましたが効果はなかった。

最後には、思い余ったドーガとゴードンが、
「そんなことでどうする！」
「しっかりしろっ！」
怒鳴り散らして檄を飛ばしたが、その声もむなしく響いた。
兵士たちはかえってうつむくばかりだった。
そんなときだった、地面に張り出した大樹の根に腰かけたフィーナがおもむろに銀の横笛を吹き始めたのは。
なんともいえない哀愁のある音色と旋律だった。その音色と旋律に引かれて兵士たちがフィーナの周りに集まって来ると、フィーナは笛をやめて美しい声で歌い出した。
ワーレン地方の民謡で、戦で倒れた若い兵士が遠く離れた故郷の恋人に最後の別れを告げながら死んでいく悲しい歌だった。笛の音は前奏だった。
フィーナはこの歌を情感たっぷりに歌いあげ、兵士たちの望郷の涙を誘った。
あとわずかのところで祖国への道が閉ざされただけに、望郷の思いが余計募るのだ。
兵士たちは、美しいアリティアの風景や懐かしい家族や恋人を思い浮かべながら、目頭を熱くして聞いていた。
「こんなときに変な歌なんか歌って……」
ドーガは舌打ちをしたが、その目は涙に濡れていた。

他の騎士たちもまた兵士たちと同じ思いで聞いていた。

悲しい歌が終わると、フィーナはがらりと雰囲気を変え、魅惑的な明るい笑顔を振り撒きながら手拍子で軽快に踊り始めた。

左右の足で交互に何度か飛び跳ね、最後に腰を振る。その繰り返しの単純な踊りだ。

祭りのときに輪になって踊るワーレン地方に古くから伝わる民族舞踊だった。

踊りながらフィーナは兵士たちに手拍子を強要した。

最初は兵士たちは戸惑っていたが、まばらだった手拍子がやがて大きくなった。

すると、フィーナは兵士たちの手を引いて次々に踊りに参加させた。

商売柄とはいえ、気分を高揚させ、場を盛りあげてゆくフィーナの手腕は見事だった。

フィーナの笑顔に誘われて輪に入ると、不思議なことにまるで魔力によって活力を与えられたかのように、兵士たちは底抜けに明るくなる。

見様見真似ながらも、嬉々としてかけ声をかけ、手拍子も賑やかに、軽やかに飛び跳ね、歓声を発しながら激しく何度も腰を振る。

かけ声や歓声や手拍子が森のなかにこだまし、踊りの輪はどんどん広がっていった。

ジェイガンは、兵士たちの変貌振りに驚きながらも、手拍子を合わせながら、アランやウェンデルと一緒に見物していた。

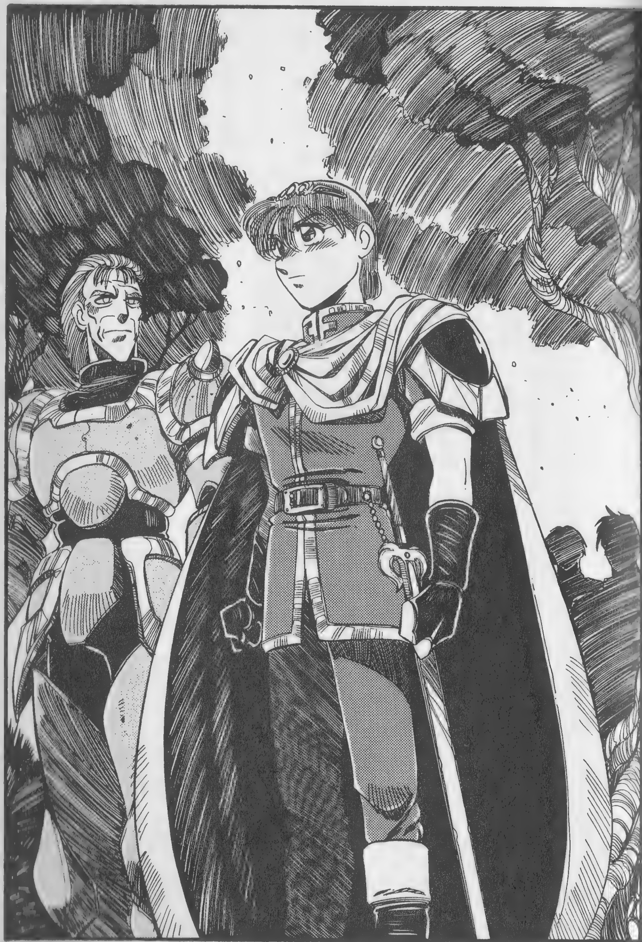
兵士たちがこれほどまでに生気に満ちた楽しそうな笑顔を見せたのは、アリティアを出発

してから、初めてのことだった。
輪のなかにはドーガやゴードンをはじめ、騎士たちの顔もあった。
そして、マルスとシーダの顔も、カチュアの顔も、リンダの顔も、マリーシアの顔も。
フィーナのかけ声が一際大きく森のなかに響き渡ると、それを合図に踊りの輪は一気に最高潮に達した――。

遠征隊に思わぬ朗報がもたらされたのはこの日の夕暮れのことだった。
乾パンと干し肉がわずかばかり入った塩分のきついスープで夕食をとったあとだった。
四五、六歳の小柄な中年の男が遠征隊を捜してやって来た。
見張りの警備兵に連れて来られたこの男を見て、
「ゾロ!? ゾロのおじさんじゃないか!?」
騎士たちと一緒にいたカシムが思わず叫んだ。
男はトルタ港の近くの漁村に住む海賊スペリオ・レイソルの配下の者で、レイソルの船団がその漁村に寄港したとき、元レイソルの部下だったカシムが何度か世話になったことがあったのだ。
「森のなかを馬で捜すこと、二時半(ふたとき)。見つけるのにずいぶんと苦労しました」
ゾロは親しげに日焼けした顔をほころばせると、

「頭領の命令で飛んで参りました」
と、マルスに告げた。
「今、頭領の船団がトルタの港の近くの村へ来ています」
「なに、レイソルが⁉」
驚いてマルスはジェイガンと顔を見合わせた。
「はい。一五日ほど前に着きましたが、取引が一段落したので、今日の昼前にわたしと数人の供を連れてカシミアの町へ息抜きに来たのです。ところが、賭博場の女将（おかみ）と会ったときに、偶然マルスさまたちのことが話題に出まして」
レイソルはマルスや遠征隊のことを軽々しく他人に言う男ではないし、マライヤもまたそのような人物には思えなかったので、マルスが尋ねた。
「レイソルはマライヤと親しい仲なのか⁉」
「はい、そりゃあ」
意味ありげにゾロはにんまりと頷いた。
それは単に親しいだけの関係でない、男と女の仲であることを示唆していた。
「マライヤは頭領の本拠地であるホルム海岸の出身でして、頭領がこの地方へ来ると、とはいっても、年に二、三度しかありませんが、必ずマライヤのところに四、五日滞在するのです。頭領はこのあとカダイン国へ行く予定になっているのですが、マライヤから遠征隊とア

カネイア軍の状況を聞き、それならぜひ船団でグルニアを脱出するようマルスさまにお伝えしろと言って、出港の準備を急がせるために船団へ使いを走らせ、わたしをここへよこしたのです。カシミア大橋を突破し、トルタ街道を通ってわたしの村へ行けば、すぐカダインへ向けて出港できる手筈になっています」
願ってもない申し出だった。
「しかし、トルタ街道にはトルタ砦が……」
「ご心配ありません。今朝、砦に駐留していたアカネイア軍はハーディンを迎えるために国境へ向かいました。砦にはわずかの留守部隊しか残っておりません。グルニアを脱出する機会は、今夜をおいて他にありません」
「マルスさま、カダインへ行きましょう！」
真っ先にそう言ったのは聖都カダインの最高司祭であるウェンデルだった。
「カダインへ行けば、ハーディンといえども簡単には手出しはできません。それに、カダインには魔道士の軍団もおります。カダインへ行って態勢を整えましょう」
「マルスさま！」
続いてジェイガンが促した。
「われわれがカダインへ向かえば、ハーディンはわれわれの祖国奪還を阻止するために、カシミアを引きあげてアリティアを固めるに違いありませぬ！　そうなれば、グルニアの心配



は——！」

確信に満ちた目でジェイガンは強く首を横に振った。

騎士たちもまたマルスを見つめ、マルスの決断を待っていた。

もちろん、マルスの気持ちは決まっていた。

「アラン！」

その一声がマルスの答えだった。

アランはただちに兵士たちに出発の準備をするよう大声で命じた。

そして、カチュアはそのことを解放軍に知らせるために、パオラのあとを追って愛馬でオルベルンへと飛び立って行った。

カダインでの再会を約束して——。

5

真夜中——。

ラーマンの黒い森を抜けてグルニア街道を北上した遠征隊は、黒い森を出発してから一時後、カシミア大橋を渡り始めた。

ゾロの情報によると、大橋の中央にあるカシミアの町の街門ではおよそ三〇名の、橋を渡

ったところにある検問所ではおよそ一五名のアカネイア軍が警備に当たっているというが、

「なあに、心配はいりませんよ。頭領たちがちゃんと始末する手筈になっておりますから」

――と言ったゾロの言葉に嘘はなかった。

遠征隊が街門に近づくと、門扉が開き、内部から五頭の騎馬が出た。

そのなかの一際目立つ巨漢が遠征隊に大きく手を振った。

海賊の頭領スペリオ・レイソルだった。

「レイソル！」

「お待ちしておりました！」

マルスが差し出した右手をレイソルが力強く握ると、

「ちょっと薬が利きすぎたようですな」

街門のなかのあちこちで高鼾をかいてだらしなく眠りこけているアカネイア兵士を見ながら豪快に笑った。

アカネイア軍の警備兵は、深夜の警備兵に限り特別に一度だけ旧カシミア城に駐留している軍本部から食料班が持って来る軽い夜食をとることになっているが、レイソルの部下が街門と検問所へ向かう途中の食料班を襲い、夜食に強力な眠り薬を混ぜると、食料班を装って街門と検問所へ届けた。

それから四分の一時後、兵士たちはひとり残らず鼾をかいて眠り始めたのだ。

アカネイア軍に気づかれずにカシミア大橋を突破することは、遠征隊にとって願ってもないことだが、遠征隊がカシミア大橋を通過して北上したことをアカネイア軍にはっきりと示しておく必要があった。

アランは歩兵部隊の兵士に槍の先についているアリティア国旗を一旒街門のなかに目立つように投げ捨てておくよう命じ、部隊に出発を指示した。

検問所でもアカネイア軍の警備兵が同様に眠りこけてい、遠征隊が蹄音と軍靴を響かせながら通過すると、そのあとにアリティア国旗が一旒投げ捨てられていた。

アカネイア軍の街門と検問所の警備は、夜明けから正午までと、正午から日暮れまでと、日暮れから夜明けまでの、四時ずつの三交代制で行われているが、夜明けから任務につく警備兵が旧カシミア城からやって来て、眠りこけている警備兵の姿と投げ捨てられていたアリティア国旗に気づくにはまだ二時近くも待たなければならなかった――。

カシミア大橋を渡って四分の一時ほどグルニア街道を北上すると、やがて遠征隊は小さな宿場町を左へ折れ、港町トルタへと続くトルタ街道を北東へ進んだ。

そして、カシミア大橋を渡ってから一時半後、曲がりくねった険しい山道が切れて急に視界が開けると、前方の丘の上に月明かりに照らし出されたトルタ砦が姿を現し、遠征隊に再び緊張感が走った。

砦の西門の上の巡視路にいた兵士が、遠征隊の姿に気づいて慌てて姿を消した。
遠征隊は砦の二〇〇歩ほど手前で行軍をやめ、戦闘態勢をとった。
先頭に槍部隊が構え、そのあとに弓部隊が控えた。
相手の戦力にかかわらず、このような緊急の場合、強行突破するしかない。
まず槍部隊が突進し、弓部隊が援護射撃をする。その間に槍部隊が城壁をのぼって砦に侵入し、門が開いたら、騎士たちの騎馬部隊が一気に砦に突入する。
だが、アランが高々と剣をかざし、勇ましく突撃の号令をかけようとしたときだった。西門の上の巡視路に兵士を従えた騎士が現れ、その者たちに反撃する気配が感じられなかったので、アランは一瞬躊躇(ちゅうちょ)し、号令をかけるのをやめた。
「ジョルジュ・ライオだ！」
巡視路の騎士が遠征隊へ向かって叫んだ。
「マルスさまと二人で話がしたい！」
「わかった！　そちらへ行こう！」
即座にマルスが答え、愛馬の腹を鐙(あぶみ)で蹴って駆け出そうとしたので、
「マルスさま！　ひとりで行くつもりですか⁉」
心配したアランが慌てて呼び止めると、
「おれも行きます！」

すかさずゴードンがマルスの前に飛び出した。
ゴードンとジョルジュは弓術の好敵手であることを、先の戦争を戦った歴戦の戦士ならだれでも知っていた。
ジョルジュは弓術の腕にかけてはアカネイア国でジョルジュの右に出る者がいないと言われている強者（つわもの）だった。
また、ゴードンもアリティアを代表する弓の使い手である。
だが、二人が初めて出会ったとき、速度、距離、威力、正確さ——すべてにおいてジョルジュが一枚上だった。
腕に自信があったゴードンにとってそれは屈辱以外のなにものでもなかったが、その日を境にゴードンは人が変わったように弓術の習練に励み始めた。
やがて実戦を重ねるうちにゴードンはめきめきと腕をあげ、ドルーア帝国に進攻して行ったころにはジョルジュに匹敵するほどまでに成長していた。
最初はゴードンを無視していたジョルジュも、ゴードンの急成長に自尊心を刺激され、さらに弓術の錬磨に精進するようになった。
互いに激しく火花を散らしているのが他人からもはっきりとわかったが、この競い合いのなかで二人は、武術に生きる者として、騎士として、また男として、互いに心に通ずるものを感じていた。

そして、戦争が終わるころには、好敵手として互いに尊敬し合うようになっていた。マルスとゴードンが城門へ向かおうとすると、

「わたしも連れて行ってください！」

ジョルジュと懇意の仲であるリンダが後続の輸送部隊から追って来た。

三人が西門の前へ行くと、おもむろに鉄の門扉が開いた。

門を潜りぬけた中庭で、一〇名の兵士を従えたジョルジュがマルスを出迎えたが、リンダが同行しているのに驚き、丁重にマルスに挨拶をすると、

「それにしても、なぜリンダ殿がここに……」

あ然としてリンダを見た。

「わたしはニーナさまのご命令でマルスさまへ紋章の楯をお渡しに参りました」

ジョルジュは驚いてマルスが左手に持っている、アカネイア国旗と同じ意匠の高貴な美しい楯を見た。

「紋章の楯を!?」

「しかし、その紋章の楯はアカネイア王家の家宝。しかも、邪悪なる手から世界を救う者のみに与えるものだと言い伝えられているその楯をなぜ……!?」

「わたしにはわかりません。ジョルジュ殿もご存じのように、ハーディンさまが皇帝になられてから、わたしたちもニーナさまのおそばから離されてしまい、お目にかかることがなく

なったのですが、二の月の一五の日の真夜中のことでした。ニーナさまがこっそりわたしの部屋にお見えになられ、なにもおっしゃらずに、ただこの紋章の楯をマルスさまへ……とだけ……。でも、とても悲しそうな目で泣いておられました」

「泣いて……!?　ニーナさまが泣いておられたというのか!?」

「ええ……」

「ジョルジュ……」

マルスが尋ねた。

「教えてくれ。なぜハーディンがわがアリティア国を襲撃したのだ？　なぜわれわれを壊滅することにこれほどまでに執念を燃やすのだ？」

「わかりません。ただ、ハーディンさまは皇帝になられてからすっかり人が変わられてしまった……。いや、結婚なさってから、と言った方がいいかもしれません。ハーディンさまが皇帝に即位されてからは、ニーナさまを差し置き、なにがなんでも自分の思い通りにことを運ばれようとなさる。アカネイア国内における大幅な制度改革と人事異動。グルニアへの侵略、そしてこのたびのアリティアの襲撃……ハーディンさまはアカネイア国とアカネイア大陸をどのようになさろうとしているのか、その真意が一体どこにあるのか……悪魔に魂を売ってしまったとしか思えません。こんなことになるなら、ニーナさまはハーディンさまと結婚すべきではなかった……。わたしは栄誉あるアカネイア騎士団のひとりとしてアカネイア

国のために命を捧げてきましたが、それというのもニーナさまに忠誠を誓ったからです……」

「ならばジョルジュ殿！」

ゴードンが言った。

「ともにわれわれと戦ってくれませんか！　これ以上ハーディンに好き勝手なことをさせたら世界は滅びてしまう！」

「ジョルジュ殿！」

リンダも促した。

「アリティアの遠征隊と一緒にカダインへ行きましょう！」

「いや……わたしの方こそお願いしたい」

ジョルジュはマルスに熱い視線を向けた。

「マルスさま、一緒にわたしを連れて行ってください」

さっきまでうろたえながらジョルジュやマルスたちの話を聞いていたジョルジュの部下たちはさすがに言葉を失い、愕然としてジョルジュを見ていた。

「本来なら今日も隊長として真っ先に国境へ迎えにあがらなければならないのですが、どうしてもその気になれなくて、口実を作って砦に残っていました。もちろん、マルスさまたちがこの砦へ来るとは想像だにしておりませんでしたが、ここでこうして再会するのもなにか

の宿命なのかもしれません。それに、ニーナさまがマルスさまに紋章の楯を授けられたということは、この世に邪悪な手が伸びているということを知っておられるからこそ。そして、邪悪な手から世界を守るのは他のだれでもないこのマルスさまだということも。ですから、マルスさまと行動をともにすることが、ニーナさまに忠誠を尽くすこと、ニーナさまの命令に従うことだと、さっきその紋章の楯を見たとき、わたしはそう決心したのです」

ジョルジュはマルスにそう告げると、

「みんな！」

兵士たちを見た。砦に残っているのはこの一〇名の兵士だけである。

「ただちに本隊へ駆けつけて、ハーディンさまにお伝えするがいい！　このジョルジュ・ライオがアリティアの遠征隊に寝返ったとな！」

「し、しかし隊長……！」

一〇名とも、ジョルジュが信頼している忠実な部下である。

兵士たちは明らかに戸惑っていたが、さっきまでの動揺とは違っていた。

なぜついて来いと命じないのですか——兵士たちの目はそう言っている。

そのことがジョルジュには痛いほどわかった。

「ありがとう。忠誠を誓ってくれるみんなの気持ちは嬉しい。だが、これはわたしの一存で決めたこと。おまえたちまで巻きこむことはできない。わたしと行動をともにすれば、おま

えたちの両親、兄弟、家族にまで迷惑が及ぶ。ハーディンさまは見せしめのための残忍な報復をなさるはずだからな！　さあ、行くがいい！」
「し、しかし……」
「行くのだ！」
兵士たちが顔を見合わせながら躊躇していると、
「行けっ！」
ジョルジュは思わず怒鳴った。
と、兵士たちは直立不動で一斉に剣を抜くと、剣を自分の顔の横に垂直に立てた。アカネイア軍に昔から伝わる最高の敬意を払うときの儀礼である。
ジョルジュがひとりひとりに短い別れの声をかけると、涙を滲(にじ)ませる兵士もいた。
「これがわたしの最後の命令だ！」
ジョルジュが同様に剣を抜いて儀礼を返すと、兵士たちは中庭の馬場に止めてあった馬に飛び乗り、蹄音も慌ただしく西門から飛び出して行った。

半時後、朝を迎えた人口五〇〇〇の港町トルタは騒然としていた。
謎(なぞ)の大型船が三隻、港に錨(いかり)を下ろしていたからだ。
港へ集まった市民たちは不安げな顔で遠巻きにこの船団を見ていた。

海賊スペリオ・レイソルの船団だった。
ゾロが住む海賊団が闇取引をする村はこのトルタの港から徒歩で北東に一時ほど行った小さな入り江にあるが、その村で船団がアリティアの遠征隊を乗せるとなると、いずれアカネイア軍に知れて村に被害が及ぶのは目に見えている。
そのことを恐れた船団が、真夜中のうちにトルタの港に移動して、アリティアの遠征隊が到着するのを待っていたのだ。

そのころ、遠征隊はトルタの港を目指して山間（やまあい）の道を行軍していた。
そして、マルスたちは八個目の星のかけらを手に入れていた。
砦からの道中、マルスはアリティアを出発してからのことをジョルジュに説明し、星のかけらのことに話が及ぶと、
「それならわたしも持っています」
ジョルジュは鶏卵の半分ほどの大きさの透明な青い美しい宝石を差し出したのだ。
カシミアへ遠征する前にアカネイアの王都パレスの市場で手に入れたのだという。
宝石のなかに、一五個の白く輝く光が点在していた。
それらの光は、秋の南西の空に見ることができる射手（いて）座の形をしていた。
星のサジタリスだった。

やがて、遠征隊が山間の道を抜けて小高い丘の上に出ると、眼下に朝日を浴びた美しいトルタの町並みが広がってい、港に停泊している三隻の大型船の姿をはっきりと見ることができた。

ここから港まで、徒歩でわずか四分の一時の距離しかなかった。

第7章　聖都カダイン

1

広大なカダイン国のそのほとんどが荒涼とした砂漠地帯であるが、それでもカダイン海に面した南部には、海岸線に沿ってなだらかな丘陵地帯が帯状に広がっている。
この丘陵地帯の海辺に、海へ張り出た岩島に建てられた美しい古城があった。
アリティアの遠征隊はこの古城でカダインでの最初の夜を迎えた。
海賊スペリオ・レイソルの船団でトルタを出港した遠征隊が、一八日間のカダイン海の航海を終え、海賊団や盗賊たちが闇物資を取引する港のひとつである岬の小さな漁村へ入港したのは、この日の昼過ぎのことであった。
そして、海岸線を東へ向かって二時(ふたとき)ほど行軍し、夕方この古城へ到着したのだ。
マルスや先の戦争を戦いぬいた戦士たちにとって、二年半ぶりの古城だった。

先の戦争で、暗黒竜王メディウスと手を結んだ大司祭ガーネフを追ってカダインへ進攻したマルスたちの連合軍が、カダインを支配していたドルーア帝国軍を破ってガーネフの居城に攻めこんだが、そのときすでにガーネフは何処へともなく姿を消していた。そのガーネフの居城がこの古城だった。

古城は七〇〇年ほど前にこの地方を治めていたカダイン族の王の居城として建てられたものだが、この地方に恐ろしい悪性の疫病が流行してカダイン王族が滅んでしまってからは、廃城として長いこと放置されたままになっていた。それをガーネフが往時のままに復元し、居城としていたのだ。

カダインに上陸してから、騎士や兵士たちの表情は明るかった。

本来なら、いかにアカネイア軍といえども、大陸の人々の厚い信仰を集め、大陸の宗教界に絶対的な力を持っている聖都カダインへは簡単には手出しはできないのだが、カダインの大司祭であるウェンデルが、自害したグルニアのロレンス将軍と手を組んでグルニア王家の遺児二人を匿ったことがアカネイア軍へ知られているから、それを口実にアカネイア軍が遠征隊の先回りをしてカダインへ進攻していても不思議ではなかった。

だが、上陸した漁村に住む海賊スペリオ・レイソルの配下の者の情報によると、アカネイアの追跡隊がカダインへ接近している事実はまだないという。

そのことが騎士や兵士たちを緊張感から解放させ、明るくさせた。

また、カダインでは大司祭であるウェンデルの力は絶対であるから、遠征隊が祖国アリティア奪還のための態勢を整えるためには、聖都カダインは恰好の地であった。
その聖都はもう目と鼻の先だ。
丘陵地帯の北部には広大な砂漠が広がっているが、その砂漠と丘陵地帯の境目をカダイン街道が東西に通ってい、古城から街道までは半時もあれば出ることができる。
街道をさらに半時ほど東へ行くと港町ビルがある。
そこから一時ほど北東へ行けば聖都である。
明朝遅めに古城を出発しても、昼前には聖都の大神殿へ着ける。
かつてカダイン王族がこの地方を支配していたころ、砂漠にあるカダイン湖にそら恐ろしい巨大な神竜が棲んでいるという伝説があり、この伝説を信じていたこの地方の人々はだれひとりとして湖へ近づかなかったという。
ところが、カダイン王族滅亡後、この湖のほとりにひとりの賢者が魔道の教えを説く大学院を創設すると、魔道を志す者たちが大陸中からぞくぞくと集まって来たという。
それが聖都カダインの始まりで、大学院を創設した賢者が大賢者ガトーだという。
そして、厳しい修行を積んだ魔道士たちが大陸中の町や村へ散って布教活動を始めるようになると、聖都カダインはラーマン神殿とともにアカネイア大陸の二大聖地としてアカネイア大陸の人々の厚い信仰を集めるようになったという。

その後、カダインは他の国の支配を受けない独立した国家として、大司祭と数名の高司祭の合議によって国の運営がなされてきた。

だが、先の戦いで、大司祭であったガーネフがドルーア帝国に加担したため、カダインは戦乱に巻きこまれて大きな被害を受け、また主（おも）だった高司祭を失った。

そのために高司祭になったばかりのウェンデルが大司祭となって戦後の再建を推進してきたが、昨年の五の月に大賢者ガトーからウェンデルに大事な使命が下されると、ウェンデルは将来を嘱望（しょくぼう）されている優秀な若者二人にカダインを託して旅に出たのだ。

その優秀な若者のひとりがマルスの幼友達であり、姉エリスの恋人であるマリク・ガイソンであった。

もうひとりの若者はオレルアン王国出身のエルレーン・カルロスだ。

エルレーンはマリクより三歳年上で、先の戦争でカダインの魔道軍の傭兵（ようへい）部隊長としてマルスたちの連合軍と手を組んでドルーア帝国軍と戦った。

夕食後も遠征隊はなごやかな雰囲気に包まれていた。

そして、マルスたちはこの夜、古城で思いがけないものを手に入れた。

マルスたちが篝火（かがりび）が焚（た）かれた中庭で夜風に吹かれながら就寝前の時間を思い思いに過ごしていると、ジュリアンとリカードが嬉々（きき）として城のなかから中庭へ飛び出して来た。

先の戦争で、マルスたちの連合軍がこの古城へ攻めこんだとき、錠開けの名人であるジュ

リアンと弟分のリカードが地下にある宝物殿(ほうもつでん)を調べ、貴重な宝石類や魔道の秘伝書や魔道士の魔術から逃れることができる魔除(まよ)けなどを手に入れたが、そのことを思い出したジュリアンとリカードが、夕食後の暇つぶしに宝物殿に忍びこんでみたのだ。
宝物殿のなかは盗賊たちが侵入したのか、足の踏み場もないほど荒らされていた。
だが、あまりのひどさにジュリアンが悪態(あくたい)をつきながら引っ繰り返っている大きめの空の宝箱を力任せに蹴飛ばしたとき、宝箱がなくなった床の奥の暗闇で、蠟燭(ろうそく)の明かりを受けてきらっと光ったものがあったのだ。
見ると、鶏卵ほどの大きさの透明な青い美しい宝石だった。
なぜこの宝石がこの宝物殿にあるのか想像もつかなかったが、二人は即座に星のかけらのひとつだと判断した。
「おお、これは紛れもなく――！」
受け取った宝石をかざしてウェンデルが思わず顔をほころばせた。
宝石のなかには白く輝く五つの光が点在していて、それらの光は真冬に南の空に見ることができる山羊(やぎ)座の形をしていた。星のカプコーンであった。
カダイン川の河口にカダイン最大の都市である人口九〇〇〇人の港町ビルがある。
かつてビルはこの地方の小さな一漁村にすぎなかったが、聖都カダインがラーマン神殿と

並ぶ聖地として大陸中からやって来た巡礼者や参拝客で賑わうようになると、聖都の外港して発展し、この国の交易と経済の中心地として栄えるようになった。
翌朝、カダイン街道を東へ向かった遠征隊が、河口の橋を渡ってこの町の中心街へ入ったのは、古城を出発してから一時後のことだった。
ビルは聖都とともに発展してきただけに、古い歴史のある町だ。
厳しい軍隊の突然の出現に、活気に溢れていた町は一瞬騒然となったが、それがアリティアの遠征隊だとわかると、人々は好意を持って迎え入れた。
なかにはわざわざ通りまで飛び出して来て拍手を送る者もいた。
先の戦いで、マルスたちの連合軍がドルーア軍からカダインを解放したが、その主役がアリティアの騎士団だったことをだれもが知っているからだ。
また、ビルの人々はアカネイア軍に襲撃されたアリティアが今どんな状況におかれているかも、西方から訪れる隊商や旅人から聞いて知っていた。
拍手には、アカネイア軍に負けるな——という激励の意味も含まれていた。
だが、人々は騎士たちの雄姿に目を奪われ、この国の最高責任者であり国民の絶大な信頼と尊敬を得ている大司祭が同行していることに、気づいた者はほとんどいなかった。
やがてビルの古い町並みが途切れ、真冬のカダイン砂漠特有の砂嵐から町を守る松林の防風林を抜けると、なだらかな起伏のある砂山や岩山が連なる荒涼とした砂漠が広がってい、

その麓へ向かってカダイン街道がのびていた。
この砂漠の向こう側にカダイン湖と聖都がある。
半時ほど砂漠の街道を進むと、両側を険しい岩山に挟まれた古い砦が姿を現した。
砦は、カダイン王族が伝説の巨大な神竜の出現に備えて建てたと言い伝えられている遺跡だったが、先の戦争でカダインを支配したドルーア帝国軍がそれを復元して砦として使用したため、ドルーア帝国軍と進攻して来たマルスたちの連合軍との激しい戦いの舞台となったところだ。
ここまで来れば聖都へ着いたも同然だった。
砦の巡視路からは緑豊かなカダイン湖と美しい聖都の町並みを一望できる。
そのことを知っているマルスたちはほっとして顔を見合わせた。
南門の巡視路で、黒いローブの上に粗末な鎖かたびらを着、シードル付きの鉄の兜を被った弓部隊が警備をしていた。カダイン国の魔道軍の兵士だ。
魔道軍は弓部隊、槍部隊、傭兵部隊、歩兵部隊の四部隊八〇〇名で構成されているが、一四歳で大学院へ入学して四年間魔道を学んだあと、この魔道軍の兵士として四年間の兵役を務め、その義務を終えると魔道士として大陸中へ散って行く。
アリティアの遠征隊だとわかると、兵士たちはすぐさま南門の扉を開けたが、マルスたちのあとに部隊が続き、最後に輸送部隊が門へ入ると、慌ただしく門を閉じた。

中庭では武装した一〇〇名あまりの傭兵部隊と槍部隊の隊列が遠征隊を迎えた。
その前で指揮をしているのは先の戦争で魔道軍の傭兵部隊副長としてマルスたちと一緒にドルーア帝国軍とこの砦で戦った今年二四歳になるヨーデル・ダリだった。
ヨーデルは丁重にマルスたちに挨拶をすると、マルスたちの後方にいたウェンデルが声をかけるために魔道軍の隊列へ向かって来るのに気づき、
「だ、大司祭さま⁉」
驚き慌ててウェンデルの前へ飛んで行って跪いた。
予期せぬウェンデルの姿に魔道軍の兵士たちも驚いてウェンデルを見ている。
「ご一緒なされているとは存じませんでした！　よくぞご無事でお帰りを！」
ヨーデルは跪いたまま、右手を額と両肩の順に触れて三角形を描くと、隊列の兵士たちも慌てて跪き、ヨーデルと同じ仕種をした。
魔道の世界で行われている忠誠を意味する儀礼である。
「国や聖都に変わりはないか？」
ウェンデルに聞かれ、
「実は大司祭さま……」
ヨーデルは顔を曇らせた。
「どうした？　なにがあったのだ？」

「それが……」

ヨーデルはマルスたちを見ながら言い渋った。そして、

「なかで……」

と、南側にある本館の建物を見ながらウェンデルに言い、

「このままでお待ちを」

マルスにそう断って、ウェンデルを案内して本館の建物へ消えた。

だが、それから間もなくのことだった。

「マルスさま!」

突然、上空から声がした。

ヨーデルが中庭に面した北門の上の巡視路に姿を現していた。

「首を長くしてこの時がくるのをお待ちしておりましたよ!」

マルスを見下ろしながら不敵な笑みを浮かべた。

「鼠(ねずみ)どもがこの鼠捕りの籠(かご)のなかへ飛びこんで来るのをね!」

その言葉が合図だった。

東西南北の四方の巡視路の壁に隠れていた武装した弓部隊が忽然(こつぜん)と姿を現したのだ。

その数はおよそ二〇〇。いずれも弓を構え、遠征隊へ狙いを定めている。

同時に中庭にいた魔道軍の隊列も一斉に槍と剣を遠征隊へ向けていた。

マルスたちは愕然となった。
弓部隊が一斉に弓を放ち、それを待って中庭の隊列が突撃するつもりなのだ。
「なんの真似だこれは⁉」
マルスが思わずヨーデルに向かって叫んだ。
「一〇日前、アカネイア帝国のハーディン皇帝の司令を持った早馬が到着したのだ！　アリティアの遠征隊がカダインへ向かったからただちに壊滅しろ――とな！」
「ハーディン⁉」
思いがけない名前にマルスたちは驚いて顔を見合わせた。
「どういうことだそれは⁉」
すかさず元アカネイア軍のジョルジュが聞いた。
「なぜハーディンの司令に従わなければならない⁉」
「われわれはアカネイア軍との友好条約に基づき、当然のことをしているにすぎない！」
「友好条約⁉　そんなものをカダインと結んだ覚えはない！」
「昨年の一〇の月、ネーリング将軍が皇帝の特使として聖都へ見えられたのだ！」
「なに⁉　ネーリングが⁉」
ルキルト・ネーリングは、先の戦争でドルーア帝国軍の手先となってアカネイアの王都パレスに君臨したホルスト・ボーゼン司祭の実弟で、幼少のころオレルアン王国の親戚に養子

てアカネイアへ赴き、今ではハーディンの片腕として王都パレスの全権を任せられている人物だ。

「そして、昨年の暮れ、エルレーンさまがアカネイアを訪れ、わがカダイン魔道軍とアカネイア軍が正式に条約を結んだのだ！」

「マリクは⁉」

今度はマルスが聞いた。

「マリクは賛成したのかそのことに⁉」

「やつなら反省房のなかだ！」

「反省房⁉」

「牢と言った方が正しいかもしれないな！」

大神殿の地下に光がまったく入らない漆黒の闇の独房がいくつかあった。

この独房は、もともと魔道の荒行のために造られた修行房だったが、一〇〇年ほど前から大学院の規則や軍の規律に反した者を反省させるために閉じこめるようになり、それから反省房と呼び方が変わってしまったが、このなかに一〇日も閉じこめられるとたいがいの者は発狂してしまうといわれてい、院生や兵士たちから最も恐れられている場所だ。

「条約に反対したからか⁉」

「いや、反省房に入れられたのはそれよりも前のことだ！　マリクは条約のことはなにも知らぬ！」
「じゃあなぜ牢に入れられたのだ!?」
「エルレーンさまがマリクを憎んでいたからだ！」
「どんな憎まれるようなことをしたのだ!?」
「そこまでは知らぬ！　エルレーンさまの一存で決めたことだ！」
「ウェンデル大司祭をどうした!?」
マルスはウェンデルの身が心配になって聞いた。
「大司祭さまはなかで待機しておられる！」
もちろん、嘘だった。
本館へ案内したウェンデルを腹心の兵士に引き渡し、本館の一室へ閉じこめたのだ。
ハーディンの司令を持った早馬が到着したとき、ヨーデルたち軍幹部はさっそくエルレーンと遠征隊の壊滅作戦を協議し、遠征隊を警戒させずにこの砦へ迎え入れ、一斉攻撃で一気に壊滅することに決めたのだ。ヨーデルはこの作戦を自ら鼠捕り作戦と名づけた。
だが、問題は同行しているウェンデルの扱いだった。
いかに魔道軍の兵士たちがエルレーンとヨーデルに忠誠を誓ったとはいえ、この国の絶対的存在であり、精神的支柱でもある大司祭に反逆の弓を引くなどということはできるはずが

ない。
そこで、ウェンデルと遠征隊を切り離すことにしたのだ。
そして、遠征隊を壊滅したあと、エルレーンとヨーデルは秘密裡にウェンデルを抹殺しようと企てたのだ。
「これだけ聞けば満足かな!?」
ヨーデルは再び不敵な笑みを浮かべた。
弓部隊の兵士たちの矢を構える手にさらに力が籠もった。
中庭の傭兵部隊と槍部隊がじりっと半歩前へ出た。
あとはヨーデルの号令を待つだけだった。
遠征隊はなす術がなかった。
だが、ヨーデルが号令をかけようとしたときだった。
ヨーデルの背後で太陽の光を浴びて目映い閃光を放ったものがあった。
次の瞬間、油のような光沢をした鋭い金属の尖端がヨーデルの喉元の肌にぴたりと当てられていた。
「うっ!?」
槍先だった。その冷たい感触がヨーデルの背筋を凍らせた。
ヨーデルの背後から飛び出した兵士がヨーデルの喉元に槍を突きつけたのだ。

一瞬の出来事だった。太陽の光を浴びて閃光を放ったのは槍先だったのだ。
迅速さ、俊敏さ、正確さ――兵士の一連の動きにまったく無駄がなかった。
とても一兵士の腕とは思えない見事な槍捌きだった。
「軍団を砦の外に出せ」
謎の兵士は鼻と口を保護しているシードルの奥からくぐもった声で命じた。
シードルを下ろしているので顔はわからないが、氷のような冷たい目をした二五、六歳のがっちりとした兵士だ。
「な、何者だ、貴様は⁉」
「黙って言う通りにしろ」
兵士の目には感情の色がなかった。それだけに恐ろしかった。
一呼吸、二呼吸……そのたびにヨーデルの目は狼狽の色を増した。
命令に従わなければ殺す――兵士の目は言っている。
ヨーデルの狼狽はやがて恐怖に変わった。
「引けーっ！」
ヨーデルは仕方なく軍団に命じた。
「砦の外へ退散しろーっ！」
やがて北門の扉が開いて、軍団の兵士たちはぞろぞろと砦の外へ出た。

と、謎の兵士の虚をついてヨーデルが反撃に出た。
槍先からすばやく身をかわしながら剣を抜いたのだ。
だが、一瞬早く、謎の兵士の槍先がヨーデルの喉元を突き抜けていた。
「うわあああっ！」
断末魔の叫びとともに血飛沫が勢いよく飛び散った。
槍が突き抜けたままのヨーデルの体が高々と宙に浮いたかと思うと、巡視路の壁の向こう側に倒れ、北門前の砂混じりの礫土の上に無様に落下した。
その光景を目にして、軍団の兵士たちは完全に動揺していた。
そして、騎士たちに救出されてウェンデルが本館から中庭へ現れると、兵士たちの動揺は頂点に達した。
数人の兵士が聖都へ向かって逃げ出し、それに釣られるように三〇〇名の兵士が我先にとその後を追い始めると、
「マルス殿！」
謎の兵士は中庭のマルスに声をかけた。
「ここから北西にあるサルバという村にミネルバがいる！」
「えっ⁉　ミネルバが⁉」
兵士はじっとマルスを見つめると、

「ミネルバを……頼む……！」
と告げ、巡視路の壁を高々と飛び越えて砦の外へ消えた。
「待ってくれっ！」
マルスは慌てて追った。もしや——と思ったのだ。
階段を駆けのぼって巡視路へ出ると、岩山のなかの窪地(くぼち)を縫って、東の方角へ馬を駆けさせて行く兵士の姿が見えた。
兵士はすでに兜を投げ捨ててい、長い髪をなびかせている。
「ミシェイル！」
思わずマルスが兵士に向かって叫んだ。
兵士は決して振り向こうとはしなかった。
だが、その後ろ姿を見ながら、マルスは謎の兵士がミネルバの兄のミシェイル・ギルシアであることを確信した——。

2

砦から北西の方角へ砂漠のなかを馬を飛ばして二時ほど行った盆地に緑地帯(オアシス)があった。
アランとマチスの二人を連れたマルスが、この緑地帯にある戸数六〇あまりのサルバの村

へ着いたのは、砦で謎の兵士に窮地を救われたその日の夕方のことだった。
村の入り口にある民家の前の木陰で腰を下ろして夕涼みをしていた老婆に自分たちの身分を明かしてミネルバのことを尋ねると、老婆は曲がった重い腰をあげて、
「もともとここはマケドニアからやって来た人たちが作った村なんですよ」
と言いながらミネルバが世話になっている長老の家へ愛想よく案内してくれた。
「あのお方がこの村へお見えになったのは、かれこれ三月(みつき)ほど前になりますかねえ。そのときは、過労と心労から病になられておりましてな、顔色は青く、歩くことさえもままならなかったのですが、今ではすっかり元気になられた」
老婆が言った通り、長老の家で再会したミネルバは血色のいい肌艶(はだつや)をしていた。
元気そうなミネルバの姿を見て、
「よくぞご無事で……！」
ミネルバの忠臣であるマチスは思わず涙を滲(にじ)ませた。
マチスが謎の兵士のことを告げてここへ来た理由を話すと、
「間違いなく兄です」
ミネルバは確信を持って答えたが、
「それよりも、マケドニアはどうなっているのです？」
心配そうにマチスに尋ねた。

「ご安心ください。マルスさまの遠征隊が反乱軍を制圧してくれました」
マチスが、リュッケ将軍率いる反乱軍との戦いのことを、その後のアカネイア駐留軍との一触即発の緊張状態のことを、そして現在、元騎士のアギル・バルセオが中心となってマケドニア再建に取り組んでいることなどを詳しく説明すると、
「リュッケ将軍も愚かなことをしたものです」
ミネルバは溜め息をついた。
「リュッケ将軍はラング将軍にそそのかされてクーデターを起こしたのでしょうが、おそらくクーデターが成功した暁には、アカネイア神聖帝国とハーディン皇帝がリュッケ政権を正式に承認するとでもラング将軍に言われたのでしょう。クーデターの前に何度もラング将軍の密使と会っていたようですから。でも、わたしとリュッケ将軍の確執を知ったラング将軍は、自らの手を汚さずにマケドニアを手にいれようと考えたのです。そうとも知らず、愚かにもリュッケはラングの甘言に簡単に乗ってしまったのです。ハーディン殿がラングを使ってグルニアを支配下に置き、わがマケドニアまで支配しようと企んでいたことも知らずに」
マルスたちは驚きながらミネルバの話を聞いていた。
たしかに、言われてみれば、マケドニアでのラングの言動には後ろで糸を引いていたような節がたくさんあった。
ハーディンのグルニアへの遠征の要請は、マルスや遠征隊がアリティアを留守にしている

隙にアリティアを襲撃するためだったとマルスたちは考えていたが、ミネルバが言う通りにマケドニアの反乱をラング将軍が陰で操っていたことが事実ならば、ハーディンは単にアリティアの襲撃や遠征隊の壊滅のために目の色を変えているのではなく、もっと壮大な構想のもとに動いていることになる。

グルニアだけではなくマケドニアとアリティアをも支配しようとしていたのだ。

また、カダインの魔道軍とも友好条約を結んだことを今日知らされたが、それもいずれカダインを支配するための布石とも考えられた。

「ハーディンは一体なにを企んでいるのですか？　なんの目的であちこちで戦いを起こしているのですか？」

マルスが尋ねた。

「アカネイア大陸の全土を自分の支配下に置こうとしているのですか？」

「わたしにはよくわかりませんが、兄はそう言っておりました」

「そうですか……」

マルスたちは顔を見合わせて溜め息をついた。

たしかに、そのように考えた方が辻褄（つじつま）が合う。

「それにしても」

マルスは話題を変えて尋ねた。

「ミシェイル殿がなぜあなたを牢から……」

先の戦争で、ドルーア帝国軍に加担したミシェイルはマルスたちの連合軍についたミネルバと敵対し、マケドニアの旧王都の郊外で激しい戦いを展開した。

そして、ミシェイルは最終的に一命をとりとめたとはいえ、ミネルバに胸を刺され、血まみれのままマケドニア川の急流に呑まれていったのだ――。

「わたしも、兄に同じ質問をしました。でも、兄は、わたしは死んだ男だ……そう答えただけでした。先の戦争で、兄がドルーア帝国と同盟を結んだのは、マケドニアが世界の覇者たらんことを望んだためだそうです。ドルーア帝国と同盟を結び、アカネイアを滅ぼし、そのあとでグルニアのカミュ殿と手を組んで、ドルーア帝国を潰すつもりだったのだそうです。でも、それが大司祭ガーネフの仕かけた罠だったことに気づかなかった。それであのような結果になったのです。でも……」

ミネルバは切なそうに顔を曇らせた。

「あのとき……わたしが兄の胸を刺したとき……わざと止めを刺さなかった。いや、刺せなかった……」

「よくわかります。いくら敵対しているとはいえ、兄妹の絆どは簡単には断ち切れるものではありません」

慰めながらマルスはそのときのことを思い返していた。

あのとき、ミシェイルはわざとミネルバに刺されたような節がある。
敗戦を意識したとき、同時にミシェイルは自分の死を意識したはずだ。
そして、ミシェイルはだれに殺されるよりも、実の妹に殺されることを望んだのだ。
だから、ミシェイルは抵抗する素振りを見せなかった。
刺された瞬間、ミシェイルは微笑(ほほえ)みさえ浮かべた。
だが、その微笑みは、ミネルバに刺されたことへの満足感を覚えながらも、ミネルバがわざと止めをはずしたことに断ち切れない兄妹の深い絆をみたからではないかと、今ミネルバの話を聞きながらマルスは思った。
「兄は、気がついたら、マケドニア川下流の村で助けられていたのだそうです。牢に現れたとき、正直いって驚きました。自分の目を疑いました。でも、間違いなく兄だったのです。兄はわたしのことを怨(うら)んでいるのではないかと思っていました。でも、兄は、さっき言ったように、わたしは死んだ男だ……そう言っただけでした。兄は生まれ変わりました。いや、もとへ戻ったと言ったほうがいいかもしれません。わたしを牢から連れ出してこの村へ来たのも、おそらく妹のマリアのことが心配だったからでしょう。兄はなにも言いませんでしたが、マリアが魔道士に連れ去られたことを知っていましたから、わたしの療養場所にこのカダインを選んだのではないでしょうか。この村でわたしが療養している間にもマリアの行方(ゆくえ)を捜していたようです。お陰で、わたしもこのように元気になりました。ところが、五日前

のことです。しばらく姿を見せていなかった兄が突然やって来て、アリティアの遠征隊がカダインへ向かっていると告げ、旅の途中で手に入れたというこの宝石を置いていきました」
ミネルバは鶏卵の半分ほどの大きさの青い透明な美しい宝石を差し出した。
「これは!?」
マルスは手に取ってかざして見た。なかに九個の白い光が点在している。
秋に南西の空に見ることができる乙女座の形をしていた。星のバルゴだった。

そのころ、遠征隊がいる砦へ三人の若き訪問者があった。
まだ少年の面影を残しているこの若者たちは、身分の低い魔道士が着用する黒いローブをまとっていた。
神殿に付属している大学院の院生たちだった。
彼らはウェンデルの前に跪き、右手を額と両肩の順に触れて三角形を描くと、
「大学院生八〇〇名の代表としてまいりました」
ショー・マインズと名乗った院生が堂々とした態度で告げた。
「大司祭さまがアリティアの遠征隊にご同行なされてお帰りになられたことで、軍は激しく動揺しています。しかし、われわれ八〇〇名の院生は、エルレーンさまや軍の幹部がどのような方針を出し、どのような状況になろうとも、軍の命令を無視し、大司祭さまの指示に従

うことを、集会で決議いたしました」

同席していた騎士たちが予期せぬ朗報に思わず顔を見合わせた。

若き院生の代表はさらに言葉を続けた。

「われわれ院生は、大司祭さまのお帰りをずっと待ち詫びていました。というのも、昨年の秋、マリクさまがわれわれの前から姿を消されると、大学院の授業内容がすっかり変わってしまったからです。本来の講義が消え、武術と魔術の実技ばかりの毎日になってしまい、院生たちからエルレーンさまに対する不満が高まっていました。しかし、エルレーンさまはわれわれの声を聞いてくれません。エルレーンさまは強力な軍事力こそが国や聖都を支えるのだと説き、われわれ院生を兵士に仕立てあげようとしているのです。挙句の果てに、魔道軍とアカネイア軍が友好条約を結びました。今ではなにもかもすべてがエルレーンさまの思うがまま。どうか、明日にも聖都へお入りください。われわれが命をかけて大司祭さまをお守りします。そして、エルレーンさまや軍の幹部を説得してください」

八分の一時後、このことが騎士たちから遠征隊の兵士たちへ伝えられると、兵士たちから大きな歓声が起こった。

そして、その真夜中のこと――。

先の戦争を戦いぬいた戦士たちとマルスに同行して砦へやって来たミネルバが再会を喜び

合ってから一時後のことだった。

砦の一室で仮眠していたマルスたちが警備兵に起こされて中庭に飛び出してみると、西の空に月明かりを浴びて飛来する二頭の白いペガサスの姿があった。

オルベルンへ行ったパオラとカチュアの姉妹だった。

ペガサスが中庭へ着地すると、姉妹は目敏(めざと)くミネルバの姿を見つけて駆け寄った。

無事を喜び合う三人の瞳からしばらく涙がとまらなかった。

やがて、われに返ると、パオラはマルスたちに告げた。

「カシミアに駐留していたアカネイア軍はカシミアの町に一軍団を残してハーディン殿の遠征隊と一緒に引きあげました。おそらくわたしたちのアリティア奪還の阻止に備えるつもりなのでしょう。カダインの国境にある砦にはすでにアストリア殿が率いる軍団が、われわれの進攻に備えて待機しているそうです」

3

人口六〇〇〇人の聖都カダインは、東西と南の三方を高い街壁に囲まれた南北に長い長方形の街で、北側の一段高いところに白亜の大神殿が聳(そび)え、さらにその北側には緑豊かな森と美しいカダイン湖が広がっていた。

そして、南側の街壁の中央に聖都の街門があった。
この街門の前に整列した八〇〇名の院生が、アリティアの遠征隊を迎えた。
遠征隊の先頭はウェンデルとマルスである。
そのあとに先の戦争を戦いぬいた戦士たちが、さらに後方に部隊が続いた。
ウェンデルとマルスが院生たちの前で馬を止めると、八〇〇名の院生は一斉に跪き、右手を額と両肩の順に触れて三角形を描いた。
一糸乱れぬその様は壮観ですらあった。
儀礼が終わると、昨夜砦を訪ねてきた院生の代表のショーが前へ進み出て、
「大司祭さま。軍の方針が決定しました」
と、誇らしげに笑顔で伝えた。
「われわれ院生の団結が軍の幹部や兵士たちに大きな影響を与えたようです。神殿では昨夜から何度も軍の幹部会が開かれたようですが、明確な方針を出せずに、兵士たちの動揺は大きくなるばかりでした。しかし、半時ほど前に開かれた最終的な幹部会で、アリティア遠征隊への攻撃中止を決定したそうです」
八〇〇名の院生に導かれて遠征隊が街門を潜（くぐ）ると、北へまっすぐのびている大路（おおじ）の両側を聖都の人々がびっしりと埋めてい、正面に白亜の大神殿が見えた。
そして、大神殿前の広場では、八〇〇名の魔道軍が整列して、ウェンデルと遠征隊が到着

するのを待っていた。

半時前、軍の幹部会を終えた会議室で、エルレーンは議長席に座りこんだまましばらく動けないでいた。

エルレーンは昨夜から一睡もしていなかった。

昨日の昼前、砦から遁走（とんそう）した部隊によって忠臣ヨーデルの死の報せがもたらされると、大神殿を守っていた軍に衝撃が走った。

さらに遠征隊にウェンデルが同行していたことが兵士たちを動揺させた。

エルレーンは大神殿の中庭に全軍を集めて動揺している兵士たちに檄（げき）を飛ばすと、ただちに幹部会を招集し、ウェンデルと遠征隊を切り離して、遠征隊を壊滅させる作戦を立てさせたが、夕方になってもこれといった名案は出なかった。

そこへ院生たちが反旗を翻（ひるがえ）したという報せが入った。

院生たちの決議は、兵士たちの動揺をさらに増幅させた。

壊滅作戦よりもまず兵士たちの動揺を鎮めるのが先決問題となった。

幹部会は二時にも及ぶ長い会議で対応を協議したが、エルレーンの意に反し、兵士たちの動揺を鎮めるには遠征隊への攻撃を中止してウェンデルを迎え入れるしかない、という意見が幹部たちの大半を占めた。

だが、それは敗北を意味する。同時にアカネイア軍との条約を破ることになる。
エルレーンは認めるわけにはいかなかった。
その夜、エルレーンは何度も幹部会を招集し、幹部たちを説得した。
しかし、夜明けを迎え、朝の礼拝が行われる前にウェンデルと遠征隊が聖都へ入るという情報が流れると、幹部たちもまた動揺し始めた。
そして、半時前に終わった最終的な幹部会で、幹部たちはエルレーンを無視して遠征隊への攻撃中止を決議すると、
「今までわれわれはあなたの命令に従って、大司祭さまの留守を守ってきた。だが、大司祭さまが戻られた以上、あなたに従う必要はない。どうしてもアカネイア軍との条約を守って遠征隊を壊滅させるというのなら、まず最高責任者であるあなたが直接大司祭さまと会ってそのことを説得するのですな。われわれは大司祭さまの指示に従うだけだ」
と告げ、席を立ってしまった。
エルレーンは広いこの会議室にたったひとり残された。
だが、敗北感とか屈辱感といったものは不思議となかった。虚脱感だけが残った。
あれほど忠誠を誓った幹部たちが、大司祭が聖都へ帰って来るというだけで動揺し、結果的にはエルレーンに責任を押しつけて裏切ったのだ。
それほど大司祭という名は魔道士にとって絶対的なものなのだ。

そのことを今更ながらエルレーンは思い知らされた。
そして、大司祭という名の前に、自分がいかに無力であったかということも。
エルレーンの手に鶏卵の半分ほどの大きさの透明な青い美しい宝石が握られていた。
無意識のうちにエルレーンは掌でその宝石を転がしていた。
昨年末、アカネイアの王都を訪れて友好条約を結んだあと、ネーリング将軍から記念品として授かったものだった。
と、宝石は掌から零れ、音を立てて足元の床へ落ちた。
拾う気にもなれなかった。そんなものはどうでもよかった。
エルレーンは虚ろな目で宙を見つめていた。
全身から疲労が滲み出、二二歳とは思えないほどその顔は老けて見えた。
この八箇月間、エルレーンは野望を持って軍の強化を推し進めてきた。
ウェンデルが留守の間に、強力な軍を作りあげ、その力で国を治めようとしたのだ。
ウェンデルが帰国したら、密かに抹殺するつもりでいた。
そして、ウェンデルに代わり、カダインの最高権力者として君臨するつもりだった。
だが、砦での鼠捕り作戦が失敗したのが、誤算だった。
たったひとつの失敗で、エルレーンの野望はもろくも打ち砕かれてしまったのだ。
ウェンデルに会えば、遠征隊を攻撃しようとした理由を説明しなければならない。

となると、当然アカネイア軍との友好条約の責任を問われる。
カダインを託された者として、その罪は重い。
処刑か追放——間違いなくそのどちらかの処分が下されるはずだ。
逃げようと思えば充分に時間はあった。
だが、そんなことを考える気力もなかった。ただ、
〈終わった……〉
そう思った。
〈すべてが終わった……〉
と。どれだけ時間が経過しただろうか、魂の抜け殻のように茫然と議長席にもたれていたエルレーンは弾かれたように席を立ちあがった。
突然、ある男の顔が脳裏に浮かんだのだ。マリクの顔だった。
会議室から回廊へ出ると、足早にやって来た兵士が告げた。
「まもなく大司祭さまが到着します。至急広場へお越しください」
だが、エルレーンは兵士の言葉を無視して、地下室へと向かった。
今を逃したら、永久にマリクの顔を見ることができないような予感がしたのだ。
すべてが終わった今、自らの手で漆黒の闇へ閉じこめてこの世から葬ろうとした好敵手の顔を見るのが、エルレーンに残された唯一の義務のような気がしたのだ。

エルレーンは地下室にある反省房の錠を外して扉を開けると、
「マリク！」
漆黒の房のなかに叫んだ。
すると、目を閉じたマリクが手探りでなかから出て来た。
目を閉じているのは、地下室は薄暗いとはいえ、漆黒の闇からいきなり光のあるところへ出ると強烈な衝撃を受けて視力を失う恐れがあるからだ。光に慣らしながら徐々に目を開けるつもりなのだ。
瘦せこけた顔は異様なほど青白く、体も別人のように瘦せ細っていた。
だが、八箇月も閉じこめられたとは思えないほど足取りはしっかりしていた。
毎日決まった時間に二度、扉の下の部分にある通気孔から、粗末な食事が差し入れられたが、マリクはそれを目安に日にちと時間を計算し、体が衰弱するのを防ぐために、日に一度体が疲れるまで運動をしていたのだ。
エルレーンは変わり果てた好敵手の顔をじっと見ていた。
「満足か？　こんなぼくの姿を見て？」
先に口を利いたのはマリクだった。
「それともまだ憎みきれないというのか？　なぜだ？　なぜこれほどまでにぼくを憎む？　ともにウェンデル先生のもとで修行した仲だというのに」

「わたしの夢は……」
エルレーンはおもむろに言った。
「幼いころからカダインの大司祭になることだった。だから、このカダインへ来てからは、だれにも負けぬように魔道の勉学に励んだ。大学院へ入学して三年目には先輩たちを差し置いて大学院で一番の成績を収め、やがて先生の愛弟子として、高位の魔道士や軍の幹部にしか許されてない奥の院への出入りを特別に認められた。そして、幹部候補生としての道を歩み、魔道軍に入隊してすぐに傭兵部隊長に抜擢された。おまえはわたしより三年遅れて入学してきたが、おまえもまたわたしに劣らぬ優秀な院生だった。わたしと同じようにおまえも幹部候補生としての道を歩み、数年後にはわたしかおまえのどちらかがいずれ大司祭になるであろうと噂されるようにまでなった。だが、魔道士としての力はわたしの方がおまえよりはるかに上だった。それなのに、先生は後輩であるおまえにエクスカリバーを与えてしまった」
エクスカリバーは昔から大神殿の優秀な幹部候補生に受け継がれてきた魔道書で、この書を手にした者は、魔術のなかでも最も高度な術のひとつとされている強烈な一撃必殺の術「エクスカリバー」を使えるようになる。
そして、この魔道書を与えられる者は、与える者の後継者のみとされていた。
昨年の五の月、ウェンデルは旅へ出る直前にこの魔道書をマリクへ与えたが、ウェンデル

もまた三〇年ほど前、師である故ミロア司祭から与えられたのだ。
「なぜだ、マリク？　おまえがアリティアの貴族だからか？　わたしは悔しかった。先生の後継者はこの自分だと信じていたのだからな」
「そうか……そうだったのか……」
マリクは薄目を開けてエルレーンを見た。
「そうとも知らずに、自分の力が先生に認められたと思って得意になっていたぼくが悪かった。だが、ぼくは先生の後継者になろうと考えたことは一度もない。ぼくはここでの務めを終えたら、国へ帰るつもりだ。アリティアには、生涯かけて守りたい人がいる。だから、先生の後継者はエルレーンしかいない」
「だが、もう遅い」
「遅い？」
マリクは初めて大きく目を開いてエルレーンを見た。
「そうだ。すべては終わってしまったのだ……」
と、マリクの視線がエルレーンの背後へ向けられた。
「せ、先生!?」
思わずマリクが言い、エルレーンは驚いて振り向いた。
いつの間にか階段の下段にウェンデルとマルスが、階段の中段には先の戦争を戦いぬいた

戦士たちが来ていた。

マリクが跪いてウェンデルに忠誠を示す儀礼をし、ひと呼吸遅れてエルレーンがそのあとに続いた。

「エルレーンよ。おまえにはまだわしの心がわからぬようだな」

二人に近づきながらウェンデルは言った。

「たしかにおまえが言うように、おまえはマリクより魔道士としての力は優れておった。しかし、真の魔道士には人を思いやる心がなければならぬ。おまえにはその心がなかったのだ。それゆえに、わたしはおまえにエクスカリバーを与えなかった。だが、時がくれば、おまえをわしの後継者にしようと決めておったのだ。それを逆恨（さかうら）みするとは、なんたること……。それではあのガーネフと少しも変わらぬではないか」

「なんですって!?」

ウェンデルを直視できずに床に視線を落としていたエルレーンが思わず見あげた。

「わたしがあのガーネフと同じだと言われるのですか!?」

ウェンデルは頷くと、

「ガーネフは今は亡きミロア司祭とともに、大賢者ガトーさまの最も優れた弟子であった。だが、ガトーさまはガーネフの心の弱さを見抜き、後継者の証（あかし）であるオーラの魔道書をミロア司祭に与え、このカダインを委（ゆだ）ねたのだ。そこで、嫉妬（しっと）と憎悪に燃えたガーネフはガトー

さまのもとから闇のオーブを盗み出し、この世のあらゆる攻撃を封じると言われている暗黒の魔法マフーを作りあげたのだ。その結果、ガーネフは闇のオーブに心を奪われてしまった。ガーネフとて、もとは正義感の強い立派な若者であったという。だが、嫉妬やつまらぬ憎悪が彼を破壊へと導いたのだ。エルレーンよ、わかるか……。わたしはおまえとマリクを信じて、このカダインを託したのだ。それなのに、おまえはマリクを憎んで反省房へ閉じこめ、自分の野望のために愚かにもアカネイア軍と条約を結んだ」

エルレーンは黙ってうなだれた。

「なぜアカネイア軍がおまえに友好条約を持ちかけてきたのか、その真意を知っておるのか？　ハーディン殿はな、グルニアの支配に続き、マケドニアやアリティアをも武力で支配しようと企んでおるのだ。そして、さらにはこのカダインをもな。条約はそのための布石にすぎないのだ。おまえを利用してこのカダインを奪い取ろうとしているのだ。だが、このカダインはだれの支配をも受けてはならぬ聖域。また、魔道士というものは、世の中の平和を守り、人々に幸せと安らぎを与えるのが使命。このカダインを託された者として、魔道士の長として、おまえの犯した過ち（あやま）は非常に重いと言わねばならぬ」

ウェンデルはうなだれているエルレーンをじっと見た。

その目は言葉とは逆に、限りない優しさと慈悲に満ちていた。

「とはいえ、罰を与え、おまえほどの優秀な男をこのカダインから失うのは惜しい。過ちを

責め、罰を与えるのは簡単だが、罪を犯した者を活かすのもまた魔道の教え。もしおまえが心を改め、さらに真の魔道を究めようと思うのなら、今回のことは特別に許してやってもよい。おまえにはもっと学ばねばならぬことがまだまだたくさんある。そして、心を磨き、おまえのその力を、世のため、人のために使うのだ。よいな」

エルレーンはうなだれたまま顔をあげようとしなかった。

そして、その日の夕方、エルレーンが大神殿から忽然と姿を消してしまった。

エルレーンはもともと責任感の強い男だったが、それだけに自分に対しても厳しく、自分が過ちを犯したときには、激しく自分を責めるようなところがあった。

エルレーン失踪の報告を受けたウェンデルは、エルレーンの身を心配し、すぐさま軍に聖都と湖の周辺の大捜索を命じた。

エルレーンの性格を熟知しているウェンデルは、もしかしたらエルレーンがおのれの非を責め、自害するつもりではないのかと咄嗟に思ったのだ。

軍は大神殿の広大な敷地ばかりではなく、聖都も、森も、湖の周辺も捜索した。

だが、一時経っても、エルレーンの姿を見つけることはできなかった。

それらしき姿を見たという情報も入ってこなかった。

ウェンデルがエルレーンの捜索を諦めて軍に中止を命じたあとだった。
会議室を掃除していた兵士が、鶏卵の半分ほどの大きさの透明な青く美しい宝石を見つけて、ウェンデルの部屋へ報告に来た。
ウェンデルがかざして見ると、宝石のなかに四個の白い光が点在していた。
それらの光は真冬の上空に見ることができる牡羊座の形をしていた。
星のアリエスだった。
なぜこの大神殿にこの宝石が落ちていたのかマルスたちは知る由もなかったが、これで一二個の星のかけらのうち一一個を手に入れたことになる。

時間は遡るが——。
この日の昼過ぎから、ジュリアンとマリーシアが聖都の街へ出て、マケドニアの旧都の郊外の村から謎の魔道士によって連れ去られたレナの行方を捜していた。
だが、夜になってもなにひとつ情報を得ることができなかった。

その夜、大神殿の礼拝堂で夜の礼拝が行われた。
祭壇の前に立ったウェンデルとマリクや他の司祭たちが厳かに礼拝の儀を進め、参列したマルスや先の戦争を戦いぬいた戦士たちやこのたびの遠征で新たに参加した者たちも、その

儀に従って祈りを捧げた。

大司祭が出席して行われる大神殿の礼拝は朝と昼と夜の一日三回行われ、朝と昼の礼拝は一般人も参列を許されているが、夜の礼拝は大神殿の限られた司祭だけで行われるもので、マルスたちは特別に参列したのだ。

なぜハーディンが大陸を武力で制圧しようとしているのだろうか。

単なる野心や欲望からなのだろうか。

それとも、別のところに目的があるからなのだろうか。

ハーディンを知っている者は口を揃えてハーディンは人が変わったという。

では、なぜ変わったのだろう。なにがあったのだろう。

祈りの間、マルスはずっとハーディンのことを考えていた。

礼拝の儀がすべて終了した直後だった。

突然、蠟燭の明かりに照らしだされていた薄暗い祭壇の周囲の空間を、霧のような柔らかな不思議な白い光が覆い、礼拝に参加した者たちもその光に包まれた。

一同があ然としていると、

「マルスよ……」

頭上から低い重い声が響いた。

聞き覚えのある懐かしい声だった。

「そなたに話しておきたいことがある」

「ガトーさま!?」

思わずマルスが叫んだ。

まぎれもなく大賢者ガトーの声だった。

ガトーは魔道の力で話しているのだ。

「ハーディンは闇のオーブの魔力に守られておる……」

「闇のオーブに!?」

「この世界には、不思議な魔力を秘めた五つの聖なる宝玉が存在している。そなたも知っているように、光と、星と、大地と、そして命と、闇のオーブだ。闇のオーブは光のオーブと対をなす聖玉で、精神を極限にまで高める力がある。所持する者に勇気を与え、苦しみから解き放ち、野心や欲望を増幅させる。また、戦いにおいても相手の精神を操作し、動きを封じてしまう力もある。だが、闇のオーブは人間には扱えぬ。魔力が強過ぎて危険なのだ。人間の怒りや嘆き、妬みなどに激しく反応してその感情を増幅し、人格を破壊して悪魔にするのじゃ。ハーディンはどこかでその闇のオーブを手に入れ、そして心を闇に奪われてしまったのじゃ」

「しかし、なぜそのようなものをハーディンが必要としたのでしょうか。彼はとても心の強い人間です」

「王子よ……。人間というものは、そう簡単にきめつけられるものではあるまい。所詮、感情の生き物なのだからな。ハーディンに闇のオーブがある限り、そなたに勝ち目はない。闇のオーブに対抗できるのは、光のオーブだけじゃ」
「光のオーブがあればハーディンを闇のオーブから救えるというのですか!?」
「ふむ……。あやつの心が、完全に支配されていなければ、なるやも知れぬな」
「お願いです、ガトーさま! わたしに光のオーブをお貸しください!」
「ふむ……。だが、ひとつ条件がある。そなた自らが、わしがおる氷竜神殿まで取りに来るがいい。さすれば、光のオーブは預けてやろう」
「氷竜神殿!?」
「だが、ここへ来るのは容易なことではないぞ。人間で、ここまで来れたのは、今までにわずかひとりだけ。そう……勇者アンリだけなのじゃ。もし、そなたがアンリと同じ真の勇者なら、このオーブは預けてもよかろう。どうじゃ、マルスよ、そなたに勇者アンリが進んだ道を試す勇気があるかな」
「はい! 行きます!」
マルスは躊躇わずに答えた。
「行かせてください! わたしにはどうしても光のオーブが必要なのです!」
「ならば、まずそこから北へ進み、マーモトードの砂漠を越えるのだ。そして、テーベの塔

を目指されよ。そこへ迎えの者を待たせておく」

と、すーっと白い光が消えて行き、やがて祭壇の周りは再び蠟燭の明かりだけの薄暗い空間に戻った。

そして、二度とガトーの声はしなかった——。

——第三巻に続く——

スーパークエスト文庫

ファイアーエムブレム

紋章の謎

VOL.2

1994年11月1日　初版第1刷発行
1997年5月1日　第4刷発行
定価はカバーに表示してあります。

著　者
高屋敷英夫
編　集
久保田あゆみ(MASK)久保雅一(小学館)
発行者
河井常吉
発行所
株式会社　小学館
〒101-01　東京都千代田区一ツ橋2－3－1
編集 03(3230)5998　販売 03(3230)5749
印刷所
共同印刷株式会社

ISBN4-09-440222-5

の全てがわかる!

〈任天堂公式ガイド
ブックシリーズ〉

―未公開パラメーターの解明―

上級プレーヤー向き

大好評発売中

任天堂公式ガイドブック
ファイアーエムブレム～ 紋 章 の 謎 ～

Professional

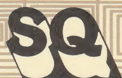
〈プロフェッショナル〉

小説／**高屋敷英夫**（たかやしきひでお）

岩手県出身。脚本家。『ルパン三世』『あしたのジョー』『めぞん一刻』映画『はだしのゲン』『火の鳥』シリーズ、『がんばれ!!タブチくん!!』シリーズなど数多くの人気アニメやアイドルドラマの脚本を手がける。著書に『小説スケバン刑事上・下』『小説ドラゴンクエスト』シリーズなど。

イラスト／**おち よしひこ**

昭和36年9月26日、東京都に生まれる。昭和59年、『ゾイド創世紀』（月刊コロコロコミック）でデビュー。
代表作『Ｇｏ！Ｇｏ！ミニ四ファイター』『スーパービックリマン』ほか。


SQ
SUPER QUEST BUNKO

ISBN4-09-440222-5

C0193 ¥533E

定価：本体533円＋税

SUPER QUEST BUNKO